
超古代の星

サマエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超古代の星

【Nコード】

N3428Y

【作者名】

サマエル

【あらすじ】

フォレストに掲載していた桜舞う星」続編。

今度は花の都巴里を舞台に、超古代の光『ウルトラマンティガ』の登場です。

超古代の星・前夜（前書き）

思えばモノローグに挑戦したのはこれっきりだったような……

超古代の星・前夜

<大正元年・フランス、パリ 某所>

その日は黒雲が空を覆い、滝のような雨が激しい勢いもそのままに降り注いでいた。

その雨の中を、一人の男がひた走っていた。

両手に何らかの荷物を抱えている事から、何か大事な物を運んでいるらしい。

やがてその人物は一軒の小さな教会を見つけると、急いでいるのか少々乱暴に扉を叩いた。

「………… ハイ、いかがなさいましたか？」

ややあつて、教会の神父が出て来た。

すると、男性は周囲に人の気配がない事を確認し、神父に言った。

「すまない、実は人に命を狙われている。危険が去るまで私の息子を保護していただけないか？」

「な、何ですって！？それは大変です、ハイ。」

神父がそう答えると、男性は両手に抱えていたものを、神父に手渡した。

それは、毛布に包まれた生後間もない赤ん坊だった。

「生きて危険をやり過ぎせたら、必ず息子を迎えに来る。では私はこれで…………。」

男性はそう言つて、雨の中に消えて行つた。

「………… 人が人のたつた一つの命を奪う………… 何と罪深い事でしよう、ハイ。」

大正元年、フランスは巴里某所で、一人の男性が惨死している姿が発見された。

物心ついた時、僕は一人だと気づいた。

親なんていない。

いつも一人ぼっち。

周りには集まって遊んでる子供達……。

みんな、僕と違って青い目してる。

.....。

.....違う。

みんな普通だ。

青い目をしているのは普通なんだ。

じゃあ僕は？

普通じゃないの？

この黄色い肌も.....

この黒い髪も.....

おかしいの.....？

だから.....

僕は一人なの？

一緒に遊べる友達も、

一緒に暮らす親も、

僕にはないの？

レノ神父に聞いても、神父は答えてくれなかった。

レノ神父も、僕の事嫌い？

ある日、金髪のスーツの男が言った。

「神父殿、こちらの教会に猿が紛れ込んでいるようですよ。」

そしたら、レノ神父はいつもより強い口調で言った。

「彼は立派な人間です。髪や肌の色の違いなど、関係ありません。」

……………そうか。

猿って、僕の事だったんだ。

僕は普通じゃない。

だって、猿にしか見られないんだから。

怒ればいいのか、泣けばいいのか………？

僕にはわからなかった。

ただ、

僕を産んだ親が、憎くて仕方なかった。

こんなガラクター一つ残して死んだ親が。

ああ、主よ………。

願わくば、

この憐れなる猿に、安らかな未来があらん事を…………。

気がつけば、僕はいつの間にか、神父のまね事をしていた。

でも、そんなある日…………

僕は突然声をかけられた。

「あのー、こんな所で何してるんですか？」

初めてだった。

神父の他に、僕に話し掛けてきたのは。

「……………」

驚いた。

驚いてしばらくその人を見ていた。

女の人だった。

僕よりちよつと年上で、赤い修道服を着ていた。

「……………君は……………驚かないの？」

尋ねてみた。

この黒い髪も、この黄色い肌も、不思議じゃないのだろうか。

すると、

「どうしてですか？」

当たり前のようにそう言った。

「だって、僕は髪の色も肌の色もみんなと違う。みんな、気味悪がって近付かなかった。君は、気味悪がらないの？」

「何言ってるんですか！黒い髪って初めて見ますけど、カッコイイですよ！」

「……………え？」

カッコイイ？

みんな嫌がったこの黒い髪が？

自分を褒めてもらった事なんて、今までなかった。

「私、エリカⅡフォンティーヌっていいいます。貴方は？」

初めてだった。

僕に自分から名前を覚えてくれた人は……………。

「僕……………、ダイゴⅡモロボシっていいいます。」

「へえ〜。ダイゴさんですか。強そうで素敵な名前ですね！」

「あ、ありがとう……………」

思わずお礼を言った。

嬉しかった。

僕に話し掛けてくれた事、

僕を褒めてくれた事、

僕に名前を覚えてくれた事、

そして…………、

僕に笑いかけてくれた事。

エリカさん。

彼女は、僕に笑顔をくれた。

嬉しかった。

幸せだった。

いつの間にか、エリカさんは僕にとって、神父以上に大切な人になった。

エリカさんがいるだけで、僕の心は明るいものになった。

これからもそうになると、僕は信じて疑わなかった。

そう……

あの男がくるまでは。

光を継ぐ者（前書き）

あの独特な掛け声を描き切れたか、少し不安だったり……（汗）

光を継ぐ者

いつもの澄み切った青空が、巴里の上に浮かんでいた。

「……………遅いなあ。」

周りで同年輩の子供達が遊んでいる中、ダイゴモロボシの姿は修道院の中にあつた。

とは言つても、今までのように暗い顔ではない。

誰かに会う事を楽しみにしている時の、そんな顔だ。

「おやダイゴさん、まだこちらにおられたのですか？」

「あ、レノ神父様。」

レノが修道院に戻つて来たのは、その時だった。

しかしダイゴが待つていた人とは違い、ダイゴは少しがっかりした表情になった。

「天気の良い日は、外へ出た方が良いでしょう？」

「うん……………。人を待つてるから……………。」

レノ神父の勧めを、ダイゴは遠慮がちに断つた。

誰かと待ち合わせをしている時は、片方が相手に見つけてもらつまで待つているのが鉄則である。

両方が動き回っていると、中々見つけられないからだ。

「そうですか……………。……………あの、ダイゴさん？」

「何？」

「もしかしてその待っている人と言うのは……………、エリカさんではないですか？」

「うん。そうだけど、どうかしたの？」

「いえ……………、聞いてみただけです、ハイ。」

一瞬心配そうな表情を見せるレノに尋ねるダイゴだが、何か言えない理由があるのか、レノははぐらかすように言っていると、修道院の奥に行ってしまった。

すると、外の方から何かが派手にぶつかる音と同時に、悲鳴が聞こえて来た。

「いったゝい！！」

「あ……………、やっと来た。」

待ち焦がれた声に笑顔を浮かべ、ダイゴは外に飛び出した。

そこには、赤い修道服を着た一人のシスターが、道の往来でひっくり返っていた。

「大丈夫？エリカさん。」

そう言って手を差し延べる。

すると、エリカはダイゴの存在に気付いた。

「あ、ダイゴさん……………」

差し出された手を掴んで立ち上がると、エリカは服についた汚れをはたき落とした。

「エへへ、恥ずかしい所見られちゃいましたね。」

そう言っで、エリカは照れた表情でおどけて見せた。

このエリカという人物、超がつく程の天然かつそっかしさで、普段からやたらと道端の看板にぶつかるわ、何もない所で転ぶわ、騒がしいシスターだった。

しかし、ダイゴにして見ればそんな所もエリカの愛嬌で、その様子についつい微笑んでしまうのだ。

「あゝ、ダイゴさん何笑ってるんですかー！？」

その微笑みを笑われたと思ったのか、エリカがむくれた。

その表情も可愛いと思いながら、ダイゴは弁解した。

「違うよ。ただ、可愛いなって……………」

「え……………？もう、ダイゴさんったら……………」

面と向かって可愛いと言われた事が嬉しかったのか、エリカは恥ず

かしそうな表情で両手の人差し指を合わせた。

「……………あ、そうだ！エリカ大事な事を忘れてました。」

「大事な事？」

おうむ返しにダイゴが尋ねると、エリカは無駄に力強く頷いた。

「そうです！スッゴク大事な事なんです！」

「……………で？」

「はい！」

「その大事な事って何な訳ですか？」

思い出した事が大事という事ばかり強調して、いつまで経っても本題に入らないエリカに、ダイゴが尋ねた。
すると、エリカは勿体振るように話し始めた。

「実はさっき、凄い人に会ったんです！」

「うん。で、どこが凄い人なの？」

「まあまあ焦らないで。夜になったら分かりますよ。」

「夜に……………？」

ますます分からないダイゴは首を捻る。

すると、それに気付いているのかいないのか、エリカはうつとりし

た様子で言った。

「あゝ、エリカもう感激です。正に夢みたいな出会いでした！」

「え……………」

その言葉に、ダイゴは一瞬不機嫌な顔を見せた。

何者か知らないが、エリカの表情はやたらと嬉しそうだ。よく見ると、頬も僅かに紅潮している。

少なくとも、自分には見せた事のない表情だ。

「エリカさん。それって一体誰かなの？」

怪訝な表情で尋ねるダイゴ。

するとエリカは、勿体振るように言った。

「今夜、レビューを見に来て下さい。そうすれば分かります。」

そう言つて、エリカは何か気付いたように立ち上がった。

「あ、困っている人発見！それじゃダイゴさん、また後で！」

言つや、エリカはバタバタと走って行ってしまった。

「……………」

その背中を無言で見つめるダイゴ。

結局わかったのは、エリカが何か凄い人に会つて、少なからず好意を抱いているという事だ。

「誰なんだ……………、一体……………」

顔も名前も知らないが、その凄い人というのに対して、ダイゴはいい感情を持てなかった。

「……………ハックション！！」

同時刻、日本大使館にて帝国海軍少尉、大神一郎は盛大なくしゃみをかました。

「ハハハ、大神君風邪かい？それとも、誰か君の噂をしているのかな？」

その様子に、思わず机に座った男が笑った。

鼻の下に立派に整えた髭を蓄え、真っ黒な髪を綺麗に分けている。

彼は迫水典通。

フランス在住の日本大使で、かつては政治の世界にその名ありと謳われた、『鉄壁の迫水』その人である。

そして、今くしゃみをした人物こそ帝国海軍中尉にして、帝国華撃団隊長、大神一郎中尉である。

彼は二度に渡る帝都防衛を果たした功績を買われ、特別留学生とし

て、このフランスにやって来たのだ。
最も、他に本当の目的があるのだが、彼がそれを知るのは次の日の
事である。

「……………お、もうこんな時間か。大神君、今日はこの位にしよう。」

「はい、分かりました!」

そう言って、書類を片付け始める二人。
すると、ふと迫水が口を開いた。

「そうだ、大神君。君に紹介したい所があるんだ。少し、時間をも
らえるかい?」

「はい。どちらに行かれるんですか?」

「フフ、それは行つてのお楽しみさ。」

パリには、昼と夜で二つの顔がある。
昼は太陽の明かりのもと、美しい建造物の数々が姿を見せ、夜にな
ればカジノやショーなど、昼とは別の魅力が現れる。

昼夜を問わず華やかな街。

それがパリなのである。

そのパリの真ん中に位置する所に、『テアトル・シャノワール』はあった。

シャノワール。

日本語にすると、黒猫という意味である。

それを示すように、入口のネオンには洒落たスーツとハットを身に纏った黒猫が描かれている。

シャノワールは、客に料理を振る舞いながらダンサー達のレビューを見てもらうという、ダンスレビューの正統派を貫いたスタンスで、パリでも屈指の人気を誇る店なのだ。

「……………ここか。」

そのパリ屈指の名店の前に、ダイゴの姿があった。

「ようダイゴ。またエリカさんのレビュー見に来たのか？」

「あ、ドミニクさん。」

ダイゴの姿に気付いた一人の青年が、声をかけて来た。

金髪と蝶ネクタイが特徴的な、とても若い青年だ。

すると、ダイゴも顔見知りらしく、笑顔で答えた。

「うん。エリカさんに来るように言われたんだ。」

「へえー、お前専用のダンスでもやるのかね？」

「ううん。何でも凄い人に会わせるって。」

そう言つと、ドミニクは考え込むように顎に手をやった。

「凄い人……………？もしかして、さっきの日本人じゃないか？」

「どういう事？」

ダイゴが尋ねると、青年はキョロキョロと辺りを見渡して耳打ちした。

「実はさっきな、迫水大使が見慣れない日本人連れて来てたんだよ。ほら、エリカさんって日本人に凄い興味あつたろ？」

そう言われ、ダイゴはエリカと出会つて間もない頃を思い出した。確かにエリカは、どういう訳か日本に興味を持っていて、ダイゴも一度何故丁髷をしていないのかと問い詰められた事もある。

「なるほど……………、流石ドミニクさん。何でも知ってるんだね。」

「へっ、まあな。このドミニクにかかれば、軽く解決さ。」

ダイゴに褒められたドミニクが気をよくする。すると、店の入口から鋭い声が飛んで来た。

「いらドミニク！仕事サボるんじゃないー！」

「わひっ！」

「あ、シーさん。」

見ると、メイドっぽい服を着た女性がドミニクを睨みつけていた。

彼女はシーと言って、レビューの司会と売店の売り子を兼任している。

因みにドミニクの仕事は入口での客案内である。仕事の内容上シーの方が上の立場であり、ドミニクもシーに頭が上がらなかった。

「あらあ、ダイゴ君じゃなあい。またエリカさんのレビュー見に来たのお？」

ダイゴの姿を見るや、シーが笑顔に早変わりした。この二人を始め、何度かシャノワールに出入りしているダイゴは、みんなの顔なじみになっていた。

ダイゴもまた、ドミニクやシー達を兄や姉のように慕っていた。

「うっん。エリカさんから凄い日本人に会わせてあげるって言われたんだ。」

「そうだ！なあシー、お前、迫水大使の連れに接待したろ？何か知らねえか？」

ドミニクが思い付いたように尋ねた。

確かにシーの仕事は司会と売り子。

もしかしたら、その人物と話をしたかもしれない。

ドミニクの予想は、ズバリ的中した。

「ああ、大神さんの事？かつこよかったわよう！正にサムライって感じでえー！」

「……………何か、話したの？」

恐る恐る尋ねるダイゴ。

すると、シーはうつとりした表情で答えた。

「ええ。売店にも顔出してくれたわよ？エリカさんのプロマイド買ってくれたしい〜！」

「…………プロマイド…………？」

その言葉に、ダイゴの表情が俄かに曇った。

確かシャノワールで売られているプロマイドは一枚50フランと高
額で、ダイゴも中々金がなくて買えない程だった。

それを買うという事は、その大神という人物もエリカの事を少な
らず気に入っているという事だ。

「…………。」

ダイゴは、まるで自分とエリカの間に距離が生まれたような気がし
た。

エリカが自分を捨てて、その大神とかいう日本人のもとに行くんじ
やないか。

そんな不安にかられた。

「…………その人、今何処にいるか分からない？」

「え？んつと、確か楽屋に行ったと思うけど…………。」

シーの口から楽屋という言葉が出るや、ダイゴは店内に突っ込んだ。

「あ！ダイゴ君！？関係者以外立入禁止よ！？」

「…………どうしちゃったんだ？ダイゴの奴…………。」

入口に残されたシーとドミニクの二人は、呆然とダイゴの背中を見ていた。

ダイゴはシャノワールの中をなりふり構わず走り回った。

その大神とかいう日本人を見つけるために。

見つけてどうするのかは全く考えていないが、とにかくダイゴはじっとしていられなかった。

そうしないと、エリカがいなくなるような気がしてならないのだ。

そんな事を考えながら走っていたからか、ダイゴは目の前に立つ人影に気付かなかった。

「わあっ!？」

止まりきれずに人影と派手にぶつかるダイゴ。途端に周囲の目がダイゴを向く。

「あいたたた……、君、大丈夫かい？」

頭を押さえて起き上がるダイゴに、声かけられた。

「うん、僕は大丈夫……。」

そう答えて目を開くと、ダイゴは思わず固まった。
何故なら、そこにいたのは……。

「あ、あの………?」

「…………。」

大神は焦っていた。

目の前には自分と同じ黒髪の少年が、頭を押さえてこちらを睨んでいる。

何か自分に敵意を示すような、そんな表情だ。

「だ、大丈夫かい?」

「…………。」

もう一度尋ねてみるも、帰ってきたのはやはり沈黙。
どうしたものかと悩んでいる大神のもとに救いの手が差し延べられ

たのは、その時だった。

「あ、大神さん見つけた！」

「エリカくんか……………」

見ると、レビューを終わらせて修道服に着替えたエリカの姿があった。

「どうしたんだい？やけに慌てているみたいだけど……………」

エリカと知り合ったのは今日が初めてだが、初対面の時はまだ落着きがかった。

何を騒々しく騒いでいるのか尋ねると、エリカはロビーを指差して言った。

「ロビーで迫水大使が待っていましたよ？怒ってたから呼びに来たんです！」

「ハッ！しまった！もうこんな時間じゃないか！」

大神は青い顔をして、一目散にロビーへ走って行った。

迫水から30分にロビーに来るように言われていた事を思い出したのである。

「……………エリカさん。」

「へ？……………あ、ダイゴさん！いつからそこに？」

「さっきからいたよ……………」

今更気付いたエリカにため息をつき、ダイゴはエリカに聞いたのだ。

「エリカさん、昼間言ってた凄い人って……。」

「はい！大神さんがどうかしましたか？」

「いや、別に……。」

真顔で答えるエリカにそうはぐらかし、ダイゴは背中を向けた。心が洗われるはずのエリカの笑顔を見ると、何故か無性に悲しくなったのだ。

おそらくは、あの大神という男のせいだ。

「そうだ！ダイゴさん！大神さんの事どう思いました？」

「……ビックリしたよ。」

「やっぱり！ダイゴさんもそう言ってくれて思ってたよ。」

良い意味に受け取ったのか、笑顔を浮かべるエリカだが、ダイゴはそんな意味で答えた訳ではなかった。

「（大神……。何なんだあの人は！？）」

いきなり現れたかと思えば、瞬く間に周囲に溶け込んでいるあの青年に、ダイゴは驚きと共に言い知れぬ怒りを覚えた。

「（冗談じゃない……！エリカさんを、あんないきなり現れた奴

に奪われるなんて……………！」

14年間生きて来て、エリカは唯一心を許した存在なのだ。
シャノワールの人達も好きだが、エリカとは違う。

その大切な人が、いきなり現れた日本人に奪われるなど、到底納得
できるものではなかった。

「ウッッサッサッサ！」

静かな沈黙に包まれた夜の巴里を、一つの影が歩いていた。
ウサギを連想させる独特な笑い声に混じり、刃物が擦り合う音が聞
こえる。

「感じる！感じるピョン！あの力が、この近くにあるピョン！」

それは、人の姿をしたウサギの怪物だった。
シルクハットとサングラスで着飾る様子は巴里らしくお洒落だが、
その顔から滲み出る残虐性は隠しきれない。

「何としても見つけ出すピョン！オイラ達に刃向かったあの男のよ

うに、このシゾー様がズタズタに切り裂くピョン！！」

シゾーと名乗った怪物は、そう言って両手の巨大なハサミを動かした。

「切るピョン、そいつもラビツと切るピョン！グチャグチャに切り刻んでやるんだピョン！！」

翌日、大神の姿はシャノワールからさほど遠くないカフェにあった。昨夜、アパートメントに送ってくれた迫水から昼頃大使館に来るように言われたため、腹ごしらえをする事にしたのだ。

「ここにするか……。すみません、注文をお願いします。」

よさ気な席に座り、ギャルソンに声をかける大神。

しかし、ギャルソンは遠目でこちらを見るばかりで反応しない。

「困ったな……。無視してるのかな……。」

ありえない話ではなかった。

日本人は、肌や髪の色が西洋人と全く違う。

その事から、得体の知れない人種と敬遠されるのは、この戦前の時代では仕方ない事だった。

とはいえ、これでは腹ごしらえも何もあつたものではない。

どうしたものかと考えていた大神の耳に、聞き覚えのある声が聞こえて来たのは、その時だった。

「あいたっ!!」

何かがぶつかるような音と共にその声を聞いた大神が後ろを振り向くと、そこには見覚えのあるシスターがフラフラと歩く姿が見えた。

「エリカくん……。そうだ、彼女に頼めば……。」

東洋人という事で来ないなら、フランス人のエリカに頼めばいい。大神はそう考え、エリカの名前を呼んだ。

「おーい、エリカくん！」

「はい。……。あれ？誰か呼んだと思っただけ……。」

呼ばれて返事はしたものの、それが分からず辺りをキョロキョロと見渡すエリカ。

大神は何とか気付いてもらおうと、両手を大きく広げて目立つようにアピールする。

すると、ようやくエリカが大神に気付いた。

「あ、大神さん！こんな所で会うなんて、これはもう運命ですね！」

運命と呼ぶべきか偶然と呼ぶべきかはさておき、エリカはトコトコと大神の所へやって来た。

「何もないテーブルで何してるんです？もしかして日本の儀式ですか？」

「いや…………注文を取りに来てくれなくて…………。」

何故そんな発想に繋がるのかと不思議に思いながら大神が答える。すると、それを指し示すように腹の虫が鳴いた。

「じゃあ、私も何か食べます！すみませ〜ん！！」

そう言つて手を振ると、ギャルソンはさっきまでの対応が嘘のようにやって来た。

「私はパン・オ・ショコラとホットチョコレート！大神さんは？」

「じゃあ、あの人と同じものを。」

期待通りに注文を取る機会をくれたエリカに感謝しつつ、大神は奥のテーブルに座った老紳士を指差して言った。

大神は巴里に来るのは初めてだ。

日本とは少なからず食事の習慣も違うだろうし、実際メニューを見ても大神には初めて見る名前ばかりでちんぷんかんぷんだった。

こついう場合は、無理に考えずに周囲の人が食べる物と同じ物を頼むのが正解だ。特に現地の人なら、その時間に最も適した注文をするため、俗に言うゲテモノを避ける事にも繋がる。

無論エリカと同じものを頼んでもいいのだが、パンも飲み物も甘いのは遠慮したい。

「クロワッサンにコーヒーですね。すぐにお持ちいたします。」

そう言つて、ギャルソンは足早に店内に戻る。

「ふう、エリカくんのおかげで、やっと朝食にありつけるよ。」

「巴里の人って気難しいですから、外国人には敬遠するのかもしれないですね。」

安堵のため息をつく大神に、エリカが答えた。

ヨーロッパ、特にフランスとなると、革命で民主主義を勝ち取った名残から自分達を誇らしく考える所がある。

何処の馬の骨とも知れない東洋人に気安く接する事は、誇りあるフランス人のする事ではないと考えたのかもしれない。

最も、本当は初めて見る外国人に敬遠する食わず嫌いなだけであるが。

「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ。」

程なくして、ギャルソンが注文の品を持って来た。

「それじゃあ大神さん。早速いただきましょう!」

余程腹が減っていたのか、エリカは素早くカップを手を取った。

「うん、美味しい!……でも、ちょっと苦いかな……?」

一口味わって首を傾げるエリカ。
苦いのも当たり前だ。

何故ならそれは……。

「エリカくん……、それホットチョコレートじゃなくて俺のコーヒー……。」

「えっ……！？あ、あの……私、頼んで来ます！」

やってしまったという顔で立ち上がるエリカ。
しかしその時、エリカは後ろを歩くギャルソンにぶつかってしまった。

「あらっ！？」

その拍子でバランスを崩し、エリカは前のテーブルに倒れ込む。
すると、その時に掴んだパラスルがへし折れて奥のそれを薙ぎ倒し、
テーブルは全て将棋倒しになってしまった。

「エリカくん！」

その余りに悲惨な状況に、大神は思わずエリカに駆け寄る。
その時、別の鋭い声が飛んだ。

「……いつにも増して騒がしい事だな、エリカ。」

「あ、グリシー又さん。」

その声の主は顔を向け、エリカが言った。
長く美しい金髪を右肩に流し、深海を思わせる青い服と瞳が特徴的
な、エリカと同年輩の少女がそこにいた。

「…………エリカ、この男は？」

グリシーヌと呼ばれた少女は、目線だけを大神に向けて尋ねた。

「大神一郎さんです。日本からいらしたそうです。」

「日本人…………、ふん、またか…………。」

以前にも日本人に会ったような口ぶりで、グリシーヌは露骨に嫌悪な表情を見せた。

「まあいい、エリカの知り合いなら名乗っておいてやろう。私はグリシーヌ・ブルメール。ノルマンディの血を引く、誇り高い貴族だ。」

「あ、自分は大神一郎…………。日本大使館でお世話になっています。」

その容姿からは想像できない威圧感に圧倒されながらも、大神は自己紹介をする。

「高が東洋の分際で、巴里観光か？」

「いえ…………留学生として…………。」

随分上からの物言いに圧倒されつつ返事をする大神。すると、エリカがフォローするように口を挟んだ。

「ほら、グリシーヌさん。例の一件をまだ気にしてるんですか？だから日本やダイゴさんの事…………。」

「エリカ！余計な事は一切しゃべるな。……………大神一郎とやら、巴里の街を見る事は構わんが、見苦しい真似はするな。」

他言無用の事なのか、グリシー又はエリカに釘を刺し、大神にそう吐き捨ててカフェを後にした。

「……………あ、あの人は？」

「グリシー又さんですか？私の先輩みたいな人で、ちょっと怖い所が……………」

エリカがそう言いかけた時だった。

その怖い先輩がいつのまにか戻っていたのである。

「……………エリカ、呼んだか？」

「な、なんでもありません！」

「そうか……………」

そう言つて、グリシー又は今度こそその場を後にした。

「朝ごはん、もう一度頼みましょうか。すみません！」

何とかその場を取り繕うエリカ。
しかし忘れてはいけない。

外のテーブルを全て薙ぎ倒している事を。

当然迷惑千万のギャルソンの怒りは頂点な訳で……………。

「あの……、もしかして怒ってます？」

「……………」

更に逆なでするような一言に、ギャルソンの拳がワナワナと震えた。つまり、怒っているという事だ。

「あゝん、ごめんなさあゝい!!」

「エ、エリカくん!？」

一目散に走り出すエリカを、大神は慌てて追い掛けた。夢を見た。久しぶりに、あの日の夢だった。

降りしきる雨の中、教会に預けられたあの日。

戻って来ると約束しておきながら、戻って来なかった父親。

「また……………あの夢か。」

それだけではなかった。

見た事もない太古の遺跡に自分はいて、目の前に立つ巨大な石像が語りかけて来たのだ。

……………光を継げと。

「どういう事なんだ……………？」

ポケットにしまっている彫刻を取り出して見る。

錆びた青銅で出来た、今にも壊れそうな彫刻。

しかし、ダイゴにしてみれば両親との繋がりを示す、たった一つの遺品だった。

エリカと出会うまで、ダイゴはこんな夢ばかり見ていた。

それをまた見るようになった事は、ダイゴにエリカがいなくなる事を暗示するように思えた。

「エリカさん……………」

ダイゴは窓の外に降る雨を見て、今日も会う約束をした人の名前を呟いた。

一方そのエリカは、テルトル広場にて大神と雨宿りをしていた。カフェを飛び出して広場まで来た所を雨に降られ、こうして建物のしたで雨上がりを待っているのだ。

「雨……………早く止まないかな……………」

ふと、エリカが呟いた。

「どうしたんだい、エリカくん。急にしんみりして……………」

さっきまでの快活さが嘘のように寂しそうな表情のエリカを気遣い、大神が優しく声をかける。

すると、エリカはポツリポツリと話し始めた。

「雨を見ると……………、私が修道院に入れられた時を思い出して……………」

悲しい思い出なのか、エリカは辛い表情で一旦止めた。

「昔から、私の周りでは色々な奇跡が起こったんです。」

「奇跡？」

「人の病気が治ったり……………。荒れ地に湧き水が出たり……………。」

その言葉に、大神は昨日初めてエリカに会った時の事を思い出した。暴走した自動車に乗っていたケガ人を一瞬で治癒させた力。大神の予想が正しければ、それは霊力によるものだった。

「始めはみんな、喜んでくれたんです。……………でも、その内にみんな私を気味悪がって……………」

「それで……………、修道院に入れられたんだね？」

大神が言つと、エリカは微かに頷いた。

「……………大神さんも、私の事、変だと思えますよね……………？」

「いや、素晴らしいと思うよ。」

「え？……………素晴らしい……………？」

即答した大神に、エリカは目を丸くした。

「そうさ。気にする事はないよ。」

「大神さん……、ありがとうございます……………」

大神の言葉に、エリカは思わず目頭が熱くなった。

今までこの事を話して、距離を置かなかった者はいない。しかし、この大神は違った。

誰もが驚く事を、まるで以前も見た事があるかのように、理解を示してくれたのだ。

「エリカくん、聞いてくれ。実は、俺のいた日本にも、君のように不思議な力を持つ女の子がいた。」

不思議な力を持つ女の子達。

大神は名前こそ口に出さなかったが、それは間違いなく帝国華撃団花組だった。

「……………私も、その人達みたいになれますか……………」

「なれるさ。きつとなれるよ。」

まるでそれを保障するように言う大神。

その様子に、エリカはようやく笑顔を取り戻した。

「ありがとうございます！これで私も……………ちゃんと戦えると思います。」

「戦う……………？一体何と？」

「え！？あ、いや……………な、何でもありません！」

やはり口外出来ない事なのか、エリカは慌ててはぐらかした。すると、それと時を同じくして雨音が止んだ。

「そうかい？……………あ、雨も止んだみたいだよ？」

「本当だ……………。へへ、私、雨上がりの匂いって大好きなんです。」

見ると、雨を降らせていた雲の隙間から、眩しい日差しが差し込んで来た。

まるで、エリカの心に陽がさしたように。

その時、教会の鐘の音が響いた。

「あっ！私教会にダイゴさんを待たせてたんです！大神さん！先に失礼しますね！！」

そう言うと、エリカは勢い良く広場を飛び出した。

「いったゝい！」

しっかり看板にぶつかって。

「エリカくん……………。ぶつかる位なら走らなければいいのに……………。」

最もな事をばやきつつ、大神も仕事のために大使館へ歩き出した。

「な、何と！ダイゴさん、それは本当なんですか、ハイ。」

ダイゴから夢の話を聞いたレノ神父は、驚きの表情を浮かべた。いつもとやや様子の違うレノ神父に驚きつつも、ダイゴは頷いた。

「うん。昨日も見たんだ。神父様、何か知ってるの？」

ダイゴが尋ねると、レノ神父は神妙な面持ちで話し始めた。

「実は、ダイゴさんのお父上より、伝言を授かりましたです、ハイ。」

「伝言？」

「ハイ。貴方がそのような夢を見るようになったら、伝えるように言われてましたです。」

そう言って、レノ神父はダイゴの父が残したという伝言を伝え始めた。

「もしも夢で巨人の導きがあれば、その導きに従うようにと……。」

「巨人の導き？それって夢に出て来た、あの……………」

「正しくそれです、ハイ。」

重々しく頷き、レノ神父は続けた。

「そして、導きに従った後、巴里に災いを齎す者を討つ光が現れると……………」

「光……………」

やや抽象的な表現に首を傾げるダイゴ。
すると、レノ神父は一枚の紙切れを取り出した。

「これは……………」

「その時が来たら貴方に渡すように言われていた地図です。カタコンベは分かりますか？」

「うん。知ってるけど……………」

カタコンベは、古代の巴里の建造物を残した地下の都市で、言わばもう一つの巴里だ。

確かにそこなら、まだまだ未発見の隠し部屋等が沢山あってもおかしくない。

「そこに……………、父さんが残した何かがあるんだね？」

「ハイ。何かは分かりませんが、間違いありませんです、ハイ。」

「それじゃあ、エリカさんとは会えないな……………」

ダイゴが残念そうに呟いたその時、教会の扉が突然開かれ、話題の人物が顔を出した。

「ダイゴさん、お待たせしました〜！」

「あ、エリカさん……………」

エリカの姿に少しだけ笑顔になるダイゴ。
すると、エリカは開口一番ダイゴに謝罪した。

「ごめんなさい、ダイゴさん。待たせちゃって……………」

「ううん、いいよ。それに……………」

気遣ってくれたエリカに感謝しつつ、ダイゴは申し訳なさそうに答えた。

「ごめんね、エリカさん。今日、ちょっと用事が出来たから……………」

「

「用事？……………もしかして、こっそり美味しいプリンでも食べに行くんですか!？」

「いや……………、ちょっと探し物を……………」

何故プリンに話が飛ぶのか不思議に思いつつ、ダイゴは探し物と答えた。

父は今までレノ神父にも口止めしていたのだ。

カタコンベに何があるのかは分からないが、余り人に知られるべきものではない事は確かだ。

それに、カタコンベの秘密が父の死に関係している事も十分考えられる。

もしそうなら、何かしらの危険を伴う事になるだろう。

そんな危険な調査に、エリカを巻き込みたくはなかった。

「それじゃあ神父様、行つて来ます。」

そう言つて出発しようとするダイゴ。

しかし、ここで待ったの声がかかった。

エリカである。

「ちょっと待つて下さい！探し物ならエリカも手伝います！」

「えっ！？いや、でも……………」

「遠慮しないで！困つてる人を救うのが、シスターの勤めです！」

「いや、まあ、そうなんだけど……………」

突然の申し出に驚くダイゴ。

確かにエリカと二人になれるのは願つてもないが、流石に危険が伴うとなると話は別だ。

すると、ここでエリカがトドメの一言を口にした。

「……………ダイゴさん、エリカがいちゃ迷惑ですか？」

「ええっ！？いや、そんな事は全然……………！！！」

悲しそうなエリカの表情に、慌てて弁解するダイゴ。
すると、その言葉でエリカは元の笑顔に戻った。

「やっぱり！ダイゴさんならそう言ってくれると信じてましたよ！」

「……………ハハハ……………」

すっかり乗り気なエリカの後ろで、ダイゴの渴いた笑いが漏れた。

「ダイゴさん……………、お氣をつけて……………」

その後ろ姿に、レノ神父は声をかけて見送る事しか出来なかった。

ダイゴとエリカは地図を頼りに、カタコンベの奥に入り込んだ。

「なんだか暗くて、氣味悪いですね。」

ダイゴの後ろで、エリカが怖ず怖ずと呟いた。カタコンベはパリの
観光名所の一つだ。

道に迷わないように、順路に沿って明かりはついているが、地図が

示す道のりはその順路から大きく外れている。

当然そんな道に明かりなどなく、二人は暗闇に包まれた道を、懐中電灯の明かりと地図だけを頼りに進んでいた。

「カタコンベの中にこんな通路があつたなんて……、エリカ全然知りませんでした。」

初めて通る隠し通路を進む中、背中のエリカが呟いた。

「僕も初めてだよ。まさか父さんがこんなものを……。」

厳密には、おそらく父より以前の代から守られていたのであろう。この通路からは、想像もつかない長い年月を感じた。

「……………ダイゴさん、あれ!？」

ふと、後ろのエリカが上の方を指差した。

「……………あれは!！」

その方向に光を向け、ダイゴは驚いた。

そこにいたのは、エッフェル塔と見間違わんばかりに巨大な、一体の巨人の石像だった。

日本でいう仏のような風貌は、正しく光を連想させる。

「……………これが、父さんの残した……………」

石像の神々しさに目を奪われるダイゴとエリカ。

その時、真上の地上から突然の悲鳴が聞こえて来た。

「キャーーーーッ!!」

「悲鳴!?! 一体何処から……?」

「上です! 待って下さい! 今行きますからね!」

人助けしたいというシスターの血が騒ぐのか、エリカは一目散に走り出した。

「ああっ、ちょっと! エリカさん!!」

たちまち姿の見えなくなったエリカを慌てて追い掛けようとするダイゴ。

その時、真後ろで何かが光った。

「!?!」

その光に振り返ったダイゴは、思わず絶句した。
光を放っていたのは、あの石像だったのだ。

まるで長い眠りから目覚めたような輝きを放つ石像に魅入られ、指一本動かせないダイゴ。

そのダイゴの耳に、何者かの声が聞こえて来た。

「……………来たか……………光を継ぐ者……………」

「え……………」

それは、目の前の石像だった。

どういう訳か知らないが、石像は意思を持ち、ダイゴに語りかけているのだ。

「貴方は……………一体……………」

「古代に封じられし……………災いを討つ者……………」

その言葉に、ダイゴはレノ神父の言葉を思い出してハッとした。

（そして、導きに従った後、巴里に災いを齎す者を討つ光が現れると……………。）

「（まさか……………、さっきの悲鳴はその災い……………！？）」

レノ神父の言葉が真実だとしたら、このパリに災いが起きようとしている事になる。

「目覚めの時は来た……………。光を継ぐ者よ、今こそ封じられし力を

目覚めさせる時だ。」

石像がそう言った時、まばゆい閃光が走った。
その眩しさに思わず目を閉じるダイゴ。
そして数秒経って目を開くと、ダイゴはまたしても驚いた。

「……………石像が……………！！」

何と、目の前にあった石像が忽然と姿を消していたのだ。
ついさっきまで目の前にあったのに。

「……………災い……………光……………」

ダイゴは無意識の内に、石像の言葉とレノ神父の言葉を繰り返した。
災いを討つ光。そして石像は、自分が光を継ぐ者と言った。
という事は……………、

「……………まさか……………、僕がその光を継ぐって言うのか……………」

という事は、自分が光となってパリを災いから守るという事になる。
守れるのか？自分にパリが。

そう自問した時、ダイゴの脳裏にエリカが浮かんた。

「エリカさん……………、そうだ！エリカさんが！！」

先程の悲鳴がもし災いであるなら、エリカも巻き込まれた可能性が
高い。

エリカの無事を祈りながら、ダイゴは走り出した。

ここで、時間は災いが起きる少し前に遡る事になる。

「ここが舞踏会の会場か。流石に立派だな……………」

青空の下、豪華な屋敷の庭に広がる会場の隅に、大神の姿があった。この日、大神は急な用事の入った迫水に変わってライラック伯爵夫人の主催する舞踏会に大使代理として参加したのだ。一応の正装はしているが、それでも目の前にいる貴族達の華やかさに比べれば月とスッポンである。

その時、気まずさを感じる大神の肩に手が置かれた。

「……………見ない顔だね。警察だが、少しいいかな？」

「いいつ!?じ、自分は迫水大使の代理として……………」

振り返って見ると、やや太った警官が、怪しげにこちらを見ていた。大神は慌てて弁解しようとするが、それより先に別の声がした。

「仕事熱心だねえ警部。その人はあたしの客だよ？」

その聞き覚えのある声にまさかと思い、大神は振り返った。すると、そこにはこのパーティーの主催者が、二人の秘書を連れていた。

「ようこそ、ムツシュ大神。あたしのパーティーに来てくれるとは、嬉しいねえ。」

「グ、グラン・マ！？じゃあライラック伯爵夫人とは……………」

大神はあからさまに驚いた。

目の前にいるライラック伯爵夫人は、昨夜シャノワールで会ったオーナーのグラン・マその人だったからだ。

「そうさムツシュ。女はいくつもの顔を持ってるんだからね。」

大神の驚く表情に満足しながら、グラン・マは隣に立つ警官に手を向けた。

「紹介するよムツシュ。このパーティーの警備の指揮を取っているエビヤン警部さ。」

「夫人の客人でしたか…………、これは失敬。巴里市警のジム・エビヤンです。」

「はじめまして、エビヤン警部。日本大使館の大神一郎です。」

誤解してしまった事を詫びながら、挨拶として握手を求めるエビヤン。

大神もそれに気づき、お辞儀ではなく握手を返す。

「さあ、パーティーを楽しんでおくれ。メル、シー、ムツシュをもてなして。」

グラン・マがそう言うと、後ろに控えていた二人の秘書が前に進み出た。

「ウィ、マダム。ムッシュ大神、どうぞこちらに。」

「冷たいものを用意してますから。」

「ワインでよろしいですか？ミネラルウォーターもございますが……。」

「あ、すみません。ワインをいただきます。」

青く短い髪ของメルに尋ねられた大神は、一瞬考えた後前者を答えた。理由は簡単。目の前にはワインしかないからである。

ミネラルウォーターもあるのだろうが、取りに行かせるのは少々忍びない。

そんな事を考えていた大神の目に、見覚えのある人物の姿が写った。

「あれは……、グリシーヌか？」

長い金髪と青い服。間違いない。

すると、ワインを差し出したメルが驚きの表情を見せた。

「グリシーヌ様とお会いになられていたのですか？」

「グリシーヌ様は、ノルマンディ公の血を引く、ブルーメール家の御息女なんですよ。」

シーも同じように、驚いた表情を見せる。

グリシーヌはこのパリで名門中の名門。

悪い意味ではないが、大神が知り合う機会があつたとは考えにくい。それに大神も、会ったとは言え良い印象を持たれたようではなかった。

「でも、何だかこつちを睨んでいるようだけど……………」

大神がシーにそう言った時、後ろから声が聞こえた。

「それは、君が珍しいからですよ。黄色い東洋の猿がねえ。」

それは、一人の貴族だった。

名前はダニエルというのだろうか。

右手の指輪の外側にそう名前が彫つてある。

「まあ、ここはミー達のような上流階級が集まる社交場ですから。君のような不釣り合いな動物には来て欲しくないと、まあそういう事です。」

「何……………！」

「ほう？何か言いたい事でも？」

ぬけぬけと挑発するダニエル。

しかし、大神は睨むだけで怒鳴ったり殴ったりはしなかった。

そんな事をすれば、自分を代理に任命した迫水や、パーティーを主催したグラン・マに迷惑がかかるからだ。

ダニエルも、それで大神は手が出せないと思い、すき放題言っているのだ。

「ムツシュ……………サムライ……………」

じつと耐え忍ぶ大神を助けられず、シーは残念そうな顔で大神を見つめる。

一方のダニエルは、更に大神を煽って来た。

「おや、どうしました？黄色い猿が、怒って赤くなりましたね。」

「……………」

怒りを堪えてダニエルを睨む大神。

すると、グリシーヌが騒ぎを聞いて歩み寄って来た。

「ほら見たまえ。グリシーヌ様も君が目障りなようだ。」

自分の代わりに大神を追い出してくれるに違いない。

そう考えていたダニエルだが、グリシーヌの怒りの矛先は大神ではなかった。

「目障りなのは貴公の方だ。今すぐ失せろ。」

「へっ？」

「失せろ！二度と顔を見せるな！！」

「ひえ〜！！」

グリシーヌに威嚇されたダニエルは、情けない悲鳴を上げてパーティー会場から逃げ去った。

他者を愚弄するダニエルの言動が、グリシーヌの気に障ったのだ。

「貴公も貴公だ。愚弄されて何故戦わん！」

続いてグリシーヌは、大神を指差して問いただした。ダニエルの言葉は人種差別もいい所である。怒らないはずがない。

にも関わらず言い返す事もしない大神の態度も、グリシーヌは気に入らなかった。

「それとも、何か理由があるのか？」

「……………別に。相手にする程の奴じゃない。」

本当はグラン・マと迫水に迷惑をかけたくないのが理由だが、おそらくグリシーヌは納得しないと考え、大神は敢えて嘘ぶいた。すると、グリシーヌは納得しながらも、大神に忠告した。

「……………確かに、奴はつまらん小物だな。だが、人は誇りによって生きるものだ。貴公がそれでは、来たる戦いに勝利等有り得ん！」

「戦い……………？何の事だ？」

エリカに続いてグリシーヌも口にした言葉の意味が分からず、大神が尋ねる。

しかしその直後、大神はその戦いの意味を身を以って知る事になる。

「キヤーーーーーッ!!」

突然の爆発が、パーティー会場を襲った。
優雅な笑い声が、たちまち悲鳴に変わる。

「爆発!?何が起こったんだ!?!」

見ると、無数の野ウサギが現れ、会場を荒らしていた。
その中心に、大神は奇怪な影を見た。

「な、何だあれは!ウサギか?」

顔はウサギだが身体は人間なみに大きく、巨大なハサミをシャキシ
ヤキと鳴らしている。

平たく言えば、ウサギ人間といった所だろうか。

「この近くに間違いないピョン!さあ、ケガしたくなかったら、こ
のシゾー様に光の証を渡すピョン!」

人々が逃げ惑う中、シゾーと名乗るウサギはハサミを鳴らした。そこに、立ちはだかる人物がいた。グリシー又だ。

「待て、そのウサギ！」

「お前に用はないピヨン。オイラが探しているのは光の証を持つ者だピヨン！」

「下らぬざれ言を……、成敗してくれる！！」

言うや、グリシー又は何処からともなく巨大な戦斧を取り出し、シゾーに斬り掛かった。

「えゝい、邪魔をするなピヨン！こうなったらお前から先に刻んでやるピヨン！」

シゾーも負けじとハサミを繰り出す。

激しくぶつかり合う二つの刃。

すると、程なくしてグリシー又の動きが鈍り始めた。

やはり相手は人間でないために、生身では限界があるのだ。

「こやつ……、やるではないか！こうなったら差し違えても……」

「無理をするなグリシー又！相手をよく見ろ！生身で勝ち目はない！」

そう言う大神だが、グリシー又は尚もシゾーに攻撃を仕掛ける。

その時、横から無数の弾丸がシゾー目掛けて撃ち込まれた。

「そこのウサギさん！好き勝手にはさせないわよ！！」

それは、何とエリカだった。

悲鳴を頼りにカタコンベの地下通路を抜けたエリカは、たまたまパーティー会場の近くの地上に出て来たのである。

「エリカ……………、この男がそうだ。」

「えっ！？それじゃあ日本から来る人って、大神さんだったんですか！？」

「私もさつきグラン・マから聞いたばかりだが、間違いない。」

「それじゃあ、一旦本部に戻って……………」

「なんだ？どどういう事なんだ？」

勝手に話がまとまりつつある中、一人状況を飲み込めない大神が尋ねる。

戦いだのなんだの、訳が分からない。

すると、そこへエビヤン警部が部下の警官隊を連れてやって来た。

「あのウサギを狙え！撃てえ！！」

エビヤン警部の号令で、警官隊は一斉にシゾーに発砲する。

「くっ、こんな時に光武があれば……………！」

悔しげに大神が呟いた時、エリカが答えた。

「あります!!光武なら………霊子甲冑ならあります!!」

「何っ!?霊子甲冑があるだと!!」

「ついて来い、大神一郎!!」

そう言って走り出す二人を、大神は慌てて追いかけた。

「エリカさん!………こ、これは………!?!」

ダイゴがカタコンベから地上に出て来たのは、丁度大神達が見えなくなった辺りだった。

「ウサツ!見つけたピョン!!」

すると、ダイゴに何かを感じたシゾーがダイゴの前に立ちはだかった。

「お前!光の証を渡すピョン!!」

「わあっ！？な、何でウサギが！」

「ウサギって言うなピョン！さあ、刻まれたくなかったら、大人しく光の証を渡すピョン！」

「光の証？何の事だよ！？」

初めて耳にするものを渡せと言われても渡しようがない。すると、シゾーはハサミを構えた。

「仕方ないピョン！ならば殺して奪うまでだピョン！」

「わ、……………うわあああっ！！！」

ハサミで威嚇されたダイゴは、一目散に逃げ出した。

「逃がさないピョン！光の証を渡すピョン！」

霊子甲冑があると聞いて大神が案内された所。それは、何と昨日迫水に招待されたシャノワールだった。

「シャノワール……？こんな所に靈子甲冑があるのか？」

「いいから早くー！」

訝しむ大神だが、エリカに急かされて中に入る。

「さあ、私の後について来て下さい！」

「遅い！もう、全員集合しているぞ！」

「大神さん、きちんと着替えられましたか？」

「あ、ああ。でも、その格好は一体……？」

いつもと違い、色違いの戦闘服を身に纏った二人に驚きを隠せない大神。

あのシャノワールの地下に、こんな設備があったなど、思いも寄らない事だった。

そこへ、更に驚くべき人物が現れた。

「………全てを明らかにする時が、来たようだな。」

「迫水大使！」

「大神君………、いや、大神中尉。君は留学のためだけに巴里に来

たのではない。新たに結成された、『巴里華撃団花組』の隊長として、この巴里に配属されたんだ。」

「巴里華撃団……………」

想像もしなかった事実には、驚きを隠せない大神。当たり前だ。

何せ大神は今まで、巴里には留学と聞かされていたからだ。

「そして、巴里華撃団の総司令が……………」

そう言つて、迫水は後ろに座る人物に目をやった。そこには、大神のよく知る人物が座っていた。

「ようこそ、ムッシュ大神。巴里華撃団は、貴方を歓迎するわ。」

「ライラック伯爵夫人！！まさか、貴女が……………！！」

そのまさかだった。

ライラック伯爵夫人はシャノワールのオーナーグラン・マにして、巴里華撃団花組の総司令だったのである。

「そうさ。そして、隊員はこの二名。エリカ・フォンティーンと、グリシーヌ・ブルーメールだよ。」

「隠してた訳じゃないんです。大神さんが隊長とは思わなくて……………」

「……………よろしく頼む。」

改めて大神に挨拶を述べる二人。
すると、グラン・マが口を開いた。

「さてムツシュ。色々聞きたい事があるんじゃないかい？」

「いえ！今は一刻も早く出撃準備を！」

大神は迷わず即答した。

今は緊急事態である。

気になる事はあるが、説明は敵を倒してからで十分だった。

「よし、じゃあムツシュの见たいものを見せてあげるよ。」

そう言つて、グラン・マは徐に立ち上がった。

「ウダウダしている奴あ、セーヌ河に叩き込むぞ！さっさとやりやがれ！！」

地下の格納庫。

そこには、帝劇を想起させるような空間が広がっていた。
その空間内で、作業着を着た人達が慌ただしく動いている。

おそらくは、光武の整備に追われているのだろう。

「威勢がいいね、ジャン班長。いつ見ても惚れ惚れするよ。」

「オーナー、出撃準備中は立入禁止ですよ。」

ジャンと呼ばれた男が、やれやれという口調でため息をついた。
どうやら彼が、巴里華撃団の整備担当らしい。

「つれないねえ。ムツシュ大神、霊子甲冑の面倒を見てくれるジャン整備班長だよ。」

「アンタが隊長さんか！整備班長のジャン・レオだ。」

「は、はい。ジャン班長、よろしくお願いします！」

熱い握手を交わす二人。

すると、ジャンは大神を格納庫の奥に案内した。

「ほら、こいつが隊長さんの乗る『光武F』だ。」

「凄い……、これが俺の光武なのか！」

かつて帝国華撃団時代に扱っていたそれと遜色ない完成度に、感嘆の声を上げる大神。

白に青いラインが入ったシリウネス鋼を用いた強固な装甲と、二刀の大太刀。

シヤノワール整備班と神崎重工の科学の結晶が、そこにはあった。

「それだけじゃねえ。俺の可愛いもう一人の子供を見せてやるよ。」

そう言つて、ジャンは大神を更に奥へ連れてきた。

「これは……………、地下列車ですか!？」

そこには、帝劇の轟雷号とタメを張るスケールの、巨大列車があった。

「ああ、エクレールって言つんだ。こいつで隊長さん達を、巴里の何処でも届けてやるよ。」

ジャンが胸を張って自慢したその時、メルから通信が入った。

「オーナー! 敵怪人に動きがありました! 作戦司令室にお戻り下さい!」

「さあ、仕事の時間だ。ムツシュ、準備はいいね?」

「……………敵は警官隊を制圧。シャンゼリゼ通りを凱旋門方面に進撃中ですよ!」

「さあムツシュ、この状況、どう判断する?」

シーの報告に頷き、グラン・マが問い掛けた。
すると、大神は数秒考えたのち答えた。

「まずは敵の蒸気獣を全滅させましょう。その後、怪人を撃破しま

す。」

「いい答えだ。ムツシュ、後は任せたよ！」

期待通りの答えに安心して、グラン・マは大神に全ての権限を委ねた。

「よし、エリカくん、グリシーヌ、準備はいいか？」

「はい！いつでも大丈夫です！バシツと行きましょう！！」

「このグリシーヌ、覚悟は常に出来ている！心配は無用だ。」

二人の返事に頷き、大神は出撃命令を出した。

「巴里華撃団・花組、出撃せよ！！！」

「くっ、退却だ！！！」

銃撃が全く通用しない相手に、エビヤン警部は遂に退却命令を出した。

たちまちに逃げ出す警官隊の車を、巨大な鉄の固まりが押し潰す。
シゾーの操る蒸気獣、『ポーン』である。
ざっと数えて十体弱のポーンが、凱旋門前を練り歩いていた。

「ウーッサッサッサ！いいザマだピョン！」

退却する警官隊を、ポーンの奥にいるシゾーが笑った。

「さあ、隠れてないで出て来るピョン！！」

邪魔物を蹴散らし、ダイゴの姿を探すシゾー。
その時、上の方から声が響いた。

「そこまです！！」

「何っ……………！？」

突然の声に驚くシゾー。

すると、ポーンの前に赤、白、青の三つの光武Fが姿を現した。

「巴里華撃団、参上！！」

それは、巴里に現れた魔を討つ、人類の希望だった。

「貴様、一体何者だ！何故ウサギが人を襲う！」

「ウサギさん、貴方は本当は悪いウサギさんじゃないはずです！」

「ウサギウサギ言っなピョン！！シゾーという名前があるピョン！」

やはりウサギと呼ばれるのは嫌なのか、シゾーは地団駄を踏む。
すると、今度はグリシーヌが追い撃ちをかけた。

「ウサギに名前など要らぬ。貴様の悪事もそこまでだ！」

「まだ言っピョンか！ポーンども、奴らを潰すピョン！」

そう叫んで、シゾーは姿を消した。

それに伴い、命令を受けたポーン達が一斉に三人に迫る。

「目標、敵蒸気獣の撃破！みんな、行くぞ！」

「了解！」

二人の確かな返事に頷き、大神は二刀を構えて飛び出した。

初めての戦いにも関わらず、巴里華撃団はさしたる苦戦もなくポーンを全滅させた。

初陣で士気が高まっていた事もあったが、大神の指揮の上手さも大きかった。

巴里華撃団はそれぞれ使用する武器が異なる。

大神は二刀、エリカはマシンガン、グリシー又は巨大な斧といった具合だ。

大神はエリカを中央に置いて敵を掃射させ、グリシー又と二人で左右か、ポーンに攻撃を仕掛けたのだ。

この作戦が功を成し、ポーンは瞬く間に沈黙した。

これに一人苛立っているのが、外ならぬシゾーだった。

「お、おのれ巴里華撃団……、許してやらないピヨン!!」

「なんですか、このウサギさんは。見かけばかりで全然弱いじゃないですか。」

すると、そこに一人の男が顔を出した。

先程パーティーで大神を馬鹿にした貴族、ダニエルである。

「こらこら、そのウサギさん。おいたは駄目ですよ、おいたはこのダニエル様がお仕置きを……。」

「こうなったら……、出て来るピヨン! 蒸気獣『プレリユード』!」

シゾーがそう叫んだ時だった。

凱旋門を飛び越えて、巨大なウサギの姿をした蒸気獣が現れたのである。

「うわあっ! な、何だ! 話が違うじゃないか!」

先程の強気な態度から一転し、ダニエルは尻餅をついた。

「ぱ、巴里華撃団とやら！ミーを守らせてやる！早く助ける！！」

ダニエルがそう言うより早く、大神の光武Fが飛び出した。それと同時にプレリユードの両腕からガトリング砲が連射される。

「くっ……………」

「な、何をするんだ！服に砂煙をかけるとは……………！」

「ここは危険です！早く安全な所へ！」

「ミーに命令するな！この役立たずの身の程知らずめ！！」

助けた礼一つなく侮蔑の言葉を吐き捨て、ダニエルは逃げ出した。そして、ようやくシゾーの攻撃が一段落し、大神は二刀を構え直した。

「よし、みんな行くぞ！」

「待て。どういっつもりだ！」

プレリユードに攻撃しようとした大神に、グリシーヌの声が飛んだ。

「貴公は日本人だ。巴里に来て間もないのに、何故巴里の人間を？ましてや、先程の者の愚弄に何故怒らぬ？」

グリシーヌは、斧を突き付けて問い詰めた。

「貴公には日本人としての……………、男としての誇りというものがないのか！？」

すると、大神はハッキリと告げた。

「日本だろうが巴里だろうが、そんなものは関係ない！」

「何……………！？」

「全ての人々の幸せを守るために戦う。それが俺の誇りだ！」

この世界における全ての人々が笑っている事。

それが大神の願いであり、それを守る事が、大神の誇りだった。
帝劇時代に共に戦った、あの光の勇士のように……………。

「大神さん……………！！！」

「ほう……………！」

大神の言葉に、エリカは感銘を受け、グリシーも意外な顔をする。
そして、大神は二刀を翳した。

「目標、巨大蒸気獣の撃破！みんな、行くぞ！」

「了解！！！」

ウサギ姿の蒸気獣プレリユードは、三対一の状況にも関わらず、花組を苦戦させた。

凱旋門に現れた時の、ウサギ特有のジャンプ力を使い、包囲されても簡単に脱出してしまうからだ。

「くそっ！ちよこまかと素早い……………！！」

自慢の斧による一撃が中々加えられず、グリシーヌが悔しげにぼやく。

一方の大神は、冷静にプレリユードの動きを読み取っていた。

「……………、よし！エリカくん！奴の両足を狙撃してくれ！！」

「了解！！」

大神に言われ、エリカのマシンガンが火を噴いた。

「し、しまったピョン！！」

シゾーが気づいた時には遅かった。

既にエリカのマシンガンで無数の弾丸を一度に浴びたプレリユードの両足は、小さい爆発とともに黒い煙を上げ始めたのだ。

「これでジャンプは使えないぞ！シゾー、覚悟しろ！」

二刀を構えて叫ぶ大神。

しかし、シゾーの隠し玉はプレリユードだけではなかった。

「これで勝ったと思うなピョン！来るピョン！超古代怪獣メルバ！

！」

シゾーがそう叫んだ時だった。

遙か上空で咆哮が聞こえたかと思うと、一体の竜にも似た怪獣が現れたのだ。

全身に無数の穴を持ち、大きな翼を広げて凱旋門に降り立つメルバ。そのスケールに、花組は戦慄した。

「ば、馬鹿な……。こんな化け物を使役しているというのか……」

流石のグリシーヌも、驚きを隠せない。

メルバは凱旋門よりは小さいとはいえ、光武Fの5倍の高さがある。とてもではないが、初戦で相手に出来るレベルではない。

一方、劣勢だったシゾーは状況が好転したと笑った。

「ウーッサッサッサ！ 巴里華撃団！ 覚悟するピョン！ メルバ、あいつらを踏み潰すピョン！」

「ガアアアッ……！」

メルバは甲高い咆哮を上げると、目から赤い光線を放った。

……しかし……、

「……………あれ……………？」

いつまで経っても攻撃が来ない事を不思議に思ってみると、メルバは何やらやってしまったという顔で固まっている。見ると、プレリユードが全身から煙を上げていた。

どういう訳か、メルバは間違えてプレリユードを狙撃してしまったのである。

「ま……………まさか自分の怪獣にトドメを刺されるとは……………」

息も絶え絶えに、シゾーは無念の叫びを上げた。

「納得出来ないピョーン!!」

その言葉とともに、プレリユードは大爆発した。

しかし、大神達は喜ぶ訳にはいかなかった。

何故なら、目の前には超古代怪獣メルバが立ちはだかっているからだ。

「ガアアアッ!!」

メルバの咆哮が凱旋門を中心に鳴り響いた。

「あれが……災いなのか……？」

凱旋門の影に隠れて一部始終を見守っていたダイゴは、驚きと恐怖の入り混じった表情でメルバを見ていた。

目の前の三体の光武Fは懸命に立ち向かっているが、あの大きさでの攻撃は雀の涙でしかない。

「……巴里華撃団……。」

それでも必死に立ち向かう花組を見て、ダイゴは巨人の言葉を思い出した。

（光を継ぐ者よ、今こそ封じられし力を目覚めさせる時だ。）

「……僕も……。」

巴里華撃団はあんなに頑張っている。

自分にも……、光を継いだ自分にも何かやれる事があるはずだ。そう思った時だった。

ダイゴの服のポケットが、急に光を放ったのだ。

「え……？」

それは、両親の形見の彫刻、『スパークレンス』を入れたポケットだった。

試しにスパークレンスを取り出したダイゴは、驚きで目を見張った。何故なら古びた青銅のスパークレンスが、光り輝く金と銀の彫刻に変わっていたからである。

まるで、光に目覚めたかのように。

「……………光……………」

静かにそう呟いた時、メルバの咆哮が耳に届いた。

「！！！」

それと同時に目の前で上がる火柱。

もはや、怖がっている場合ではなかった。

「父さん……………母さん……………、エリカさん……………」

スパークレンスを握り締め、大切な人の名前を呼ぶ。
すると、仄かにスパークレンスの光が強まった。

「僕に……………、勇気を授けてくれ！！！」

そう叫び、ダイゴはスパークレンスを高々と空に掲げた。
すると、スパークレンスの先端が翼のように二つに割れ、中のクリスタルがまばゆい光を放った。

光は柱となってダイゴを包み、その体を光へと変えた。
災いを討つ、希望の光へと……………。

それは突然現れた。

凱旋門に出現した光の柱。

その輝きに、その場にいた誰もが一瞬目を奪われる。

そして光の柱が消え、その中から現れた存在に、誰もが驚愕した。

「……………光の……………巨人……………？」

凝視したまま、大神が呟いた。

赤と紫と銀の体色。胸に輝く青いカラータイマー。

そこにいたのは、間違いなく光の巨人。

ウルトラマンだった。

「チャッ！」

ウルトラマンはメルバを見ると、徐に構えを取った。

すると、メルバもウルトラマンに狙いを定め、襲い掛かって来た。

「ジュッ！！！」

「ガアアアッ！」

互いにぶつかり合い、激しい衝撃が生まれる。

そのまま押し合っていた状況が数秒続いたのち、ウルトラマンは一瞬の隙を突いてメルバを投げ飛ばした。

「チャーツ！！！」

けたたましい轟音と共に地面に激突するメルバ。
そこに、ウルトラマンが馬乗りになって追撃した。

「ハッ！ハッ！デュアッ！」

仰向けに倒れたメルバに、激しいパンチのラッシュを見舞う。
しかし、敵もさるもので、メルバはその状態からウルトラマンに目の光線を撃った。

「ジュワッ！？」

不意を突かれた攻撃を至近距離で喰らい、ウルトラマンは後ろに倒れる。

その隙に、メルバは立ち上がって翼を広げた。

「ハッ！」

ウルトラマンはすかさず起き上がって飛び掛かるが、メルバはその寸前に空高く舞い上がった。

「ガアアアアッ！」

そして、物凄いスピードで空を疾駆し、ウルトラマンに体当たりしたのだ。

「ジュワッ！？」

その衝撃で倒れるウルトラマン。
しかし、メルバは間髪入れずに再び目の光線を発射して来た。

「ジュワッ!？」

倒れるウルトラマンに、再び体当たりが見舞われる。

その時、ウルトラマンの胸のカラータイマーが、赤く点滅を始めた。

「……………まずい!早く勝負を決めないと……………!!」

思わず大神が叫ぶ。

しかしメルバは、逃がさないとはかりに光線を発射した。

「チャッ!」

それを前転で避けると、ウルトラマンは立ち上がり、両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「ンウウウ……………、ハッ!!」

そして勢い良く両腕を降ろした瞬間、ウルトラマンの体色が紫と銀に変化した。

空中戦を得意とする、スピードのスカイタイプである。

「ガアアアアッ!」

トドメとばかりに光線を撃つメルバ。

しかし、ウルトラマンは驚くべき速さで飛び上がり、蹴りの体勢でメルバに突っ込んだ。

スカイキック……………、目にも止まらぬ速さで敵に空中からキックを見舞う、スカイタイプの技の一つだ。

「ガアッ!？」

思わぬ反撃に遭ったメルバは、そのまま地面に落ちる。
すると、ウルトラマンは空中で両腕を左右に水平に広げ、頭上で合
わせた。

「ハアアア……………！」

ランバルト光弾……………、

頭上で合わせた手にエネルギーを集中させ、光の矢にして敵に撃ち
込むスカイタイプの必殺技だ。

「ジュツ……！」

頭上で合わせた両手を左腰に下げ、右手を突き出す。

すると、エネルギーを具現化した光の矢が放たれ、メルバの胸に深
々と突き刺さった。

「ガアアアア……………！！！」

断末魔の悲鳴を上げたのち、メルバはゆっくりと仰向けに倒れ、大
爆発した。

「チャツ！」

それを確認して、ウルトラマンは空高く飛び立った。

「……………終わりましたね……………」

ウルトラマンが去ったのち、エリカが呟いた。

「ああ、エリカくんもグリシーヌも、初戦ながらよく頑張った。」

シゾーの撃破には至らなかったものの、ポーンを倒す過程は十分なものがあつた。

その事から、大神は二人に労いの言葉をかけた。

「はい！ありがとうございます、大神さん！」

「……………まあ、最後はあの巨人に奪われてしまったがな。」

「ウルトラマンの事かい？」

「えっ？大神さん、さっきの巨人を知ってるんですか？」

驚いた様子で尋ねるエリカ。

すると、大神は笑って答えた。

「ああ。本人じゃないけどね。」

そう言つて、大神は話を変えた。

「……………ところで、日本の帝国華撃団には、戦いに勝利した後で必ず行つ約束事があるんだ。今から手本を見せるから、二人とも俺に

「続いてやってみてくれ。」

「は、はい！」

何を思ったのか、緊張して応えるエリカ。

しかし、これから二人は信じられないものを目撃する事になる。

「それでは……………、勝利のポーズ、決めっ！！」

「……………何だそれは……………」

「大神さん……………、どうしちゃったんですか……………？」

呆れた表情のグリシーヌと、驚いて固まっているエリカ。
それを見て、大神は思わず慌てた。

「お、おい！二人ともやれよ！！」

その日の夜、花組は初陣の勝利を祝ってエッフェル塔前にきていた。
何でも、花火を見るのだそうだ。

「ところで大神さん。あのウルトラマンって……………、一体どんな人

なんですか？」

ふと、大神の隣に立つエリカが尋ねた。

「そうだな…………、俺達がピンチになると、何処からともなく現れて助けてくれる正義の味方…………、かな？」

帝国華撃団時代に助けてくれた勇士を思い出し、大神が応える。
すると、不意にグリシーヌが横槍を入れて来た。

「どうだかな。所詮は得体の知れぬ奴。そんな者に巴里の平和を委ねる訳にはいかん。」

それだけ言つて、グリシーヌはその場を立ち去る。
その後ろ姿を見ながら、エリカは呟いた。

「…………私には、得体の知れない人には見えなかったけどな…………。」

「どういう事なんだい？」

大神が尋ねると、エリカは考え込むように答えた。

「初めて見たはずなんですけど…………、何でだろう。初めて会った気がしないんです。まるでずっと前から知っていたような…………、そんな気がするんです…………。」

エリカのこの感覚は正しい。

何故なら、ウルトラマンの正体はダイゴなのだから。

最も、この時点で二人がその事実を察する余地はないが。

そのダイゴの声が聞こえて来たのは、その時だった。

「エリカさ〜ん!!」

「え?.....あつ!!ダイゴさんの事すっかり忘れてました!!」

「ダイゴ.....?もしかして、彼が.....?」

手を振りながらこちらに走って来るダイゴを指差し、大神がエリカに尋ねた。

シャノワールでぶつかった時はすぐ迫水に会いに行ったので、知り合うチャンスがなかったのだ。

「あら、大神さんダイゴさんの事知らなかったんですか?」

意外そうな顔で驚き、エリカはダイゴを前に連れてきた。

「それじゃ、彼がダイゴさんです。覚えてあげて下さいね。」

「ああ。ダイゴ、よろしく。」

「.....うん。よろしく.....。」

渋々ながらも、ダイゴは差し出された大神の手を握った。

「ごめんなさい、ダイゴさん.....。ほったらかしにして.....。」

「もういいんだよ、エリカさん.....。無事で良かったよ.....。」

「うふふ.....、ありがとう。」

とびきりの笑顔を見せるエリカに、ダイゴも大神も、心が洗われる気がした。

「……………光の巨人か……………」

作戦司令室にてグラン・マは一人、巴里華撃団初陣の映像を見ていた。

「始まったんだね……………、巴里の災いが……………」

そう呟き、机の上に広がる本に目を落とした。

「伝説の巨人……………ティガの復活……………だね。」

グラン・マの口から出たティガという言葉。

それは、机の上の本の見出しに書かれた言葉と同じであった。

光を継ぐ者（後書き）

《次回予告》

皆さん、こんにちは！

マジカルエンジェル・コクリコのマジックショーへようこそ！

ボク、頑張るから、皆さん笑顔になってね！

次回、サクラ大戦3！

《笑顔の仮面》

愛の御旗のもとに……………

ボク……………幸せだよ……………

笑顔の仮面（前書き）

あの羽根つきミニゲームの難易度は異常。

「何か、つまんない……。」

勘弁してよ、コクリコ……。

笑顔の仮面

「……………全員揃ってるね。」

作戦司令室にて、グラン・マは周りを見渡して言った。

「今日集まってもらったのは他でもない。ムツシュの身分は、正式に巴里華撃団花組の隊長となった。それに伴い、ムツシュには新しい任務に就いてもらう。」

「新しい任務？一体どんな……………？」

任務と聞いて表情を固くする大神。

すると、グラン・マはニヤリと笑って何かを取り出した。

「ほら、こいつだよ。」

「……………いいっ！？」

それを見た瞬間、大神の表情は凍り付いた。

何故ならそれは、大神が帝国華撃団時代に着用していたモギリ服だったからだ。

と、いう事は……………、

「もしかして、またモギリをやるんですか……………？」

まさかと思って尋ねる大神。

すると、グラン・マはしたり顔で言った。

「当たり前じゃないか。ついでに店内のボーイも兼任してもらっからね。」

「はい……………」

まさか巴里に来てまでモギリをさせられるとは思わず、ため息をつく大神。

すると、グラン・マがシーに声をかけた。

「シー、あれをムツシュに渡しておくれ。」

「ウイ、オーナー。はい、携帯キネマトロンです。」

そう言つて、シーは大神にハンドサイズの機械を手渡した。

キネマトロンは、帝国華撃団のメンバーである李紅蘭が発明したもので、離れた所から通信が出来る画期的なメカだ。

しかし、トランク程の大きさのために持ち歩きにくいのが難点であった。

それを克服したのが携帯キネマトロンで、通信は片方しか出来ないものの、ポケットに入れて持ち運びが出来るので、格段に通信がやりやすくなったのだ。

「さてムツシュ。他にも色々聞きたい事があるだろう？」

「はい。巴里華撃団とは……………」

今回は緊急事態であつたために省略したが、大神は当然とも言える疑問を口にした。

「それじゃあ、巴里華撃団設立の経緯から話そうか。」

そう言つて、グラン・マは一冊の古びた本を取り出した。

「こいつは古い時代から伝えられて来た巴里の预言書だよ。この中に、ある言い伝えが残されている。」

「言い伝え？」

訝しむ大神に、グラン・マは重々しく頷いき、話し始めた。

巴里に災いを齎す闇が蘇りし時、希望の光は目覚める。

その書き出しで始まる段落には、今回の事件と酷似する内容が記されていた。

巴里を襲う魔の存在。

それに立ち向かい、巴里を守る希望の光。

遙か昔、自分達を守ったその光を、人々は讃え、こう呼んだ。

……ティガと……

「……しかし、必ず巨人が復活するとも限らない。それで、帝国華撃団をモデルとして霊的組織、巴里華撃団設立に至ったのさ。」

曖昧な希望にすぎるより、自分達が希望となる。

言わば、巴里華撃団はティガと対を成す希望の存在だった。

「で、シャノワールなんだけどね。流石のムツシュも驚いたろう？」

「はい。まさかシャノワールが総司令部だったとは……………」

実際は帝国華撃団も本部を劇場に構えていたので同じようなものが。

「では、ウルトラマンティガというのは……………」

大神は、いよいよ核心とも言える問題を口にした。

「それは、前回の戦いのレポートにそくして話すよ。メル、レポートを読み上げておくれ。」

「ウイ、オーナー。シャンゼリゼ通りに出現したウサギの怪人、及び怪獣は妖力が確認され、巴里の破壊と混乱を企てたようである。怪人は花組に、怪獣は巨人に倒されたために正体は未だ不明である。ただ一つ言える事は、伝説の災いと光が蘇った事である。」

早い話が、ティガが復活した以外は何も分からないという事だ。

「本には災いとは書いてない。有力な情報はないね。」

「だが、何者かが巴里を狙っている事は確かだ。それを止められるのも私達だけという事もな。」

あくまでティガをあてにしないつもりなのか、グリシー又はそう言い放った。

「それだけ分かれば上等さ。さあ、夜の支度をするよ。」

そうグラン・マが締めくくり、その場は解散となった。

「……………ティガ？」

「そうです！そのティガが、巴里を守ってくれたんです！」

おうむ返しに聞くダイゴに、エリカは興奮気味に語った。

会議が終わった後、エリカは教会でダイゴにティガの活躍を語っていたのだ。

実際の所本人は目の前にいるのだが、それをエリカが知るはずもない。

ダイゴもまた、それを話すそぶりを見せず、寧ろエリカの話に驚いて見せた。

「で、そのティガが怪獣をやっつけた訳？」

「そうです！ハツとかチャツとか言ってる……………！」

ハイテンションでティガの真似をするエリカ。

すると、エリカが突き出した右手が、ダイゴの後ろの棚にぶつかった。

その拍子に棚の上にあった花瓶が落下し、真つ二つに割れてしまった。

「あ……………！」

「エ、エリカさん……………」

冷や汗をかくエリカと、呆れた表情を浮かべるダイゴ。すると、そこへレノ神父が駆け付けた。

「どうされました？何か割れる音が……………」

直後、ダイゴが無言で指差した方を見てレノ神父は固まった。何故なら……………」

「こ、こ、これは！設立時から共にあった大切な花瓶が……………」

その花瓶の無惨な姿に、レノ神父は膝をつき、天を仰いで嘆いた。

「主よ……………」どうかこの罪をお許し下さい……………」

「あ、あの……………」ごめんなさい！私、同じもの買って来ます！」

流石にいたたまれなくなり、エリカはダッシュで教会から飛び出した。

教会に残されたダイゴは、レノ神父に声をかけた。

「神父様……………」エリカさんも反省しているし、許してあげてくれない？」

「……………」はい。エリカさんもわざとではないでしょうし、形あるものは、いつかは壊れますです、ハイ。」

ハンカチで涙を拭くレノ神父。
すると、ダイゴは本題に入った。

「そうだ、神父様。この前の事なんだけど……………」

「ハイ。希望の光が、復活しました。ダイゴさん、見つけたんですね。」

「うん。エリカさんはティガって呼んでた。あれが、巨人の名前なのかな？」

ダイゴが尋ねると、レノ神父は考え込むそぶりを見せた。

「おそらくその通りです、ハイ。かつて東の地にも、同様の巨人がいたと聞きます。」

「……………ウルトラマン……………ティガ……………」

その名を呟き、ダイゴはポケットから光の証、スパークレンスを取り出した。

前まで錆びた青銅だった彫刻は、見違える程の輝きを放っている。光を継ぐ者。

自分がまさか、そんな運命にあつたとは、ダイゴも思わなかった。しかし、現にティガは自分を後継者を選んだ。

果たしてそれが偶然なのか、それとも必然なのかは分からないが、今のダイゴに出来る事は、その力を受け入れる事だけだった。

「えつと…………、確かこの辺りだよね…………。」

花瓶を買いに行ったエリカを探しに、ダイゴは市場に足を運んだ。巴里での生活用品は、大概この市場に揃っている。おそらくエリカもここにいて、ダイゴは踏んでいた。

「あ、その人ちよつといい？」

「ん？ 僕の事？」

声がした方を見ると、小さい女の子がダイゴを下から覗き込んでいた。

フランス人ではないのだろうか、肌がやや黒っぽい。帽子を被った活発そうな少女だった。

「はいコレ。よかったら来てね。」

そう言つて、少年は一枚のチラシをダイゴに手渡した。

「シルク・ド・ユーロ？」

一番上の見出しには、白い文字でそう書かれていた。シルク・ド・ユーロと言えば、ヨーロッパでも指折りのサーカス集団である。

確かつい最近、この巴里に来たばかりだった。

「それにしても、君は……………」

ふと、ダイゴは少女を見た。

チラシを配っている事から、サーカスの関係者である事は間違いないだろう。

しかし、見る限り少女は10歳前後。

まさかこの歳で働いているというのか……………？

そう考えるダイゴに、少女は胸を張って答えた。

「ボクはコクリコ。サーカスの団員だよ？」

正にダイゴの予想そのまんまだった。

コクリコと名乗った少女は、シルク・ド・ユーロの団員だったのだ。

「へえ……………、本当に？」

「何だよ、疑ってるの？」

膨れて見せるコクリコだが、確かに10歳くらいでサーカスが出来るといふのは、俄かに信じにくい話だ。

その時、市場の奥が急に騒がしくなった。

見ると、市場の真ん中で馬が暴れているではないか。

「よし、見てて！ボクがサーカス団員だって事、証明してあげる！」

「えっ！？ちょっと……………！」

ダイゴを余所に、コクリコは市場のテントに飛び移った。

その身のこなし、信じられない軽さだ。

「す……………凄い……………！」

その様子に、ダイゴは驚いて見ている事しか出来なかった。

「君……………凄いね……………」

呆氣にとられた様子で、大神が馬に乗るコクリコに声をかけた。
いきなり屋根を跳んで現れたかと思うと、暴れる馬の背中に乗り、
軽く落ち着かせてしまったのだ。

「どう？ボクが団員だって事、納得してくれた？」

得意げに胸を張るコクリコ。
すると、そこにダイゴが駆け付けた。

「なるほど……………、納得だよ。」

「ダイゴ！どうして君が？」

「……………それはこっちの台詞だよ。何でアンタがエリカさんと一緒にいるのさ。」

大神の姿を見るや、ダイゴはあからさまに不機嫌な表情を見せた。

「（俺……………、何かしたのか？）」

言われのない視線に困惑する大神。

すると、エリカが助け舟を出してくれた。

「実は、花瓶を買おうと市場に来たら大神さんに会ったんです。」

あの後、エリカは割ってしまった花瓶と同じものを買うべく市場に来ていたのだが、たまたま野菜を注文しに来た大神と会い、二人で花瓶を探していた。

その前で馬が暴れだし、結果としてコクリコに助けてもらったのだ。

「オジサンも中々やるね！カッコ悪かったけど。」

「オジサン？酷いな……………、これでもまだ23なんだぞ？」

初めてオジサン呼ばわりされ、大神はショックを見せた。

まだ大神は23なのだ。

まだまだオジサンではなくお兄さんである。

すると、コクリコも失礼だと思ったのか、すぐに謝った。

「あ、ごめんなさい。ボクの名前はコクリコ。オジサン……………じゃなかった、お兄さんは？」

「俺は大神一郎。シャノワールでモギリをしてるんだ。」

きちんと訂正する所が可愛らしく思い、大神は微笑みながら名乗る。すると、エリカとダイゴも続いた。

「私はエリカ・フォンティーン。修道院のシスターなの。」

「そう言えば、僕もまだだったよね？僕はダイゴモロボシ。教会に住んでるんだ。」

とは言っても、ダイゴは仕事を持っていない訳ではない。

教会の一員として、色々ボランティア活動等にも参加しているのだ。

「へえ、イチローにエリカにダイゴか。イチローもダイゴも変な名前だね。何処の国の人？」

「日本人だよ。君もフランス人じゃないね。」

コクリコの疑問に答えつつ、大神が指摘した。
すると、コクリコは笑顔で答えた。

「当たり前。ボク、ベトナム人なんだ。」

ベトナムはインドシナ半島にある国だ。

確か少し前にフランス領になっていたはずだった。

ホーチミンが革命を起こす事になるのだが、それはこの物語の終わ
ったずつと後の事である。

「さっきは見事だったね。あの暴れ馬を止めるなんて……………」

「エヘッ、ありがとう。ボクね、動物が好きで、みんな話が出る
と思ってるんだ。」

ダイゴに褒められ、コクリコは照れた様子で言った。

すると、エリカがふと何かに思い出したように手を叩いた。

「あ、動物で思い出しましたが、私花瓶が買いたいんでした。」

「……………何処が繋がってるの。」

動物からどう連想すれば花瓶に辿り着けるのか。

ダイゴが呆れた口調で言うと、コクリコが胸を叩いた。

「買い物？ だったらボクが案内するよ。市場には詳しいんだ。」

「本当！？ 実は花瓶を探してるの。これくらいなの。」

そう言つて、エリカは手で花瓶の外観を描いた。

花瓶の割には若干大きすぎないかと思うダイゴだが、敢えて黙っておく。

「わかった。花瓶はこっちだよ。」

そう言つて、コクリコは市場の奥を指差した。

目をこらして見ると、確かに瀬戸物や骨董品が見える。

おそらくコクリコは何度も市場に出入りしているのだろう。

どの場所にどんな品物が置かれているか一瞬で判断出来るのが、何よりの証拠だ。

「やっぱり男の子ね。大神さんより頼りになりますね。」

感心したようにエリカが言う。

すると、コクリコは不意に振り返った。

「ボク、男の子じゃないよ。ほら。」

そう言って、コクリコは帽子を取った。

すると、左右の可愛い栗色のお下げ髪が現れた。

「女の子だったのか……………」

「普通気付かない？」

エリカと同じようにコクリコを男の子と思っていたのか意外そうな顔をする大神を、ダイゴがなじる。

「アハハハハ！いいよ、たまに間違えられるから。」

その場を取り繕うように、コクリコが笑った。

「さ、早く行こう。お店が閉まっちゃうよ！」

「コクリコ、ありがとう。おかげでいい花瓶が安く買えましたね。」

割ってしまったものより数段価値の高い花瓶を抱え、エリカがコクリコに礼を述べた。

コクリコは店を教えてくれただけでなく、その店の主人と値段交渉をして、1000フランだった花瓶を200フランまで下げてもらったのだ。

その業は、ネゴシエーターにも匹敵する。

「何だかコクリコに助けられてばかりだな。俺も何か手伝おうか？」

「本当！じゃあ手伝って。イチローだけでいいからさ。」

大神の申し出に、コクリコは目一杯の笑顔を見せた。

「それじゃ、僕達は花瓶を届けて来ます。」

「またね、コクリコ。」

そう言っ、エリカとダイゴは一足先に市場を後にする。
すると、コクリコは早速市場を練り歩き始めた。

「こんにちは！今日も野菜クズもらっていくね。」

そう言っ、何処から取り出したのか、コクリコはバケツを手に片っ端から店の野菜クズをもらっていった。

剥いたジャガ芋の皮。ニンジン先のつぼ。ひん曲がったキュウリ。市場を一周する頃には、バケツいっぱい野菜クズが溜まっていた。

「じゃあイチロー、これ運んでね。」

「こんなに沢山……、どうするんだ？」

野菜クズなど集めて、一体何に使うというのか。
大神が尋ねると、コクリコは笑って答えた。

「みんなのゴハンなんだ。さあ、イチロー頑張っ！」

そう言っ、大神を励ますコクリコ。
すると、そこに声がかかった。

「おや、コクリコじゃないか。またお仕事かい？」

「あ、おひげのおじさん！」

それは、実に優しい表情をした老紳士だった。
立派な白い口髭を蓄え、元気な印象がある。

コクリコは知り合いなのか、老紳士に手を振った。

「今日はどうしたの？」

「いや、リンゴでも買おうと思ってね。」

そう言うと、老紳士は一つの袋を取り出した。

「ところでコクリコ、お腹空いてないかい？パンを買ったんでね。
君も如何です？」

「あ、ありがとうございます。」

初対面の老紳士にパンを差し出され、大神は戸惑いつつも受け取った。

すると、老紳士は大神の表情を読み取って自己紹介してくれた。

「私はロランス・ロランと申しまして、宝石商をしております。」

「俺は大神一郎です。テアトル・シャノワールのモギリをしています。
す。」

そう答えて、大神はようやくいつちよ前に握手をした。
すると、不意にロランスが大神の目を見て言った。

「ほう、いい目をしていますね。」

「え？」

「人の目は宝石と同じ。その輝きで、善し悪しが分かるものなんですよ。」

それは、長年宝石と向き合ってきたロランスだからこそ分かる事だった。

美しい宝石には誰もが惹かれる。

それと同じように、綺麗な目をしている者には、自然と輝くのだろう。

「大神君。君の目には美しい光があります。大切なものを守れる強い光が……。」

「はあ……、ありがとうございます。」

宝石の知識は持たない大神は満足な返事を返せず、一応の礼を述べるに留まった。

「ねえねえ、何の話してるの？早くパン食べようよ。」

話の内容が良く分からず、コクリコが急かす。すると、ロランスは笑って答えた。

「そうだね。では、いただくとしようか。」

「……………ここがシルク・ド・ユーロか……………」

大神とコクリコの二人と分かれた後、ダイゴはコクリコからもらったチラシを頼りにサーカスのテントの前まで来た。

コクリコの凄さは市場で十分理解した。

今度はそれを、サーカスで見たくなったのだ。

しかし、残念ながらサーカスはまだ始まっていないらしく、ガランとしている。

「……………仕方ない、コクリコに挨拶でもしようか。」

そう呟き、ダイゴはサーカスの裏手に足を運んだ。

すると、そこにはオリの中の動物達に餌をあげる大神とコクリコの姿があった。

「……………やあ、ダイゴじゃないか。」

ダイゴの存在に気付き、大神が声をかける。

すると、ダイゴは恥ずかしげに視線をずらしながら歩み寄った。

「いや、チラシをもらったからサーカスでも……………って。」

「本当！ありがとうダイゴ！ボク嬉しいよ。」

よっぽどダイゴの言葉が嬉しかったのだろう。
コクリコはとびきりの笑顔を見せた。

「ところで、お二人はここで何を？」

「コクリコと一緒に、動物達のゴハンを市場で集めて来たんだ。」

そう言っで、大神は手に持ったバケツを見せた。

市場で集めていた野菜クズは、動物達のゴハンだったのである。

「イチロー、ダイゴ、ほら見て。この間火の輪くぐりを失敗して……。」

そう言っで、コクリコが一頭の虎を指差した。

見ると、右の前足に真新しい包帯が巻かれている。

「熱かったよね……、痛かったよね……。ごめんね、ボクがいたのに……。」

「コクリコ……。」

まるで自分の痛みのように、虎を優しく撫でるコクリコ。

その様子に、大神もダイゴもいたたまれない気持ちになる。

しかし、そこに別の男が現れた。

「コラ、コクリコ。練習だというのに何をサボっている？」

振り返ると、値段の高そうな葉巻を口にくわえた小太りの男が、コクリコを睨みつけていた。

その帽子には、高そうなダイヤモンドが光っている。

彼はドニクールと言っで、このシルク・ド・ユーロの団長だった。

「は、はい。動物達のゴハンを貰いに行っていました。」

慌てて頭を下げるコクリコ。

すると、ドニクールは隅に置かれた野菜クズのバケツを見た。

「そうか、たつぷり貰えたようだな。」

満足げに笑うドニクール。

しかし彼は次の瞬間、とんでもない事を口にした。

「よし、明日から動物の餌代は半分に切り詰める。」

「そ、そんな！ムリだよ、みんなが可哀相だよ！」

ただでさえ野菜クズを貰わなければ動物達の空腹を凌いでやれないにも関わらず、これ以上餌を減らされては手に負えなかった。

だがしかし、ドニクールはコクリコの抗議を鼻で笑い、あろう事が怪我した虎を蹴りつけた。

「なら、怪我した虎を売る。毛皮にすれば儲かるだろう。」

「や、止めてよ！！」

コクリコは虎を庇って叫んだ。

虎は怪我した患部をドニクールに蹴られ、苦しんでいる。

「止める！怪我をした動物を蹴る等、サーカスの、ましてや団長のする事ではないぞ！」

流石の大神も腹を立て、コクリコを庇うように前に出た。

「ふん！部外者が口出しをするな。それともコクリコ、俺に文句でもあるのか？」

「……………ありません。」

団長の権限を振りかざすドニクールに逆らえず、抗議の声を飲み込むコクリコ。

すると、ドニクールは満足げに笑った。

「なら良い。開幕までに腹ごしらえをしておけ。」

そう言つて、ドニクールはテントから出て行つた。

「……………何だあの男は。」

「葉巻は吹かす、動物には手を出す……………最悪だね。」

大神の言葉に同意するように、ダイゴもドニクールという男に対しての不快感を露にした。

サーカスは超人的な業を披露しておひねりをもらうショーだ。

当然本番までに大変な練習がいるし、失敗すれば大怪我どころでは済まされない。

だからこそ、サーカスは団員全員が一つにまとまり、互いに助け合う事が必要不可欠だ。

だが、ドニクールという男にはそれが塵程にもない。

葉巻は動物の身体に悪影響を及ぼすし、動物や団員に危害を加える等、人として言語道断である。

大神もダイゴも、よくあんな男が団長になつたと不思議に思った。

それもそのはず。何故ならドニクールは、本来の団長である彼の弟が病気なのをいい事に、金でこのサーカスに乗っ取ったのだから。

「いいんだ……。もういいよ……。」

それを指し示すように、コクリコが小さい声で言った。

「イチロー、ダイゴ、ありがとう。ボク、凄く嬉しかったよ。」

そう言つて、コクリコは夕飯を持って来た。

「……………これがコクリコの夕飯なのか？ たったこれだけが……………」

「……………酷い……………」

パンが一口と、野菜のふやけたスープ。

まるで残飯のような酷い夕飯に、大神もダイゴも信じられない面持ちを見せる。

しかし、コクリコは笑っていた。

「ボクにはご馳走だよ？ だって毎日食べられるもん……………」

「それで、奴に逆らえないんだね……………」

ダイゴの言葉が、全てを物語っていた。

確かに反発する事は出来るだろう。

しかしあのドニクールの事、そんな人間はすぐさまお払い箱にするはず。

そうなればどうやって生きていくのか。

そう考えれば、苦しくてもドニクールに従う他なかった。

「我慢なんてしてないよ。…………ボク…………幸せだよ…………。」

その時、サーカスの開幕を知らせるベルが鳴った。

「あ、もう行かなきゃ。じゃあねイチロー、ダイゴ。」

「コクリコ…………、我慢しているじゃないか…………。」

大神がそう呟いた時、テントの方から動物達の叫び声が聞こえて来た。

「な、何だ!？」

「テントの方だ。行くぞ、ダイゴ!」

ショーには不自然な叫び声に、大神とダイゴはテントに急行した。

「みんな止めてよ!何でボクの言う事聞いてくれないの!？」

テントの真ん中でコクリコが叫ぶ。

何と、動物達が突然暴れ始めたのだ。

まるで、ドニクールに逆らえないコクリコの代わりに怒るように。

「ええい騒がしい!構わん、逆らう動物は殺してしまえ!」

「止めてよ!!ボクが何とかするから!」

ドニクールの言葉に血相を変えるコクリコ。

しかし、動物達は怒りを収めてくれない。

「お前達、お鎮まり!!」

その時、テント内に透き通る声が響いた。
すると、今まで怒りの咆哮を上げていた動物達が、それこそ蛇に睨まれた蛙のように大人しくなったのである。

「す、凄い…………。」

その様子に、驚くコクリコ。

見ると、南国を思わせる衣裳を来た若い女性が歩いて来るのが見えた。

「お待ちせしましたわ、ドニクール団長。今日から雇われる事になったカルチエラです。」

「あ、ああ。アンタが新入り予定だったカルチエラさんか。助かったよ。」

鼻の下を伸ばして、ドニクールが言った。

「凄い…………、あの人動物と通じ合っているんだ…………。」

「ふふ、よろしく願うするわね。」

そう言って、カルチエラはこちらに微笑みかけた。

その夜、巴里の裏通りに悲鳴が轟いた。

「うわあああつー!!」

「イヒヒヒヒ……。素直に渡せば、苦しまずに済んだのにね……。」「

そう言って現れたのは、全身が蛇の鱗に覆われた怪物だった。

怪物の目の前には、悲鳴を上げた男が謎の巨大な口に一呑みにされる姿がある。

「さて……。」「

怪物は口が男を骨も残らず食い漁ったのを見届けると、残った服のポケットに手を入れ、何かを取り出した。
それは、高価なルビーだった。

「チツ、また違ったね。」「

目的の物と違ったのか、怪物は落胆の表情を見せた。

「それにしても人間は、宝石を何だと思ってるんだろうね。自然の恵みに手を加えるなんてさ。……。それを庇う裏切り者の気がしないよ。」「

そう言っで、怪物はルビーを飲み込んだ。

「さて、証拠隠滅も済んだし、ずらかるかね。」

そう言っで、怪物は男の服を丸呑みにしてその場を後にした。

「……………待つてなよティガ。このピトン様は何処までも追い詰める。それこそ蛇のようにね……………」

夜の巴里に、不気味な笑い声が響いた。

翌日、ダイゴはチラシを持ってシルク・ド・ユーロに赴いた。
昨日の一件から、コクリコの様子が気になったからだ。

「今日は凄い人気だな……………」

昨日とは打って変わり人に溢れるサーカスにダイゴは驚くと共に、
シルク・ド・ユーロの偉大さを改めて感じた。

「ダイゴさ〜ん!」

エリカの声が聞こえて来たのは、その時だった。

見ると、エリカを先頭に大神とグリシーヌ、メルとシーの姿もある。大神の話を聞いたエリカ達も、コクリコのサーカスを見に来たのだ。

「もしかして、ダイゴさんもコクリコの様子を見に？」

「うん。昨日から気になって。エリカさんも？」

ダイゴが聞き返すと、エリカは満面の笑みで頷いた。すると、それをフォローするように大神が言った。

「みんな、済まないが先に入っていてくれないか？俺達は後から行くよ。」

「仕方ないな。行くぞ、メル、シー。」

グリシーヌを先頭に、先に中に入る三人。

ダイゴは、エリカと大神の三人でコクリコにいるテントに向かった。

「……………すっかり怪我也治ったみたい。ありがとう、カルチェラのおかげだよ。」

「獣医のまね事が役に立ったわ。もう団長も売るなんて言わないはずよ。」

そう言つて、カルチエラは立ち上がった。

足元には、右足を治療してもらつた虎が元氣そうに二人を見ている。

「虎さん……。よかつたね……。」

「……………どうしたの？」

ふとコクリコの目に浮かんだ涙に気付き、カルチエラが尋ねた。

「この子とボクは同じだ……。一生懸命笑つて芸をしないと、捨てられるかもしれない……。」

それは、コクリコが初めて明かした本心だった。

ドニクールは金のためならどんな犠牲も厭わない男だ。逆らえばどんな仕打ちを受けるか、想像にかたくない。

「……………大丈夫。貴女も動物達も、あたしが守つてあげるから。」

そんなコクリコに、カルチエラは母親のような暖かい声で言つた。すると、コクリコはいつになく甘えるような声で言つた。

「……………じゃあ、ボク、お願いがあるんだ。」

「何？」

そう言つてコクリコの顔を覗き込むカルチエラ。すると、コクリコは赤い顔ではぐらかした。

「うつん、やっぱいいや。また今度にするよ。……………ボク、この子のゴハン持つて来るよ。」

そう言つて外に出たコクリコに声がかけられたのは、その時だった。

「やあコクリコ。遊びに来たよ。」

「あ、イチロー！エリカにダイゴも来てくれたんだ。」

今や友達となつた三人の来訪に、コクリコははしゃいだ。

「そうだ、カルチェラに紹介してあげる！こっちに来て。」

興奮を抑えられない様子で、コクリコは三人をテントの中に案内した。

「カルチェラ！イチローとエリカとダイゴが来てくれたよ！」

「はじめまして、カルチェラと申します。コクリコから聞いていますわ。」

丁寧な挨拶をするカルチェラ。

大神達も、それに合わせて挨拶をする。

「それじゃあ、ボク虎さんのゴハンを持って来るね。」

そう言つて外に出るコクリコ。

その様子に微笑んだのち、カルチェラが大神に尋ねた。

「今日はサーカスを観に？それとも、コクリコに会いに来て下さったのかしら？」

「両方です。前はコクリコの元気がなかったのです。」

「でも、貴女のおかげで元気になったみたいですね。」

「とんでもない。元気になったのはあたしの方ですね。」

大神の言葉にダイゴが続くと、カルチエラは笑って答えた。

「へ？何ですか？」

「実は、あたしにも娘がいたんです。生きていればちょうど、コクリコと同じ年に……。」

生きていれば。

つまりは死んだという事だ。

カルチエラにとってコクリコは、娘に等しい存在なのだろう。

「今日はコクリコのステージもありますの。是非見てあげてくださいな。」

「あら、もう夜になってる。大神さん、楽しいサーカスでしたね。」

サーカスが大盛況で幕を降ろした帰り道、エリカが興奮の覚め止ま

ぬ様子で言った。

「冗談じゃない……………、心臓が止まるかと思ったよ。」

その隣で、ダイゴが疲れた様子で言った。

今回コクリコが披露したマジックは、回転ノコギリによる切断マジックである。

会場の一人に手伝って貰おうとした所、手を上げたエリカが見事に当たってしまったのだ。

当のエリカは楽しかったようだが、客席のダイゴはエリカが斬られる様子を目の当たりにし、泡を吹いて倒れてしまった。

「さあ、今度は俺達だ。早く戻って開店準備をしよう。」

そう言って戻ろうとした時、ダイゴがふと口を開いた。

「それじゃ、僕は予定があるから。またね。」

「はい、ダイゴさん。よかったらシャノワールにも来て下さいね。」

そう言ってエリカ達と別れ、ダイゴは一人サーカスに戻った。

コクリコと話がしたかった。

……………いや、そうではない。

一人になる理由があった。

それは……………。

「やっぱり……………、スパークレンスが反応してる。」

ポケットの中で光る彫刻を握り締め、ダイゴはテントを見た。

スパークレンスが輝くという事は、その近くに何かがあるという事。

つまり、テントに何かがあるという事だった。
そつとテントに近づき、ダイゴは中を覗き込んだ。

「……………毎日眺めても見飽きないなあ、このダイヤモンドは……………。
これさえあれば、動物等クズ同然だ。」

中にいたのは、団長のドニクールだった。
帽子に輝くダイヤモンドを幸せそうに見つめている。
まさかあのダイヤモンドか。

ダイゴはそう思ったが、それは直後の声で間違いと分かった。

「本当だねえ……………、食べちゃいたいくらいさ……………」

「何っ？なっ！？何だお前は！」

振り返ったドニクールは見てしまった。

蛇のように長い舌で目の前に立つ怪物、ピトンを。

「ヒイイイ……………！！こ、このダイヤモンドは渡さねえぞ！」

「いいよ。それなら……………一緒に奪うまでだ！！」

「グ、グアアア……………！！」

逃げ出そうとしたドニクールに、何処からか現れた巨大な口が襲い
掛かった。

血も肉も皮も残さず食い荒らされるドニクール。

その様子を満足げに眺め、ピトンはダイヤモンドを手を取った。

「やっぱり違うねえ……………。この近くに間違いないんだけど……………。」

「

そう言いつつ、ピトンはダイヤモンドを飲み込んだ。

「何だか宝石ばかり飲み込んで、クセになりそうだよ。早い所奴を見つけないとねえ……………」

「……………!!」

一部始終を目撃し、ダイゴは恐怖で身体が震えた。
その時だ。

「……………ん？誰だい！そこにいるのは!!」

ドスの利いたピトンの声が飛んだ。
もしや見つかってしまったか……………。
そう思ったダイゴだったが、別の声にそれは勘違いと分かった。

「あ、ゴメンね。コクリコだよ？」

「(……………!!コクリコ!?)」

ダイゴはハッとした。

ピトンが気づいたのは、ダイゴではなくコクリコだったのだ。

このままではコクリコまで……………。
いつそ出て行こうか迷ったダイゴだが、次の言葉で三度驚かされる事になる。

「あらコクリコ、どうしたの？」

「（なつ……………！？）」

ダイゴは驚きで目を見張った。
何故ならそこにいたのは、怪物ピトンではなく、カルチェラだったからだ。

「あのね、カルチェラ……………。さっきのお願い聞いてくれる……………？」

「ええ。言つてご覧なさい？」

先程の怪物は別人だったのか？
いや、そんなはずはない。
だとすれば……………。

「あのね……………、カルチェラの事、ママって呼んでもいい？」

「ええ、もちろんよ。あたしの可愛いコクリコ……………。」

そう優しい口調で答えて、コクリコを抱きしめるカルチェラ。
一見すると美しい家族愛である。

しかし、もしダイゴの想像が的中しているとすれば、これ程残酷な愛の形はなかった。

「……………。」

ともかくばれずに済んだ事に胸を撫で下ろし、ダイゴはその場を後にした。

「……………。」

その様子を、後ろから見る視線に気づかず……。。

その頃、シャノワールもシルク・ド・ユーロに負けない程の盛況ぶりを見せていた。

それもそのはず。何故なら……、

「今宵はプログラムを変更して、皆様に新しい仲間を紹介します！」

「彗星の如く現れた新人ダンサー、その名もブルーアイ！」

司会のメルとシーの紹介で中央の階段から現れたのは、何とグリシー又だった。

彼女もまた、エリカのように舞台に立つ事を決意し、華々しいデビューを決めたのである。

「す、凄い！まるで緊張していない！」

ボーイの仕事に従事していた大神は、グリシー又の様子に驚いた。普通初めて舞台上上がる者は、どうしても緊張してしまい、それが客にばれてしまうものだ。

しかし、グリシー又からは全く緊張が見えない。もしかしたら、緊張すらしていないのかもしれない。

そのくらい堂々とレビューを見せていた。

本人の言葉を借りれば当然なのだろうが、周りから見れば圧巻である。

すると、隣に現れたグラン・マが言った。

「花形スターの誕生さ。最も、本名は出せないけどね。」

グリシー又は巴里の名門ブルームール家の一人娘である。そんな大事な娘を舞台に上げたと知れば、血気盛んなブルームール家の事、怒鳴り込んで来るに違いない。そこで、ブルーアイという偽名でデビューしたのである。

「ほう、これは美しい。まるで極上のブルーサファイアですな。」

「おやロランス卿、ご無沙汰だね。」

そう言って現れた人物に、グラン・マが笑いかける。一方、大神はその人物に驚いた。

「あ、貴方は市場の………！」

「おや大神君。覚えてくれたんですね。」

市場で会った時と変わらない笑顔で、ロランスが笑った。

「ところでロランス卿、今回の獲物は何だい？」

意地悪そうに尋ねるグラン・マ。

すると、ロランス卿もそれに合わせて感慨深げに答えた。

「やっと手に入れたんですよ。あの幻の巨大ルビー、『赤い少女の

涙』を。」

そう言ってロランスが取り出したのは、掌程にもなる巨大なルビーだった。

上の部分が尖っていて、確かに涙の雫のようにも見える。

「ほら、これがそうです。見事な輝きでしょう？」

「これは見事なもんだね……。ロランス卿が必死になるのも分かるよ。」

その大きさと輝きに、流石のグラン・マも驚きを見せる。

正しく人類の宝というべき宝石が、そこにはあった。

「今、コンコルド広場で開催中の宝石展に展示してもらう事になっているんです。」

「なるほど。その時は店の子達も連れて行こうかね。ムッシュ、その時は……。」

「…………留守番ですか？」

「ああ、分かってるじゃないか。アンタに宝石は、猫に小判だからね。」

その言葉に、三人は思わず笑った。

辺りは薄暗くなり、不気味な三日月が巴里の街を照らしていた。
その巴里の人気のない裏通りを、ダイゴは歩いていった。
そして、辺りに人がいない事を確認し、声を発した。

「……………隠れてないで出て来たら？」

「ばれてたのかい？」

そう言つてダイゴの背後に現れたのは、先程ドニクールを殺してダイヤモンドを奪つた怪人ピトンだった。
あれからピトンはダイゴの後を尾け、口を封じるチャンスを伺つていたのである。

「やっと見つけたよ。さあ、光の証をおよこし！」

「やっぱり。狙いはスパークレンスか！」

ダイゴはポケットからスパークレンスを取り出した。
中心にしまい込まれたクリスタルは、淡い光を放っている。

「イーッヒッヒッヒ！素晴らしい輝きだねえ。そいつをおよこし！」

「……………嫌だと言つたら？」

答えはさっきの事で分かっているが、ダイゴは敢えて言った。
すると、予想通りピトンが叫ぶ。

「なら仕方ないねえ……、覚悟おし！」

その声と共に、地中から巨大な口が現れる。

しかし、ダイゴは薄く笑ってスパークレンスを掲げた。

すると、クリスタルから閃光が放たれ、口を消滅させてしまった。

「さっきのドニクルの時に見て気付いたんだ。今の怪物は常に地中に潜っている。ならば光に弱いとね。」

「チツ！やるじゃないか。」

一筋縄ではいかないと感じ、ピトンは攻撃の手を一旦止める。
その時、裏通りに別の影が現れた。

「そこまでだ！宝石泥棒め！」

それは、何と大神だった。

グラン・マから宝石盗難事件の調査を命じられた大神は、夜の巴里を一人捜査していたのである。

「大神さん！」

「来るんじゃないよ！お前も死にたいのかい？」

こちらへ走って来る大神を威嚇するピトン。

すると、今度はピトンにマシンガンが浴びせられた。

「そこまでです！ダイゴさんには指一本触れさせません！！」

それは、マシンガンを持ったエリカだった。

エリカもまた、宝石盗難事件を聞いて捜査していたのである。

「チツ、覚えておいで！」

流石に形勢不利と見たか、ピトンは背を向けて逃げ出した。

「逃がすものか！エリカくん、ダイゴ、奴を追い掛けるぞ！！」

ピトンを追って三人がたどり着いたのは、シルク・ド・ユーロの前だった。

「くそつ、見失ったか……………！」

辺りを見渡す大神。

すると、そこにカルチエラが現れた。

「あら、大神さん。こんな時間にどうなさったの？」

「カルチエラさん。実は、宝石盗難がこの辺りに……………。怪しい人

物を見ませんでしたか？」

「怪しい人物……………」

大神の問いに僅かに考えるそぶりを見せ、カルチェラは思い出したように口を開いた。

「そういえば、確かに誰かがテントの近くをうろついてましたわ。」

「本当ですか！？どちらです？」

ようやく尻尾を掴んだとばかりに尋ねる大神に、カルチェラは笑って答えた。

「はい、ご案内しますわ。さあ、こちらです。」

「その必要はない！」

しかしその時、待ったの聲がかかった。
ダイゴである。

「どういう事だ、ダイゴ。早く探さないと犯人が……………」

「そんな必要ないよ、もう目の前にいるんだもん。」

そう言っつて、ダイゴはカルチェラを睨んだ。

「そうだよねカルチェラさん。……………いや、怪人ピトン……………かな？」

「…………ふっ、優しく始末してやろうと思ったのに……………！」

ダイゴに指摘され、大神とエリカが驚きの表情でカルチェラを見る。すると、カルチェラは不気味に笑い、遂にその笑顔の仮面を剥ぎ取った。

「イーッヒッヒッヒ！！」

「キヤーッ！！ カ、カルチェラさんが……………！！」

衝撃の事実、エリカが思わず悲鳴を上げた。
無理もない。

目の前で知り合いの女性が突然怪物になったのだから。

「そうか、宝石盗難事件の犯人はお前だったんだな！」

「そうさ、宝石は美味しくいただいたよ。持ち主の人間はみんな食い殺しちまったけどね！！」

今までのカルチェラからは想像もつかないような残忍な笑み。
これこそが、ピトンの真の素顔だった。
しかし、ここでもんでもない事態が発生した。

「あ、ママお帰りなさい。何処に行ってたの？」

何と、事もあるうかコクリコが出て来たのだ。

「コクリコ！近寄るな！！」

「チッ！コクリコはあたしがいたくんだよ！」

大声で叫ぶ大神。

しかし、それより早くピトンが動いた。

「ふふふ……、可愛いコクリコ……、ママのために人質になって頂戴ね。」

「ど、どうしたのママ!？」

突然後ろから肩を捕まえられ、困惑するコクリコ。

大神は、意を決してコクリコに真実を告げた。

「コクリコ、落ち着いて聞くんた。そいつは人間じゃない。巴里を襲う怪人だったんだ!!」

「か、怪人……!?!……ママ、嘘だよね?優しいボクのママだよね?答えてよ、ママ!」

自分を娘のように可愛がってくれたカルチェラが怪人のはずがないきつと見間違いか、疑われているだけだ。

そう信じ、一縷の望みをかけてコクリコが尋ねた。

しかし、健気で無垢な少女に突き付けられたのは、残酷なまでの真実だった。

「コクリコ……。その言葉、この顔を見ても言えるのかい?」

「そ、そんな!?マ、ママ……!!」

「止める怪人!今すぐコクリコを離せ!」

「動くな!一歩でも動けば、この子の首が引き千切れるよ!」

コクリコを救出しようとする三人を、ピトンが脅した。
鋭い爪が、コクリコの首に向けられる。

これでは助けに行く事もできない。

「バカ正直め。そのまま立ってなよ！」

その時、大神の真下から数多の犠牲者を食い殺した巨大な口が襲い掛かった。

「うわあっ！！！」

何とか食われずに済んだものの、大神は今の一撃で左膝を斬ってしまった。

「大神さん！」

「くっ！……………怪人、コクリコを放せ！」

鮮血が流れる膝を手で包み、大神がピトンを睨んだ。
その時だった。

「……………ハハ……………ハハハ……………」

どういう訳か、コクリコが突然笑いはじめたのだ。

「コクリコ……………、何で笑ってるんだい？」

人質にされ、命さえ危うい状況なのに、何を笑っているのか。
大神やエリカ、ダイゴのみならず、ピトンすらも呆気に取られてし

まった。

すると、コクリコは笑ったままで言った。

「ボク、泣かないんだ。どんな時でも、笑ってるんだ。」

すると、不思議な事が起こった。

コクリコの身体を、淡い光が包み込んだのである。

「な、何何だい？この光は！？」

「だから、ボクは笑うんだ。泣いても辛いままだから、笑うんだ……。」

ピトンの驚く声も聞こえていないのか、コクリコは譫言のように言った。

「ねえ、イチロー……、ボク笑ってるよね？泣いてなんかいないよね？」

「もういい、コクリコ！もういいんだ！！」

好きだった人に、ましてや一人だった自分を救ってくれたはずの者に裏切られて、どうして笑ってられようか。

コクリコが笑顔の仮面の下で泣いているのが、大神には分かった。

「イチロー……、ボクは……、ボクは！！」

コクリコが叫んだ。

その時、コクリコの身体を覆っていた光が、まばゆい閃光となってピトンを襲った。

「くっ！？しまった！！」

その拍子に、ピトンがコクリコから離れた。
それと同時に、ダイゴが割って入る。

「コクリコに近づくな！怪人！！」

「チッ、覚えておいで！」

捨て台詞を吐き捨て、ピトンは夜の闇に消えた。

「コクリコ、コクリコ！大丈夫か！？」

倒れたコクリコを抱き上げて呼びかける。
しかし、失神しているのか返事はない。

「大神さん！とりあえずシャノワールの医務室に！」

「…………この子かい？ムッシュが見つけた霊力の持ち主は。」

「はい。怪人を吹き飛ばす程の、強い霊力でした。」

グラン・マの問いに、大神が答えた。

目の前には、ベッドに横たわるコクリコの姿がある。幸い霊力の発動によるショックで気を失っただけらしい。

おそらくママと呼び慕っていたカルチェラが、怪人ピトンだったショックによるものだろう。

コクリコの心の傷は、深いものだった。

「……………で、ムッシュ。この子は戦力になりそうかい？」

「そ、そんな！コクリコを隊員にするって言うんですか！？」

グラン・マの発言に、エリカが反発した。

無理もない。

コクリコはまだ11歳なのだ。

そんな幼い頃から戦場に立たせるなど、エリカには考えられなかった。

一方グリシーヌも、根拠こそ違うがエリカに賛成した。

「同感だ。こんな子供に何が出来る？足手まといもいい所だ。」

「口を慎みな。巴里華撃団はただでさえ人手不足なんだ。子供だろうと関係ない。」

二人の意見をバツサリ切り捨てるグラン・マ。
すると、大神が口を開いた。

「司令、俺はコクリコ自身に選ばせたいと思います。」

「そんな、大神さんまで！こんな子供に戦わせるって言うんですか

！？」

珍しく大神を睨むエリカ。
しかし、大神はキッパリと言った。

「コクリコは今までずっと戦ってきた。辛い事も悲しい事も、笑顔を作って必死に乗り越えて来た。そうだろう？」

「……………」

大神の言葉に押し黙るエリカ。
グリシーヌも、無言だが大神の考えには納得したようだ。

「じゃあコクリコの事はムッシュに一任するよ。……………ムッシュ、側にいてあげな。」

「はい。」

他の仲間が医務室を出る中、大神は一人コクリコを見た。
すると、不意にコクリコが目を開いた。

「……………イチロー……………」

「コクリコ……………、気がついたのかい？」

大神が優しく笑いかけると、コクリコは上半身を起こした。

「……………本当はね、さっきから起きてたんだ。……………話、聞いちゃった……………」

巴里華撃団の存在を知られた事は、一向に構わない。
もしかしたらコクリコも、共に戦うかもしれないんだから。

「俺達と一緒に戦うかは、コクリコが好きに決める事だ。でも、俺はコクリコの味方だよ。」

あくまでもコクリコを尊重してくれる大神。
傷ついたコクリコにとって、これ程救われるものはなかった。

「イチロー……………」

「笑わなくていいよ……………」

胸に顔を埋めるコクリコを抱きしめ、大神が優しく言った。
笑わなくていい。もう涙を飲み込む必要はないのだ。

「イチロー、ありがとう……………」

コクリコは、大神の胸でおそらく初めて泣いた。

翌朝、大神が医務室に迎えに行くと、笑顔を取り戻したコクリコの姿があった。

「コクリコ、元気になったみたいだね。何か食べに行こうか。」

「うん!!」

元気な声で答えるコクリコ。

しかしその時、けたたましい警報が鳴り響いた。

「緊急事態発生！巴里華撃団隊員は、大至急作戦司令室に集合して下さい！」

それを耳にして、大神の表情は一変した。

「怪人が現れたのか！コクリコ、君はここで待っているんだ！いいな？」

「あ、イチロー！」

コクリコの返事も聞かず、大神は走り出した。

モニターに映し出されたのは、コンコルド広場だった。確かロランスが、赤い少女の涙を展示する予定である。おそらくそれを狙っているのだろう。

「あ、おひげのおじさんだ！」

コクリコが作戦司令室に飛び込んで来たのは、その時だった。

「コクリコ、待ってるように言っただろう？」

慌てて大神が窘めようとすると、グラン・マが口を挟んだ。

「おひげのおじさん？ ロランス卿の事かい？」

「うん！ いつもボクに優しくしてくれたんだ。おじさん、どうしたの！？」

コクリコは頷いて、大神に尋ねた。

「ねえイチロー、おじさん、怪人に狙われているの！？」

「大丈夫だコクリコ。ロランスさんは絶対助ける。」

大神が元気づけるように言ったその時、コクリコは遂に決断した。

「ボクも戦う！ おじさんを助けたいんだ！」

「ふざけるのもいい加減にしろ！ 貴様ごときに一体何が出来る！ 足手まといだー！！」

たまり兼ねたグリシーヌが怒鳴るが、コクリコは聞かなかった。

「足手まといなもんか！ ボクだって力があるんだ！ イチロー、いい

でしょ？」

「…………分かった。コクリコ、一緒に戦おう！」

一瞬考えたのち、大神はコクリコの申し出を受け入れた。カルチエラが敵と分かった今、ロランスはコクリコに残された大切な人なのだ。

守れる力があるなら、守りたい。大神は、そんなコクリコの想いと勇気を尊重したのだ。

「ありがとう！ボク、頑張るよ！」

「コクリコ、一つだけ言っておくよ。誰のためでもなく、自分のために戦うんだ。いいね？」

「はい！」

グラン・マの忠告に素直な返事で頷くコクリコ。その様子に満足そうに微笑み、大神は命令を下した。

「よし！巴里華撃団花組、出撃！目標地点、コンコルド広場！！」

「了解！！」

いくつもの宝石が並ぶコンコルド広場の展示場。

そこにピトン率いるポーン達が現れたのは、突然の事だった。

急いで逃げ出す人々。

その中に、コクリコの大切なおひげのおじさん、ロランスの姿があった。

奴らの狙いは、おそらく自分の持つ赤い少女の涙。

そう考えたロランスは、他の人々を危険から守るために敢えてポーンの真ん中を突っ切つての脱出を敢行したのだ。

「イーッヒッヒッヒ！逃がしはしないよ！さあ、赤い少女の涙を渡して貰おうか？」

「あれは人類の宝だ！お前のような奴にくれてやる訳には行かん！」

ピトンやポーンに囲まれても毅然と言い放つロランス。すると、ピトンはニヤリと笑った。

「そうかい。ならアンタごと食ってやるよ！」

「そつはさせないよ！！」

「な、何っ！？誰だ！！」

突然の声に驚いて左右を見渡すピトン。

すると、ピトンとロランスの間に割って入るように、四つの光武Fが現れた。

「巴里華撃団、参上！！」

刹那、先頭に立つピンク色の光武Fが叫んだ。

「おじさん、伏せて！！」

ロランスが退避したのを確認するや、コクリコが両肩の大砲を撃った。

その攻撃を至近距離で食らったポーンは、たちまち炎上する。

「お、おのれ……………！！ポーン達、あの邪魔者を蹴散らしておしまい！！」

言っちゃ、ピトンは素早く姿をくらました。

「よし、敵蒸気獣を全滅させるぞ！！」

「了解！！」

コンコルド広場の戦闘は、前回の凱旋門に比べて戦いにくかった。ショートソードという砲台をピトンが設置していた事もあったが、何より建物が入り組んでいて、中々敵を発見できないのだ。

しかし、それを打ち消したのがコクリコだった。持ち前の身のこなしで建物の屋根を飛び移り、ポーンを片っ端からやっつけたのである。

宝石を回収したのち、砲台を全滅させ、巴里華撃団はロランスのもとへ急いだ。

「おじさん、大丈夫？」

「ああ、私は大丈夫だが、あそこに……………」

光武Fに乗って現れたコクリコに多少驚きつつも、ロランスは真上のオベリスクを指差した。

「あのオベリスクにまだ、赤い少女の涙が……………！！」

「分かりました。我々が保護しますから、貴方は避難して下さい！」

大神がそう答えた時だった。

突然地中から巨大な鯨のような怪獣が現れ、オベリスクごと赤い少女の涙に噛み付いたのだ。

「しまった！みんな、あの鯨を止めるんだ！！」

大神の指示で、花組は一斉に飛び掛かるが、鯨は凄まじいスピードで光武Fを跳ね退け、ピトンの下にたどり着いてしまった。

「イーッヒッヒッヒ！よくやったよゲオザグ。さて、赤い少女の涙はいただくからね。」

勝ち誇ったように笑ってゲオザグの頭を撫でるピトン。

しかし、配下の鯨が口にくわえた物を手に取るや、その笑いが凍りついた。

「な、何なんだいこれは？赤い少女の涙じゃないじゃないか？」

「ええっ！？」

何と、ゲオザグがくわえていたのは、飴玉だった。

確かにオベリスクをかみ砕いたはずなのに、一体どういう訳なのか。それは、一人の天才マジシヤンの仕業だった。

「さあさあ、お代は見てのお帰りだよ！」

何処にしまっていたのか、コクリコが巨大なハットとバトンを取り出した。

「アン、ドウ、トロワ！」

掛け声と共にバトンを振るとあら不思議。

ハットの中から巨大なルビーが出て来たのだ。

コクリコはゲオザグにしがみついた瞬間、一瞬の早業で飴玉と宝石を入れ替えていたのだ。

「はい、本物はこちら!!」

途端に周囲から拍手が巻き起こる。
すると、コクリコが大神に声をかけた。

「笑顔がこんなに……。イチロー、みんな笑ってるね。」

「そういうコクリコも、いい笑顔をしているよ。」

「本当？イチローだって、笑ってるよ。」

それは、仮面などではない。

コクリコの心を偽らない、本当の笑顔がそこにはあった。

「グリシーヌさんが言う程、足手まといになってませんよ?」

「うむ……。まあ、少しは役に立ったな。」

エリカに肘でつつかれ、グリシーヌがそっぽを向く。

相変わらずだが、グリシーヌもコクリコを認めたのだ。

しかし、この状況に怒る者がいた。

ピトンである。

「おのれ巴里華撃団!あくまでも邪魔するなら、容赦しないよ!!」

すると、ゲオザーグと並ぶように一体の蒸気獣が現れた。

両腕がなく、代わりに蛇の形をしたロボットが腕になっている。

「お前らだけでも絞め殺してやる!この蒸気獣『ベルスーズ』と、可愛いゲオザーグでね!!」

「来るぞ！全員戦闘配置につけ！！」

「了解！！」

大神の指令で、花組は直ちに戦闘体勢に入った。

ピトンの操るベルスーズとゲオザীগ。

この二体の怪物に、花組は劣勢を強いられる事となった。

ゲオザীগが地面に潜り、花組に地中から奇襲を仕掛けているのだ。そのゲオザীগに気を取られていると、今度はベルスーズが攻撃を仕掛けて来る。

しかし、浮足立つ巴里華撃団を救う者が現れた。

「やはり怪人の仕業だったか……………」

騒ぎを聞いてコンコルド広場に駆け付けたダイゴは、ゲオザীগとベルスーズに苦戦している花組を見た。

いずれもベルスーズの毒にやられ、動きが鈍っている。

「ピトン……………、光の力を見せてやる……………！」

正義の怒りと共に、ダイゴはスパークレンスを取り出した。
メルバを倒した光の力。
今一度それを示すかの如く、クリスタルは光っている。
ダイゴはスパークレンスを構えて時計回りに回転させ、光の名を叫んだ。

「ティガーーーーーーッ!!」

それはやはり突然現れた。

「チャッ!!」

空から飛来した巨人がベルスーズを蹴り飛ばし、コンコルド広場に降り立つ。

その姿に、巴里華撃団は驚きを露にした。

「ウルトラマンティガ!!」

それは正しく、凱旋門でメルバを倒した伝説の巨人。
ウルトラマンティガであった。

「イーッヒッヒッヒ！待ってたよティガ！ここで暴れていればアンタが来ると踏んでいたからね。」

「チャッ……………！」

巴里華撃団と対照的に、ピトンはティガの登場に不敵な笑いを見せた。

コンコルド広場の襲撃は前座に過ぎない。

ピトンの目的は、ティガを誘い出して抹殺する事だったのだ。

「さあゲオザーク！あの裏切り者を噛み千切っておやり！」

ピトンの命令で、地中鯨ゲオザークがティガに襲い掛かった。

「ハッ！」

前方から背鰭を出した状態で突っ込んで来るゲオザーク。

ティガはそれを前転で避けると、右手を突き出した。

ハンドスラッシュ……………突き出した右手から爆発する光弾を連射する、ティガの必殺技だ。

「ハッ！」

右手から打ち出された青白い光弾は、ゲオザークの背鰭を直撃した。それに伴い、ゲオザークは苦しみながら地中に潜る。

「凄い……………、あれがウルトラマンなんだ……………」

初めて見る光の巨人に、瞳を輝かせるコクリコ。

今まで自分達が苦戦していた敵の片方を難無く退けたその力は、正

に救世主の三文字が相応しい。

「チャッ！」

次の目標をベルスーズに定め、ティガが構えを取る。
しかし、ピトンはニヤリと笑った。

「いいのかい？あたしばかり見て……………」

そう笑った時、大神はベルスーズの異変に気づいた。

ベルスーズの腕の蛇がない。

それと同時にベルスーズの目が赤く光り、ゲオザーグ以外に地面を揺らす震動を感じる。

「まさか…………、ティガ！下だ！」

大神が気づいて叫ぶが遅かった。

「ジュワッ！？」

突然地中から現れたベルスーズの腕が、ティガに巻き付いてがんじがらめにしてしまったのだ。

「イーッヒッヒッヒ！罠にかかったねティガ。」

ピトンが凶悪な顔で笑う。

ゲオザーグがやられて油断した隙に、腕でティガを捕まえる作戦だったのだ。

「さあ、巴里華撃団と共にあの世へお行き！ル・シャ・ドウ・デラ・

テール！」

蛇の口から、緑色の猛毒ガスが浴びせられた。ガスは勢い良く飛散し、ティガと花組を瞬く間に包んでしまった。

「くそっ、これじゃあ助けに行く事も……………」

動かない光武Fに、大神が悔しげに拳を握る。すると、ベルスーズに走る一つの影が目に入った。

「コクリコッ!?」

それは、何とコクリコだった。コクリコは持ち前のジャンプで毒ガスをかわしていたのだ。

「えい！」

屋根からジャンプすると同時に、コクリコはベルスーズの顔面にドロップキックをかました。

「よくもみんなを騙したな！絶対許さない！」

「フン、調子に乗るんじゃないよ！お前から絞め殺してやる！」

「やれるもんならやってみろ！みんなはボクが守るんだ！」

ピトンに言い返し、コクリコはバトンを取り出した。

「イツツ、ショータイム！みんな、出ておいで！マジック・ボンボン！……」

ボタンが振られると同時に沢山の猫が現れ、ベルスーズを引つ掻き回した。

「クワッ!? くそ、ガキが……………!」

その一撃で、ベルスーズは赤い目を潰された。すると、蛇の締めが急に緩んだ。

「ティガ! 今だよ!」

「チャッ!」

コクリコの言葉に頷き、ティガは蛇を振りほどく。そして、両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「ンウウウ……………、ハッ!」

勢い良く両腕を振り下ろすティガ。
すると、ティガの体色が赤と銀に変わった。
スカイタイプと対を成し、超怪力で敵をたたきのめすパワータイプだ。

「チッ! ゲオザーグ! 早くティガを片付けておしまい!」

ピトンの命令を受け、ゲオザーグがティガに迫る。
しかし、今度は違った。

「チャッ!」

ティガはどつしりとゲオザーグを待ち構えると、その牙を掴んで地

上に引つ張り上げたのだ。

全身を太陽の光に曝され、苦しむゲオザーク。

「デュアッ!!」

ティガはゲオザークを高々と持ち上げると、ベルスーズ目掛けて投げつけた。

「クワッ!?!」

たちまちベルスーズは、ゲオザークの下敷きになって身動きを封じられる。

その時、ティガのカラータイマーも点滅を始めた。

「チャッ!!」

ティガは胸のカラータイマーに両手を合わせ、下に降ろした。すると、その二つの掌に赤い光が宿る。

「ハアアア……………!!」

そのまま両手を大きく外側から回し、膨大なエネルギーが圧縮される。

デラシウム光流…………… エネルギーをボール状に圧縮し、敵にぶつけるパワータイプの必殺技だ。

発動まで僅かに時間がかかるが、威力はランバルト光弾を大きく上回る。

「ダアッ!!!!」

胸の前で圧縮された光のボールが、裂帛の気合いと共にゲオザーグに直撃した。

刹那、ゲオザーグを光が包む。

「クワッ！あ、あたしはまだ死ねない……………！」

死期を悟ったか、ピトンが吠えた。

「ティガ…………、貴様を倒してその宝石を食らい尽くすまで、死ねないんだよ！！」

そう叫ぶと同時に、ベルスーズはゲオザーグ諸とも大爆発した。

「……………終わったね。」

「ああ、大活躍だったなコクリコ。」

「凄い！初めてなんて信じられない！」

「……………霊力の高さだけは認めてやろう。」

光武Fから降りたコクリコに、花組が労いの言葉をかけた。
ゲオザーグから赤い少女の涙を取り戻しただけでなく、ティガの窮

地までも救ったのだ。

これを大活躍と言わずして何と言おう。

「エヘッ。」

恥ずかしそうにコクリコが笑う。
すると、エリカが大神に言った。

「それじゃあアレ、やりましょうか!」

「アレって……………?」

初めての戦いで知らないコクリコが尋ねる。
すると、グリシーヌが呆れた口調で説明した。

「巴里華撃団には、勝利した後の約束事があるらしいのだ。私は不本意なのだ。」

「ふーん、そうなんだ。それじゃ、いくよ!」

「勝利のポーズ、決めっ!!」

「チャッ!」

その様子を見届け、ティガは空高く飛び立った。

それからしばらく、コクリコの姿はシャノワールにあった。
それも、レビユー服を着て。

「へへへ、これからボクもシャノワールのステージに立てるんだって。」

正式に巴里華撃団のメンバーに迎えられたコクリコは、グラン・マの提案でシャノワールでも働く事になった。
最も、昼はサーカスがあるため、夜しか出演できないが。

「それとね、市場の手伝いも続けるつもりなんだ。」

「おいおい……、それじゃ身体がいくつあっても足りないぞ?」

「あ、そうか。アハハ……!!」

大神に言われ、コクリコは笑った。

今までのような仮面の笑顔ではなく、心からの笑顔で。

笑顔の仮面（後書き）

《次回予告》

私はブルメール家の名誉と誇りにかけ、巴里を守る。

光の巨人だか何だか知らぬが、そのような者が出る幕はない！

次回、サクラ大戦3！

《サムライの誇り》

愛の御旗のもとに……

貴公のようには……なれん……

サムライの誇り（前書き）

ゲームで言つと第3話。

こうして見ると、プチミニントの話もよく似たくだりだった気も……
…

サムライの誇り

「……………エリカさんが？」

コンコルド広場の一件からしばらくが経ち、巴里が梅雨の時期に差し掛かった頃、ダイゴはレノ神父の話に驚きを見せた。

エリカが屋敷へメイドの仕事に行った……………。

ダイゴの耳が正しければ、レノ神父はそう言ったはずだ。

「ハイ……………。何でも大神さんがブルーメール家のメイドをしていると言うので手伝いにと……………」

「メイド……………？大神さんってそんな趣味だったねのかな？」

あの真面目を絵に描いたような男が女装趣味とは、流石にダイゴも考えづらい。

エリカの情報だけにやや信憑性に欠けるが、もし事実なら大神も随分恐ろしい趣味だ。

「しかし、大神さんは真面目で誠実な方ですから……………。何か事情がおありかも知れませんが、ハイ。」

確かにレノ神父の言う通りだった。

エリカは嘘はつかないが、内容に大事な事が抜けている事が多い。大神も趣味と言うより、何か理由があったと考える方が自然だ。

特にエリカが向かったのはグリシーヌの屋敷という。

もしかしたらお人よしの大神の事、メイドを手伝うように言われて断れなかったのかもしれない。

「ダイゴさん。気になるなら行かれてみては如何ですか？今日のボランティアは、構いませんから。」

「……………そうだね。ありがとう、神父様。」

レノ神父に礼を述べつつ、ダイゴはグリシーヌ邸に向かって歩きだした。

ブルーメール家は、巴里の貴族の中でも名門中の名門だ。

世界の歴史の中でも名高いノルマンディの血を引く事に由来する。

これに唯一肩を並べられる存在が、シャドーブリアン家であった。

武のブルーメールと、商のシャドーブリアン。

この二つが、巴里の双璧を成す名門貴族だった。

当然、その名門の息女たるグリシーヌの屋敷は豪勢な訳で。

「お、大きい……………」

何度か遠目に見た事があるとはいえ、その巨大な威圧感に圧倒されるダイゴ。

そのダイゴの耳に声が届いたのは、その時だった。

「ダイゴさ〜ん！〜！」

その声と共に、エリカが煙を上げて走って来た。

「やっぱり来てくれたんですね！エリカ信じてました！」

「え？あ、そうなの……………」

とりあえず自分が来た事を喜んでくれたらしく、ダイゴも笑顔を返す。

すると、エリカがダイゴの腕を掴んだ。

「ほら、何突っ立てるんですか？早く来て下さい！」

「へ？ち、ちょっとエリカさん！？」

訳の分からないまま、屋敷の中に連れ込まれるダイゴ。
そして、屋敷につくや否やエリカはエントランスで大声を張り上げた。

「タレブルーさん！」

その声を聞いて現れたのは、グリシーヌ邸でも最もキャリアの長いメイドのタレブルーだった。

かなり年を召されてはいるものの、その仕事の手際のよさは誰にも負けない、現役バリバリのメイドだ。

「何ぞですかエリカ、騒々しい。」

指示棒を手に階段を降りてきたタレブルーは、ダイゴの姿に目を丸くした。

「まあエリカ！本当に連れて来たざますね！？」

「はい！ダイゴさんはこういう時、必ず駆け付けてくれる人ですから！」

何やら自慢げに胸を張るエリカ。

どうやら自分がここに来ると、タレブーに宣言していたらしい。

「それではダイゴ、貴方も早速着替えて来るざます。」

そう言つて、タレブーはダイゴに一着のメイド服を渡した。

「……………へ？」

「当屋敷で働くからには、所定のメイド服を着用してもらつざます。」

「

「そ、それじゃあ……………」

まさかと思つてダイゴはエリカに目を向ける。
すると、エリカは張り切った表情で言つた。

「はい！これからダイゴさんも、私達と一緒にがんばりましょうね
！！」

やはりそうか、とダイゴは思った。

来た時から薄々と予感していた。

恐らくエリカの事、自分にもメイドをやらせるつもりだろうと。
そして、幸か不幸か##NAME1##の予感は的中した。

「…………男用はないの？」

タレブーから渡されたメイド服は、何処からどう見ても女用だ。どう考えても、自分には合わなさ過ぎる。しかし、タレブーは首を横に振った。

「それはないします。ブルメール家は代々、メイドは女の仕事します。」

「あ、そうなの…………。」

「そもそもオオガミも、お嬢様との決闘に負けてここにいるします。オオガミもダイゴも、この名誉ある仕事に携われるのは、例外中の例外します。」

「…………決闘？」

やはり趣味ではなく事情だったとしても、まさか決闘をしていたとは思わず、ダイゴは驚いた。

「さあ、早く着替えて仕事します。ダイゴはエリカと二人で、庭の掃除しますよ。」

「…………やっぱり、こうなるのか…………。」

有無を言わせぬ状況に、ダイゴはため息をつくしかなかった。

何故大神がメイドをやる事になったのか。

そのいきさつは、隣にいるエリカが作業しながらかい摘まんで説明してくれた。

何でも今朝、大神はみんなを集めてこんな事を言ったらしい。

「今日は思い切ってみんなで遊ぼう。」

何でも日本の遊びを教えると言う事だったらしい。

そして、エリカ、コクリコ、グリシー又の四人で遊んでいたのだが、グリシー又は乗り気でなかったせいか怒りだしたという。

しかし、コクリコに羽つきで負けて墨を塗られそうになったと聞き、ダイゴは思わず納得した。

顔に墨を塗られるという事は則ち、羽つきに負けたという事。

グリシー又にとってそれは、コクリコが相手だった事も含めて堪え難い屈辱だったのだろう。

「……………それで、大神さんと決闘なんて言い出したんだね？」

芝刈り機を動かしながらダイゴが言うと、エリカは石床を箒で掃きながら答えた。

「そうなんです。それで大神さんも受けて立つなんて言い出して……………」

どういう訳か、グリシー又邸の隣の湖には何隻もの船がある。

決闘はそのマストで行われた。

互いに命綱を足につけ、最も得意とする武器で相手を倒した方が勝ちというものだ。

大神もグリシーヌも斧を使って戦い、最初は大神が優勢だったらしいのだが、一瞬躊躇った隙にグリシーヌに負けてしまったらしい。何とも大神らしい事だと、ダイゴは思った。

そして、大神一人に働かせては可哀相だからと、エリカとコクリコも手伝う事にしたらしい。

「よく手伝う気になったね。得する事なんてないのにさ。」

決闘に負けた大神は自業自得として、エリカもコクリコも何故手伝う気になったのか、ダイゴは不思議でたまらなかった。すると、エリカはさも当然の如く言っただけだ。

「だって私もコクリコも、大神さんの役に立ちたかったですから……。」

「……………」

その一瞬、ダイゴの口元が引き攣った。恐らく大神の笑顔でも想像したのだろう。エリカの顔は赤く染まっていた。

「……………そんなにあの人が好きなんだ。」

「はい。……………ダイゴさんは、大神さんの事嫌いですか？」

探るようにエリカが尋ねた。

「別に。ただ、やたら女受けするなと思って。」

初めて会った時から、ダイゴは大神に対してあまり良い感情を持つ

てはいなかった。

加えて、大神がどの女性にも目につく程に優しい点が、拍車をかけていた。

フェミニストとは違うのだろうが、それでもどの女性にも優しくしている様子は、男から見て気分の良いものではない。

「女性だけじゃないですよ。大神さんは巴里のみんなに愛されてます。」

「みんな？あの人が？」

「ダイゴさんだって、大神さんのために来てくれたじゃないですか。」

そう言って、エリカはダイゴの手を両手で優しく包んだ。

その両手の暖かさに、ダイゴは思わずエリカから目を逸らす。

「ダイゴさん……、貴方はきっと、まだ気づいていないだけなんです。大神さんの素晴らしさに……。」

「……………」

ダイゴは答えようとしなかった。

人々を分け隔てなく笑顔にできるのは、確かに大神の魅力だろう。しかし、ダイゴは認めたくなかった。

それを認めれば、エリカが自分を離れて大神の下へ行ってしまうような、そんな気がしたからだ。

「（そんなにアイツがいいのか？僕よりも……………」

ダイゴが口には出せない言葉を心で訴えた時、俄かに玄関が騒がしくなった。

「……………何があつたの？」

「さあ？私もよく分かりませんが……………」

ダイゴに尋ねられて首を傾げるエリカ。

すると、その後ろから声が聞こえてきた。

「あれはリツシュ伯爵。巴里の中でも五本の指に入る名門貴族の人だ。」

「あ、グリシー又さん。」

そこに立っていたのはグリシー又だった。

何か考え事でもしていたのか、いつにも増して表情が険しい。

そしてその表情は、ダイゴを見て更に険しくなった。

「……………やはりお前も来ていたのか。」

「……………」

明らかに快い歓迎とは違う言葉に、ダイゴは無言でグリシー又を見返した。

どちらも顔見知りではあるものの、仲良しという訳ではない。

グリシー又はあからさまにダイゴを避けているし、ダイゴも大して気にしていなかった。

「まあ良い。ほら、さっさと行け。隊長とコクリコにばかり働かせるな。」

「はい。行きましょ、ダイゴさん。」

「……………うん。」

グリシーヌに言われ、ダイゴはエリカについて行く形でその場を後にした。

大広間の前の扉の前には、既に大神とコクリコの姿があった。

「あれ、ダイゴ！ダイゴも来てたの？」

二人を見つけるや、コクリコが驚いた。

まさかダイゴが来ていたとは、夢にも思わなかったのだろう。見ると、大神も意外そうな顔をしていた。

「そうなんです！#ダイゴさんも大神さんを助けるために駆け付けてくれたんです！」

得意そうに胸を張るエリカ。

どうやらみんなにダイゴが来ると宣言していたようだ。

「エリカさんの言う通りだったな。ダイゴ、ありがとう。」

エリカの言葉を真に受けたのか、礼を述べる大神。
ダイゴはそれには答えず、コクリコに尋ねた。

「二人は、ここで何してるの？」

「うん。さっきリッシュ伯爵って人が来たんだ。それで広間に通したんだけど……………」

すると、エリカが興味深そうに尋ねた。

「ねえコクリコ。そのリッシュ伯爵って、どんな人だった？」

「え？別に普通だったけど……………」

コクリコが答えた時だった。

エリカが広間の扉に手をかけたのである。

「ち、ちよつとエリカさん!？」

「駄目だよエリカ!怒られちゃうよ!」

慌てて止めようとするコクリコとダイゴ。

一応自分達は今グリシー又邸のメイドなのだ。

そのメイドが客を盗み見るのはマナー違反も甚だしい。

しかし、エリカは二人の説得を聞かなかった。

「大丈夫です。ほら、何事もまずは調べる事が大事って言うでしょ？」

そんな言葉は聞いた事もないが、ともかく扉を開くエリカ。しかし、ここでもエリカの天才的ドジが発揮された。

何とエリカは扉の前で躓き、派手に扉にダイブしてしまったのだ。当然扉はけたたましい音と共に全開になる訳で……。

「あ……………」

異口同音の声と共に三人の顔を冷や汗が伝う。

「まあ、あなたたち！のぞき見はマナー違反ですよ！」

「す、すみません！」

すかさずタレブーに一喝されて頭を下げる大神。すると、奥のテーブルから笑い声が聞こえてきた。

「ハッハッハッ、構いませんよ。この私の姿に見とれての事でしゅうから。」

それは、グリシーヌにも劣らない豪華な装飾品で着飾った男だった。恐らくは彼がリッシュ伯爵だろう。

そんな事を考えていると、リッシュ伯爵はタレブーに尋ねた。

「……………随分むさ苦しい輩共ですな。マダム、こちらはグリシーヌ嬢のペットですか？」

「いいえリッシュ伯爵様。お嬢様のお戯れにございます。」

律儀にそう答えると、タレブーは四人を叱り付けた。

「客人に失礼を働く事は、以つての外ざます！四人共お仕置きざます！」

しかし、ここで止める声が上がった。
リッシュ伯爵である。

「その必要はございませんよマダム。こつう時は叱るより……………」

「
そう言いつつ一番近いコクリコの方に歩み寄るリッシュ伯爵。
刹那、ダイゴはリッシュ伯爵からただならぬ殺気を感じた。

「身体に覚えさせるべきです！！」

「コクリコつ、危ない！！」

大神が叫んでコクリコとリッシュ伯爵の間に割つて入る。
その直後、リッシュ伯爵の拳が深々と大神の鳩尾に減り込んだ。

「ぐふつ……………！！」

「イチロー！？」

目の前でうずくまる大神に驚くコクリコ。
しかし、リッシュ伯爵はその大神の頭を掴み上げ、顔面を膝にたたき付けた。

「！！！！」

声にならない叫びと共に床に倒れる大神。

更にその腹を蹴りつけようとしたリッシュ伯爵だったが、間一髪の所でダイゴが止めた。

「……………言葉より先に暴力に訴えるなんて、貴族の名折れだね。」

「それを貴族というんだよ少年。君もその生ゴミのようにされたくなかったら、その汚い手を退けて貰おうか？」

そう言いつつリッシュ伯爵はダイゴを殴ろうとするが、その前にタレブーがその場を諫めた。

「この屋敷内の乱闘は固くお断りする致します。」

「……………仕方ない。確かにマダムの言う通りですな。」

タレブーに諫められ、リッシュ伯爵は拳を降ろした。

「そもそもこの私が、このようなクズに触れる等、あつてはなりません。さあ、早くその生ゴミを片付けてくれたまえ。」

顎で三人に命令するリッシュ伯爵。

その言葉にコクリコは言い返そうとしたが、ダイゴに止められた。今ここで騒ぎを大きくしては、グリシーヌにも迷惑がかかるからだ。ともかく気を失った大神を運ぼうとした時、別の声がかかった。

「あの……………」

振り返った三人の目に飛び込んできたのは、自分達に近い年齢の少女だった。

短く切り揃えられた黒い髪と黒い服が特徴的な、大和撫子を絵にし

たような姿。

三人はその清楚な佇まいに、一瞬見とれてしまった。

「よろしければ、私の部屋で休ませませんか？ここから近いですし……。」

端正な顔で優しく微笑み、少女が言った。

「あ、うん。そうだね……。」

その声で我に還ったダイゴが答え、三人は大神を抱えて少女の後を追った。

少女に案内された部屋は、落ち着きのある日本風の和室だった。豪勢な屋敷とは対照的に、畳や屏風などで心の休まる空間になっている。

「ありがとう。おかげで助かったよ。」

ダイゴが礼を言うと、少女は恥ずかしげに頬を染めた。

「大した事ではありませんよ。」

「……そういえば、自己紹介がまだだったよね？僕はダイゴモロボシ。さっきの二人は、エリカとコクリコって言うんだ。」

今はその場にいない二人を含めて、ダイゴは簡単に自己紹介をした。エリカもコクリコも、今は部屋にいない。

というのも、先程の騒ぎのお仕置きとしてすぐに仕事割り当てられてしまったからだ。

よって今この部屋には、少女の他はダイゴと寝ている大神しかいなかった。

「やはり日本の方だったんですね。私は、北大路花火と申します。」

「花火さんって言うんだ……。よろしくね。」

同じ日本人だから笑顔で言うダイゴに、花火も笑顔を見せた。

「うふふ、やっぱりグリシーヌに聞いた通りの方ですね。」

「グリシーヌに？」

「はい。年の割に鋭い方と聞いていますわ。」

その言葉に、ダイゴのグリシーヌに対する印象は、少なからず変化した。

グリシーヌはいつも、事ある毎に自分を威嚇するように睨みを効かせてくる。

そんな彼女が、まさか自分をそう評価していたとは思ってもよらなかった。

「ダイゴさんは、何時から巴里に？」

ふと、花火が尋ねた。

「生まれてすぐだよ。物心ついた時から、僕は巴里にいた。」

「まあ、私と同じなのですね。」

ダイゴが巴里育ちと思わなかったのか、花火は意外そうに驚いた。

「それではダイゴさんも、留学か何かで？」

「いや……、そんなのじゃない。」

忘れかけたあの雨の日を思い出し、ダイゴは表情を暗くした。すると、花火は聞いてはならない事を察して謝った。

「あ、すみません……。余計な事を……。」

「いや、いいよ……。」

花火に悪気がない事は分かっている。

ダイゴは、別の話で雰囲気をつらわせる事にした。

「それじゃあ、花火さんも巴里育ちなの？」

「はい。家の意向で、古くから親交のあったブルームール家に居候させていただいてます。」

北大路家は、日本でも有名な男爵家の一つだ。

しかしその仕事柄日本を離れる事が多く、花火は幼い頃からフランスで生活していた。

その為まだ知らない故郷に思いを馳せ、日本について様々な事を学

んでいた。

そんな中、寄宿舎で出会ったのがグリシーヌだった。

「グリシーヌとは、両家の親交もあってすぐに打ち解けて、すぐに親友になりました。」

「へえ、じゃあグリシーヌとは長い付き合いなんだ。」

元々親交の深かったブルーメールと北大路。

その両家の令嬢ならば、同様に仲良しなのは自然な事だ。それにグリシーヌが勇猛な性格なのに対し、花火は物静かな性格でぶつかり合う所がない。

恐らく衝突の少ない二人の性格も、親友になった要因だろうと、ダイゴは納得した。

「でも、グリシーヌは私にも話さない事もあります。」

「例えば？」

「自分の誇りについてとか……。グリシーヌは、人に弱みを見せない性格ですから。」

その言葉に、ダイゴはまたも納得した。

グリシーヌは貴族としてのプライドを非常に大事にしている。それを揺らぐ事を決して許さず、斧を振り回して黙らせる事もあった。

そんな彼女の事、自分の弱みを見せる以前に、弱みがあつてはならないと考えていたのかもしれない。

「グリシーヌはこうも言っていましたわ。完全無欠の花婿を見つける

と。」

「完全無欠……………」

何ともグリシー又らしい考えだと、ダイゴは思った。

「でも、そんな人っているのかな……………」

完全無欠。全てにおいて非の打ち所が存在しない人間。

しかし人間である以上、何処かに必ず欠点はある。

そんな中で完全無欠など、ある意味気の長い話だ。

実際の所、花火も似た考えだった。

「さあ……………。彼女の理想というだけです。実際に今日来られたリッシュ伯爵も、縁談目的だったようです。」

「……………あの男と？」

リッシュ伯爵という名前に、ダイゴはあからさまに不快感を示した。コクリコのようにか弱い少女に平気で暴力を振るい、大神をゴミ扱いするあの名ばかり貴族。

ダイゴの考えからすれば、最も完全無欠とは掛け離れた人物である。

「先の一件を見る限り、私も縁談に賛成しかねます。しかし……………」

「

やはりリッシュ伯爵の行いを目の当たりにしていたために、花火も縁談に不服の表情を見せる。

「貴族社会には、やはり地位や身分を尊重して、軽はずみな行動が

取れません。もしかしたらグリシーヌも……………」

確かにそうだ。

プライドが高いとはいえ、グリシーヌは目下のものを見下すような事をしない。

そんな彼女がリッシュ伯爵の本性を知れば、すぐにでも斧を突き付けるだろう。

しかし、貴族社会では簡単にはいかなかった。

貴族というのは、古くから伝わる家のしきたりや風習を重視し、地位や身分を末永く後世に伝えなければならない。

そのため、不用意な行いで先代の者が築いた栄光に泥を塗る事は貴族社会からの抹殺を意味する。

リッシュ伯爵は、ブルーメール家より下とはいえ、巴里でも五本の指に入る名門貴族だ。

たとえブルーメール家といえども、そんな名門中の名門との縁談を断れば、リッシュ伯爵に恥をかかせる事になってしまう。

それはブルーメール家の今後にも深く関わるために、強く言い出せないのが現状だった。

「……………この人、お願いね。」

そう言いつつ、ダイゴは思い立ったように立ち上がった。

「ダイゴさん、どちらへ？」

「ちょっと用事が出来てね。」

花火にそう答え、ダイゴは部屋を後にした。

屋敷の前に広がる庭。

その隅にあるテラスに、グリシーヌの姿はあった。

「ここにいたんだ。」

「……………そなたか。」

いつもと違い、明らかに無気力な返事が返って来た。
何かに悩み疲れているような、そんな様子だ。

「……………ダイゴ。」

背中を向けたまま、グリシーヌが語り始めた。

「鋭いそなたの事、私の言わんとしている事が分かるであろう？」

「リツシュ伯爵との縁談……………だね？」

「そうだ。……………正直な所、迷っている。」

表情は見えないが、暗い顔である事は容易に想像できる。

背中を向けるのも、その表情を見られたくないためだろうか。

「先の件、そなたが正しいと思う。だが、ブルームール家を危うくする訳にはいかん。……だが、それが本当に名誉ある事かと問われると、解らぬ。」

「どういう事？」

「ブルームール家は、今でこそ貴族を名乗っているが、元々はバイキングだったのだ。荒れ狂う海と戦い、家族を守る。そうして生き抜いた時代を思うと、今の地位や名誉を守る事が虚しくてな……。」

あながち驚くような話ではなかった。

グリシー又は麗しい外見と裏腹に勇猛な強さを持つ。

それがかつてのバイキング時代の先祖の名残と考えれば、納得がいく。

「結局は私も、家の一部に過ぎんだ。」

「……………そうかなあ？」

ここに至り、ようやくダイゴが口を開いた。

「地位や名誉が虚しいって分かってるなら、断ればいい事じゃない？」

「そなた、話を聞いていたのか？私はブルームール家の一部なのぞぞ？」

「そんな事言つて、本当は自分の意志を貫くのが怖いだけじゃないの？」

ダイゴのその言葉に、グリシー又は肩を震わせた。
そして、いつものように斧を取り、ダイゴに突き付けた。

「貴様……、もう一度言ってみろ！この私が怖いだと？」

「だったら地位とか名誉とか気にしないで、断ればいいじゃない。
あの人完全無欠に見えるの？」

気の弱い者なら逃げ出しそうな形相のグリシー又は、面と向かって
言い返すダイゴ。
すると、グリシー又は頭をふった。

「ええい黙れ！貴様のような平民に何が分かる！？」

「うん、分からない。」

「……………何？」

思いも寄らない言葉に、グリシー又は一瞬怒りを忘れた。
その彼女に、ダイゴはハッキリと告げた。

「地位とか家とか誇りとか言って逃げるような人の気持ちなんて、
分かりたくもないよ。」

「なっ……………！！」

怒りのあまり固まるグリシー又を冷ややかに見て、ダイゴは歩きだ
した。

「待てダイゴ！！この私を愚弄するつもりか！？」

「悔しかったら考えて見れば？今のグリシー又は、愚弄されて当然だと思うよ。」

平然と言つてのけ、ダイゴはテラスを立ち去つた。

「……………」

その後ろ姿を、グリシー又は無言で睨みつけていた。

「……………」

テラスを離れた後、ダイゴはふと玄関前で足を止めた。
理由は簡単。

いつものようにポケットのスパークレンスが、光り始めたからだ。
シゾーとピトンの事例を踏まえると、近くに怪人の潜む可能性が高い。

「……………隠れてないで出て来たら？」

確証はないが、ダイゴは試しにかまをかけてみた。

予想が正しければ、敵は姿形を変えてこの屋敷に来る程の周到さを持っている。

もしかしたらこんな場所では正体を現さないのかもしれない。

まあダイゴにしてみれば、その方がすぐに襲われない分都合が良いのだが。

「…………やはり貴様か。」

ダイゴの言葉に答えるようにして現れたのは、何とリッシュ伯爵だった。

その姿は表情こそそのままだが、こちらに向けられた殺気は並々ならぬものがある。

「それはこっちの台詞だよ。暴力なんて、まともな人間のする事じゃないもんね。」

「フツ、貴様こそよく言う。この私が人間に何故躊躇わねばならん？」

明らかに人間という種族を下に見た物言いに、ダイゴは目の前の男があゝの怪人と同種である事を確信した。
最も、相手も隠すつもりなどないのだろうが。

「一つ聞きたい。貴族を狙う理由は？」

「簡単な事だ。人間に上下などない。あるのは愚かという事実だけだ。」

「そんな奴らは、みんな自分の下に生きろと…………？」

探るようにダイゴが言うと、リッシュ伯爵は不敵に笑った。

「そういう事だ。人間に味方する貴様には一生分からんだろっかな。」

「

その時、屋敷の方から声が聞こえて来た。

「ダイゴ！ダイゴ！何処ざますか！？」

「どうやら今回の話はこれまでのようだな。」

タレブーの声に、リツシュ伯爵はニヤリと笑った。

確かにここで下手に遅れては、自分まで怪しまれてしまう。

ダイゴは薄笑いを浮かべたリツシュ伯爵をその場に残し、屋敷に戻って行った。

「……………時が経つのは早いざます。オオガミ、エリカ、ダイゴ、コクリコ。あなたたちの仕事も終わりざます。」

四人を玄関に集め、タレブーが言った。

グリシーヌが大神に要求したのは、一日メイドとして働く事。その長いようで短い一日が、ようやく終わったのだ。

「あなたたちがこのブルーメール家で得た技術は、末永くあなたたちの糧になるざます。」

「（ねえダイゴさん。タレブーさんって、意外といい人でしたね。）」

「それを生かし、これからは礼儀と気品を身につけるぞますよ！」

「（……………やっぱり嫌な人じゃない？）」

ヒソヒソ話をする二人に気づかず、タレブーは感慨深げに一人頷いた。

「それでは四人共、よく頑張ったぞます。元気に頑張るぞますよ。」

翌日、大神達はグラン・マの召集を受けて作戦司令室に集まっていた。

「……………集まったみたいだね。」

周囲を見渡し、グラン・マが言った。

今回、グリシー又はいない。

昨日同様、リッシュ伯爵が来ているからだ。

「司令、話とは……………？」

「ああ、まずはこの写真を見とくれ。」

開口一番に尋ねる大神にそう答えると、グラン・マは机の上に写真を並べた。

それに写っていたのは、巴里でも指折りの貴族達だった。

着飾った装飾品や高貴な服装から、かなりの上流貴族と分かる。

「実は最近、上流階級の貴族が失踪する事件が相次いでね。これはその貴族達なんだよ。」

フランスの首都である巴里には、沢山の貴族がいる。

しかし最近になって、その貴族が次々と行方をくらませていた。

写真はざっと十数枚。

つまり、その数の貴族が行方不明になっている事になる。

その時、写真を見ていたコクリコが何かに気付いた様子で一枚の写真を手に取った。

「イチロー！この写真！」

「どうした、コクリコ？……こ、これは！！」

コクリコに渡された写真を見て、大神も驚きの声を上げた。

何故ならその写真の人物は、自分達も知る人物だったからだ。

「こいつは昨日グリシーヌの屋敷にいた、リツシュ伯爵じゃないか！」

「そいつは妙だね。リツシュ伯爵は一週間前から行方不明になっていたはずだよ？」

大神の言葉に、グラン・マが眉をひそめた。

一週間前から行方が分からないはずのリッシュ伯爵が、昨日グリシーヌの屋敷に現れた。

グラン・マの話が嘘でなければ、これは矛盾している。

「じゃああのリッシュ伯爵は……………！」

昨日現れたリッシュ伯爵が本人である可能性は薄い。
だとすれば、昨日の暴力的な態度も納得がいく。

「大神さん、もしかしたらグリシーヌさんが……………！」

大神も予想した不安を、エリカが口にした。

もし大神の予想が当たっていれば、リッシュ伯爵は偽者で、尚且つ一連の貴族失踪事件に関与している可能性が高い。
だとすれば、次に危ないのは巴里屈指の名門貴族であるグリシーヌだった。

「しかしまだ証拠がない。ムッシュ、下手に動くんじゃないよ。」

今にもグリシーヌ邸に急行しようとした花組に、グラン・マが釘をさした。怪しいとはいえ、リッシュ伯爵が犯人である決定的な証拠が手元がない以上、軽はずみな行動はとれない。

場合によっては、ブルーメール家に悪い印象を与えてしまい、立場を悪くしてしまうからだ。

大神はわずかに考えたのち、決断した。

「……………よし、ここは俺が一人で行く。大人数より単独の方がやりやすい。」

大人数で乗り込んで騒いでは、逆にこちらが悪者扱いされてしまう。それに、大神には一つの考えがあった。

「よし、決まりだ。あたしらは何処に貴族が捕まっているか調べるから、ムツシュはグリシーヌを頼んだよ！」

「了解！」

力強い返事を返し、大神は作戦司令室を飛び出した。

「グリシーヌ！」

屋敷につくや否や、大神は中庭に駆け付けた。

そこには、驚いた様子のグリシーヌと、邪魔された様子のリツシュ伯爵の姿がある。

「どうした？屋敷内で騒ぐなど珍しい……………」

「グリシーヌ！奴から離れろ！そいつは……………」

訝しむグリシーヌに構わず、大神はリツシュ伯爵を指差した。

「私が何だ？言ってみなさい。」

自信があるのか、余裕の表情を見せるリツシュ伯爵。
大神はその表情を一点に見据え、言い放った。

「リツシュ伯爵！貴方に決闘を申し込む！貴方も誇りある貴族として、断れないはずだ。」

証拠はないが、リツシュ伯爵は限りなく黒だ。

大神は証拠云々に関係なく、決闘で白黒をハッキリさせる事にした。そうすれば自尊心の固まりであるリツシュ伯爵は断れないし、更に自分が勝てば、東洋人に負けた事でブルーメール家から縁談を断られる。

リツシュ伯爵が決闘を受けて自分が勝たなければならないが、大神に勝算はあった。

「……………いいでしょう。誇りを賭けてその挑戦、受けてあげますよ。」

案の定決闘に応じたリツシュ伯爵に笑みを見せ、大神はグリシーヌを見た。

「グリシーヌ。君は俺が絶対に守ってやるからな。」

「……………隊長……………」

その言葉に、グリシーヌは少なからず驚いた。

以前大神に、リツシュ伯爵と望まない縁談を相談していたが、まさか大神が断れない自分を助けに来てくれるとは、思いもしない事だ

った。

「決闘はブルーメール家の伝統に従う。異存はないな!？」

「いいでしょう。」

大神とリッシュ伯爵の決闘の舞台は、以前グリシーヌとの決闘に使用した船のマストの上だった。

昨日と同じように足に命綱を巻き、各々武器を手にする二人。しかし、グリシーヌは昨日と全く違う何かに気付いた。

「あの抜き身の太刀のように鋭い姿勢……。間違いない、あれが隊長の真の姿か……。」

斧を使っていた前回と異なり、大神はその手に愛用の太刀を握っていた。

「随分と珍妙な武器ですね。まあ、一分で終わらせてもらいましょう!」

先に動いたのはリッシュ伯爵だった。

細身のレイピアを突き、体勢に構え、大神の心臓目掛けて突き出して来る。

その速さはグリシーヌをも越えるほどのものだったが、大神は最小

限の動きで難無くかわして見せた。

「……………あのスピードを見切るだと……………！」

以前とはまるで動きが違う。

もし今の大神と勝負をしようものなら、自分は瞬殺されていたろう。

大神の華麗なる太刀さばきに、グリシー又はそう思わずにいられたかった。

そして、それに驚いたのはグリシー又だけではなかった。

「む……………。私の突きを避けるとは、中々やり手のようだ。」

言いながら、更にリツシュ伯爵は攻撃を仕掛けて来た。

「これはかわせまい！」

右から左への払い。

確かに狭いマストの上では避けようがないが、大神にして見れば大した問題ではなかった。

「これしき！」

大神は横から来る刃を避ける事なく、真上に弾き返した。

「なっ……………！？」

「もらったー！」

レイピアはリツシュ伯爵の手を離れて宙を舞う。

大神はすかさず、リッシュ伯爵に切り掛かった。

「ぐおおっ……………！」

右肩を浅く斬られ、リッシュ伯爵が片膝をつく。

それと同時に、レイピアがグリシーヌの足元に突き刺さった。

「……………これは……………！」

それを見たグリシーヌは、またも驚いた。

レイピアは根本の辺りで、真つ二つになっていたのだ。

大神はあの一閃で、レイピアを斬っていたのだ。

「これが……………、隊長の真の力なのか……………」

昨日とは別人のような雰囲気を漂わせる大神。
その姿に、グリシーヌは真に完全無欠を見た。

「リッシュ伯爵！貴方の負けだ！」

リッシュ伯爵に、大神が鋭い声で叫んだ。

すると、リッシュ伯爵は自分が負けたという事実が信じられない様子で、ワナワナと震え始めた。

「馬鹿な……………！この私が負けただと……………！！！」

刹那、大神はリッシュ伯爵の周囲に凄まじい妖気の集まりを感じ、後ろへ下がった。

すると、それまで大神のいた場所が、突然爆発を起こした。

「認めん！断じて認めんぞ！」

「くっ……………！」

煙の奥から聞こえるリツシュ伯爵の声に、大神は煙を挟んだ向こう側のリツシュ伯爵に目をこらす。

しかし、そこにいたのはリツシュ伯爵ではなかった。

百獣の王、ライオンを思わせる鬣と牙。そして金色に光る獰猛な肉食獣の眼。

そこにいたのは、シゾーやピトンのように、巴里の平和を脅かす怪人だった。

「そ、そんな……………！リツシュ伯爵が……………！！！」

「貴様、やはり怪人だったのか！！！」

刀を突き付ける大神。

すると、怪人は本性を現したように言った。

「そうだ。私の名はレオン。貴様ら人間を支配する、真に高貴なる者だ！」

「そうか、貴族達を誘拐したのはお前だな！？」

その言葉に、大神は確信した。

やはり一連の貴族失踪事件は、このレオンと名乗る怪人の仕業だったのだ。

「覚えている、大神一郎とやら！この屈辱は倍にして返してやる！！！」

そう捨て台詞を吐き捨てると、レオンは煙を上げて消え失せてしまった。

「くそっ、逃げられたか……………」

大神は急いでロープをほどき、下に降りた。
予想通りリッシュ伯爵の正体が怪人レオンと分かった以上、早急にグラン・マに報告しなければならない。
しかし、それを止める者がいた。
グリシーヌである。

「待て、隊長！一体どういっつもりだ！？」

「……………何の事だ？」

「貴公、私が女だからと手加減をしたらどう！？」

今の決闘を見る限り、自分と大神の力量の差は歴然としている。
もし大神が今のような力を出せば、自分は一瞬でやられていた。
そもそも大神は昨日わざわざ太刀ではなく斧を選んでいる。
これが手加減と言わずして何と言うのか。
しかし、大神は首を横に振った。

「残念だが、俺はそんな理由で手加減はしない。」

「では、私を守るためにわざと負けたというのか！？」

「それも違う。」

「なら何故だ！答えろ！！」

そう叫んで、グリシーヌは大神の目の前に斧を突き付けた。
だが、大神はその切っ先を眼前にして、微動だにしなかった。

「……………強いな。その太刀を抜くかと思っただが。」

鞘に納められたままの太刀を見て、グリシーヌが言った。
すると、大神はゆっくりと口を開いた。

「俺は自分の誇りのために相手を傷つける刀は持たない。リッシュ伯爵に決闘を申し込んだのも、君を助けるためだ。」

「あくまで護るために戦うのか……………。それが貴公の……………、サムライの誇りなのだ……………」

思えば、大神はグリシーヌに決闘を申し込まれて受けたのであって、自分から言い出した事ではない。

それに今まで、大神は何かを守るために戦いこそすれ、自分から争いを始める事は全くなかった。

あの決闘でグリシーヌに手加減したのも、勝つ理由がなかったからだ。

その佇まいは、見かけばかりを大事にする輩より余程気品に溢れていると、グリシーヌは思った。

「さあグリシーヌ、シャノワールに戻って司令に報告だ。」

「了解した！」

バステューユ牢獄。

かつてフランス革命の際に最初の戦場となった、外界と断ち切られた世界。

その巨大な入り口に、ダイゴの姿はあった。

その手には、淡い光を放つスパークレンスが握られている。

「やはりここか……………」

リッシュ伯爵に化けた怪人はここにいる。

それを指し示すように光るスパークレンスの光が俄かに強まった。

「クツクツクツ……………。やはり来たか。」

突如真後ろから聞こえた不敵な笑い声。

それに振り向いたダイゴの目に、一人の怪人の姿が移った。

「しかしここまでだ。このレオンが、貴様を地獄に突き落としてやる。」

そう笑い、レオンは片手を高々と上げた。

「いでよ我がしもべ！我等に盾突く裏切り者を押し潰せ！」

すると、牢獄の近くの地面が割れ、中から一匹の怪獣が姿を現した。

全身黄土色の皮膚に、髑髏のような顔。

そして今までにないほどの強い闘争本能に、ダイゴは震えた。

「貴様ごとき私の出る幕はない。行け、髑髏怪獣レッドキング！」

言うや、レオンは煙と共に姿をくらました。

一方、レッドキングは獲物を見つけたように咆哮を上げる。

「ガオオオオッ！！」

地面が揺れるほどの声に我に還り、ダイゴはスパークレンスを掲げて叫んだ。

「ティガーーーーーッ！！」

「……………ここか。」

暗く下水の流れるバスティーユ牢獄の地下に、巴里華撃団の姿はあった。

あれから作戦司令室に、ティガが怪獣とバスティーユ牢獄前で戦っているとの連絡が入り、大神はレオンが貴族をここに幽閉したと判断して、今回の出撃に至った。

「ここに貴族の人達が閉じ込められてるんだね……………」

「可哀相…………、大神さん、早く助けてあげましょう！」

下水の流れる牢獄内は、悪臭などはないが、衛生的に悪い事は間違いない。

幽閉された貴族達が弱っていない事を祈りつつ、大神は指示を出した。

「よし、ティガが怪獣を足止めしてくれている間に、貴族を救助するぞ。」

「了解！」

巴里華撃団が牢獄内に侵入した頃、ティガはレッドキングと激しい肉弾戦を繰り広げていた。

「ガオオオオオ！」

「チャッ！」

二つの巨体が激しくぶつかり合い、大地を揺るがす。
しかし、腕力に限定すればレッドキングの方が上だった。

「ジュワッ!?」

まるで紙屑のように放り投げられるティガ。
すると、ティガは両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「ンウウウ………、ハッ!!」

そしてクリスタルが発光し、ティガの体が赤と銀に変わる。
コンコルド広場でゲオザークを倒した、パワータイプである。

「ガオオオオオー!!」

闘争本能のままに襲い掛かってくるレッドキング。
しかし、パワータイプにチェンジしたティガは、先程のようにはい
かなかった。

「ハッ！」

レッドキングの剛腕を捕まえ、ティガはレッドキングを高々と抱え
て地面にたたき付けた。
更に倒れたレッドキングの尻尾を掴み、ジャイアントスイングの要
領で投げ飛ばす。

「チャーツ!!」

頭から再び地面に激突するレッドキング。

ティガは両手を胸のカラータイマーで重ねて真下に下ろし、ゆっくりと外回りに回転させた。パワータイプの必殺技、デラシウム光流だ。

「ハアアア……………!!」

圧縮されたエネルギーがボールになって、ティガの両手に包まれる。しかしその光のボールをレッドキング目掛けて投げつけようとした時、思わぬカウンターが返ってきた。

「ガオオオオオッ!!」

何とレッドキングは、起き上がると同時に巨大な岩石をティガに向かってぶん投げたのである。

「ジュワッ!?!」

その反動で光流が暴発し、ティガは後方へ吹き飛ばされる。

そこに、レッドキングは更に巨大な岩石でラッシュを掛けてきた。

「ガオオオオオ!!」

「チャツ……………!!」

両手で何とか岩石を押し返そうとするティガだが、いかんせんレッドキングは力が強く、パワータイプでもひけをとってしまう。

「（それなら……………！）」

形成不利と見たティガのクリスタルが輝きを放った。

「ンウウウ……………、ハッ！」

それと同時に、ティガの体が赤と紫と銀に戻る。

パワー、スピード、バイタルのバランスがとれた基本形態、マルチタイプである。

そして、ティガはマルチタイプに戻ると同時に胸のカラータイマーを発光させた。

「チャッ！！！」

タイマーフラッシュ……………カラータイマーを発光させて敵を威嚇する、マルチタイプの技の一つだ。

「ガオオッ！？」

そのまばゆい閃光に、レッドキングが一瞬怯む。

その際にティガはバク転で距離を置き、両手を胸の前に突き出した。そして両手をそのまま左右に広げると、その軌道に沿って光の筋が現れる。

ゼペリオン光線……………膨大な光エネルギーを集約し、L字に組んだ腕から放つ、マルチタイプの必殺技だ。

「ハッ！！！」

白い光線が、一直線にレッドキングの胸を直撃した。

「ガオオオオオ………！！！」

レッドキングは最期の咆哮と共に仰向けに倒れ、大爆発した。

「よし………、後はレオンだ………。」

既に牢獄内部から剣戟や銃声が聞こえている。

おそらく例の巴里華撃団だろう。

ティガは両腕を胸の前で合わせ、エネルギーを集中した。

「ンウウウ………！！！」

すると、ティガの体が無数の光の粒に変わり、牢獄内部へとテレポーションしていった。

その頃、巴里華撃団は牢獄内に徘徊していたポーンを全滅させ、貴族達が捕われているであろう牢獄内部へ移動を開始していた。しかし、グリシーヌの青い光武Fだけは、入り口で立ち止まっていた。

万ーレオンが先に戻って来れば、自分達まで閉じ込められる可能性

があるからだ。

そこで大神は、メンバーの中で取り分け戦闘力の高いグリシーヌに見張りを頼んだのだ。

「…………やはり下水など、躊躇いもしないか。」

大神達の姿が見えなくなり、グリシーヌはふと呟いた。

この牢獄の下水道は深く、光武Fでも半身が沈んでしまう。

そうになると、蒸気を排出する機関部や、下手をするとコックピットにまで下水が流れ込む事になる。

衛生的に良くないために自分は思わず躊躇してしまったが、大神はそれがどうしたと言わんばかりに突き進む。

正義のためなら、自分の身体など二の次と言う事だろう。

グリシーヌは大神の侍気質に感心すると同時に、一瞬でも下水に入る事を躊躇した自分を恥じた。

「貴族達を救おうと決意しながら、躊躇いを感じるとは……………」

その時だった。

グリシーヌは背後から、強烈な殺気を感じ取った。

「な、何だ!？」

振り返った一瞬、グリシーヌは左からの衝撃を受け、壁にたたき付けられた。

その勢いに、悲鳴も出ない。

すると、グリシーヌの耳に殺気の主の声が聞こえてきた。

「フン、たわいのない。飛んで火に入る夏の虫はこの事だな。」

それは、巨大な獅子の形をした蒸気獣に乗ったレオンだった。ティガをレッドキングに戦わせ、自分は巴里華撃団を迎え撃つために牢獄内に戻って来たのだ。

「さあ、貴族共々閉じ込めてくれる。」

言うや、レオンは右手を翳して魔力を集中した。すると、大神達が入って行った下水道の門が下がり始めたではないか。

「（まさか、下水道の門に封印を……………！！）」

そんな事をさせる訳にはいかない。

気がつけばグリシー又は、不意打ちで傷付いた身体のまま下水道に飛び込み、下がりかけた鉄格子の門を両手で持ち上げていた。

「ほう、まだ立ち上がる力があつたか。」

仕留めたと思つた光武Fの抵抗に、レオンが意外そうな顔をした。

「だが、その体では長くももつまい。」

確かにレオンの言う通りだった。

先程左の脇腹に受けた一撃は決して軽いものではなく、加えて1トンにもなる鉄の塊を支えるのは無謀な行為。

おそらく今の状態では10分ももたないだろう。

しかし、グリシー又は苦しい表情を我慢して、弱みを見せなかった。

「フン、貴族を名乗っても所詮は獣だな。この程度で勝つたつもりか!？」

すると、レオンは余裕の表情から一転し、怒りを見せた。

「小賢しい！ならばこれでどうだ！！」

そう言つてレオンは、身動きの取れないグリシーヌに激しい攻撃を浴びせ始めた。

「くっ、……………うつっ！！」

「クツクツクツ、どうした？しっかりせねば門が閉まるぞ？」

たちまち苦悶の表情を見せるグリシーヌを楽しむように、レオンは一層攻撃を激しくした。

反撃の一つでも出来ればいいが、両手で門を押さえているこの状況ではそれも不可能だ。

「どうだ。貴族のお前には薄汚れた下水は耐えられまい。」

勝ち誇つた様子でレオンが言った。

しかし、グリシーヌは決してそれを認めなかった。

「下水がどうした。そんな事で仲間を見捨てる私ではない！あの男が、それを教えてくれたのだ。」

自分を傷つける事になつても、自らの意志を貫く。

ダイゴが指し示し、大神が身を以つて教えてくれた事だ。

その仲間を助けるために下水に汚れる事など、何を躊躇うというのか。

「強がりはやせ。命ごいをすれば、助けてやらん事もないぞ？」

「貴様ごときに屈する私ではない。……………吠えている！」

レオンの言葉を軽く突っぱねるグリシーヌ。
すると、レオンの殺気が俄かに高まった。

「そうか……………、ならば望み通り死ね！！」

炎が宿った拳が眼前に迫る。

しかし、その一撃がグリシーヌに届く事はなかった。

何故なら、二人の間に割って入った巨大な影が、その一撃を受け止めたからである。

「な、何！？」

「……………ティガ……………」

その姿に、レオンもグリシーヌも驚きを隠せなかった。

グリシーヌを庇うようにレオンの攻撃を押さえていたのは、これまでに二度自分達を助けてくれた光の巨人、ウルトラマンティガだったからだ。

「ハッ！」

ティガは押さえていたレオンの拳を振り払い、その腹部に蹴りこんだ。

「グオッ！？」

その反撃で、レオンの蒸気獣は大きく後ろに倒れる。

しかし、これで状況が好転したとは言い難い。

何故なら、今の一撃と同時にティガのカラータイマーが赤く点滅を始めたからだ。

何せレッドキングとの激戦の直後にテレポーターションを使ったのだ。

エネルギーの消費は半端なものではない。

「チャッ！」

しかし、ティガは真後ろの鉄格子にハンドスラッシュを放ち、鉄格子そのものを破壊した。

その姿にグリシー又は、大神に見たものと同じ強さをティガに見た。

「ティガ……、そなたもか……。」

おそらくティガは、グリシー又を助けるために自分の身体など二の次なのだろう。

その姿に、グリシー又は胸が熱くなった。

「ティガ……、この私を守ってくれるのか……？」

すると、ティガはグリシー又に振り向き、しっかりと頷いた。

「小賢しい！弱った貴様など、この蒸気獣マルシュで捻り潰してくれる……！」

「チャッ……！」

再び襲い掛かるマルシュに、ティガは真正面からぶつかった。激しい衝撃が、牢獄内を揺るがす。

「ティガ！」

グリシーヌは援護しようとしたが、レオンに痛め付けられたダメージからか、光武Fは動いてくれない。

その間にも、ティガとレオンは激しい格闘戦を展開していた。

「ハッ！」

ティガが渾身の右ストレートを打ち込む。

しかし、それはマルシュの左手に軽く止められてしまった。

「どうした、この程度で私と張り合うつもりか？」

「チャツ……………！」

ティガの基本形態であるマルチタイプは、パワー、スピード、バイタルのバランスに優れた隙のない点が長所だ。

しかしそれに伴い、差し当たって抜きん出た特徴がなく、レオンのように力が強い相手には、押し負けてしまう弱点があった。

本来こういう相手にはパワータイプにチェンジするべきなのだが、今度ばかりはそうはいかない。

パワータイプはマルチタイプ以上に、エネルギーを激しく消費してしまうからだ。

ただでさえカラータイマーが点滅しているこの状況でチェンジすれば、たちまちエネルギーが尽きてしまう。

そうなれば、自分だけでなくグリシーヌもやられてしまうだろう。しかし、ティガの戦いも長くは続かなかった。

「悪いが貴様とはこれ以上遊んでおれん。そろそろ終わらせてもら

うぞ。」

そう言つて、マルシュがティガを殴り飛ばした。

「ジュワツ!？」

その勢いで後ろに下がるティガ。

そこに、レオンが必殺技を放つて来た。

「血に飢えし千の獣よ、我に従え!! ロイヤルラージュ!!」

ライオンを象つた炎がティガに襲い掛かる。

もはやこれまでか……。

しかし、またしてもそれを食い止めるものがいた。

巴里華撃団である。

「グリシーヌ、ティガ、大丈夫か!？」

マルシュの攻撃を二刀で防ぎながら、大神が叫ぶ。

「ふつ、遅いぞ隊長。」

エリカに治療してもらいながら、グリシーヌが言った。

その隣には、コクリコの姿もある。

大神達は貴族達を無事に救出し、間一髪で戻って来たのだ。

「おのれ巴里華撃団! こうなればまとめて始末してくれるわ!」

計画を台なしにされ、怒りに震えるレオン。
すると、グリシーヌがすかさず言い返した。

「ほざけ！正々堂々と戦う事の出来ぬ輩に負ける巴里華撃団ではないわ！」

言うや、グリシーヌは斧を構えてマルシュに切り込んだ。

怒りで周りが見えなくなつたからか、レオンは一瞬反応が遅れ、グリシーヌの一撃を真正面から受けてしまう。

「グオツ！？」

斧を叩き込まれたマルシュの左腕が宙を舞い、石床に転がつた。そこに、グリシーヌの靈力を集中した更なる一撃が見舞われた。

「大いなる荒波の力を我が手に！ グロース・ヴァーグ！！」

凄まじい高波がマルシュを包み、真後ろの壁に勢い良くたたき付けた。

先程までボロボロだった者の攻撃とは思えない程に強烈な一撃。その一撃が致命傷になったのか、マルシュは全身から煙を上げ始める。

「ティガ、今だ！」

グリシーヌの言葉に頷き、ティガは一連の動作で腕をし字に組み、マルシュ目掛けてゼペリオン光線を撃ち込んだ。

「ば、馬鹿な！？私は認めんぞ！私こそ……………、私こそ真の貴族なのだああ……………！！」

最期まで己を貴族と信じ続け、マルシュは轟音と共に大爆発した。

「……………フッ……………」

「どうした、グリシーヌ？」

戦いを終えて微笑むグリシーヌに、大神が尋ねた。
すると、グリシーヌは何処か吹っ切れた様子で答えた。

「隊長。貴公のサムライの誇りというものの、学ぶ所が多い。これからよろしく頼むぞ？」

「……………ああ、よろしくな！」

以前の彼女ならまず口にしなかっただろう言葉。
グリシーヌが心を開いてくれた事に感謝し、大神は笑顔で答えた。
すると、グリシーヌは更に意外な言葉を口にした。

「では、いつものをやるとしよう。みな、遅れるでないぞ！」

何と、前回まで嫌がっていた決めポーズを自分からやると言い出したのだ。

その変わり様に、大神を含めて三人は互いに顔を見合わせる。

「グリシーヌ、どうしたのかな？」

「何かいい事でもあったんじゃないですか？」

「まあいいじゃないか。それより、俺達もやるぞ？」

「勝利のポーズ、決め！」

次の日、ダイゴの姿は近くの公園にあった。
何でもまた大神がみんなで遊ぼうと言い出したらしく、起きるや否やエリカに連れ出されたのだ。

「あ、イチロー！エリカが来たよう！」

最初に気付いたコクリコが、二人に手を振った。
手に羽子板を持っている事から、羽つきをしていたと分かる。

「やあ、エリカくん。ダイゴも来てくれたのか。」

「はい！大人数の方が楽しいですから！」

「ハハハ……。」

完全にペースに吞まれ、力無く笑うダイゴ。
すると、グリシーヌが声をかけて来た。

「ちょうど良い。ダイゴ、私と勝負だ。」

見ると、コクリコと羽つきをしていたのか、顔に墨が塗られている。

「負ければ奴と同じく、またメイドを手伝ってもらうぞ?」

「え……………!?」

「グ、グリシーヌ……………」

意地悪そうに笑うグリシーヌに異を唱えようとする大神。
すると、グリシーヌは突然真顔に戻って言った。

「……………冗談だ。」

その一言に、またも四人は固まった。

まさかあのグリシーヌが冗談を口にするとは、思いもしなかったからだ。

「本当にどうしちゃったのかな、グリシーヌ。」

「今までと全然違いますよね?」

「よかつたじゃないか。前より明るくなつたし。」後ろで三人がそう言っている事にも気付かず、グリシーヌはダイゴに羽子板を突き付ける。

「その顔を真っ黒に塗り潰してくれる!勝負だ!」

「やれやれ……………」

ぼやきつつも羽子板を構えるダイゴ。

この勝負の行方がどうなったかは彼らしか知らないが、ただ一つ言えるのは勝負の後、二人とも真っ黒な顔で笑っていたという事であった。

サムライの誇り（後書き）

《次回予告》

窃盗、傷害、強盗……。

課された懲役は巴里最長の1000年。

そのアタシに、平和のために戦えだ？

次回、サクラ大戦3。

《闇よりの使者》

愛の御旗のもとに……

ハラワタまで、焼き尽くしてやる……！

闇よりの使者（前書き）

ゲームでいう第4話。

ロベリアって今までにないヒロイン像でしたよね。

あのラストがとにかく衝撃だった。

闇よりの使者

それは草木の眠る真夜中の事だった。

「……………いい月だ……………」

屋根の上に立つ一つの影が、徐に呟いた。

夜空に浮かぶ満月が、その姿を怪しく照らす。

「ここがレイモンの屋敷か……………」

影はそう呟き、眼下の建物を見る。

そして次の瞬間、何もない掌に炎を生み出した。

揺らめく炎が、影の顔を悍ましく照らし出す。

影はその炎を、屋敷目掛けて投げつけた。

刹那、屋敷の一角からたちまちにして火の手が上がる。

「フッフ……………、楽しいねえ……………」

その様子を満足げに眺めつつ、影は更に大きな炎を生み出し、屋敷に放つ。

「ア—ッハッハッハ……………！！」

全てを燃やし尽くす様に笑う影。

すると、そこら中からけたたましいサイレンの音が聞こえて来た。

「何だ、もう感づきやがったのか？警察も暇なこつて。」

お預けを喰らったような口調で吐き捨て、影はその場を立ち去ろうとした。

しかしその時、目の前に別の気配を感じて立ち止まった。

「……………誰だ？」

殺気を漲らせた声で威嚇する。

自分は一人のため、仲間などというのは有り得ない。

こんな夜更けに屋根の上に立っているのは、大方同業者が裏の人間だ。

それを熟知している影は、油断なく身構える。

すると、ややあってもう一つの影が答えた。

「……………相手より先に、自分から名乗らない？」

「悪いがこっちはそんな常識を重んじる気はない。早く答えな。」

予想より若い子供のような声に驚きつつも、先程よりも殺気を込めて迫った。

既にサイレンの音はすぐ近くまで来ている。

早くここを離れなくては、警察に見つかるとしても知れない。

沸き上がる焦燥感を抑えて睨みつける影だが、相手も素直には答えなかった。

「それじゃこっちも答えられないよ。」

「アンタ、消し炭にされたいのか？」

言うや、影は痺れを切らして炎をちらつかせた。

炎は影の殺意を代弁するかのように、激しく燃える。

しかし、子供はそれを笑って返した。

「名前も教えてくれない人には遠慮したいなあ……………」

「だったら覚えておきな。この巴里一番の大悪党、ロベリア・カルリー二をな!!」

そう叫び、ロベリアと名乗った影が炎を放とうとする。だがその時、ロベリアの首筋を鋭い激痛が走った。

「うぐっ……………!?!」

激痛と共に全身を痺れが駆け巡り、ロベリアはそのまま崩れ落ちた。

「……………何だ、先にやっちゃったんだ。」

倒れたロベリアの奥に立つ三つ目の影に、子供はやれやれという口調で呟いた。

三つ目の影は無言のまま、血のように赤い二つの目を光らせた。

「まあいいや、早く行こうよ。五月蠅くなってきたし。」

そう言っただけで子供がその姿を消すと、赤い二つの目もまた見えなくなる。

その直後、屋根一体を無数のサーチライトが照らし出した。

そこには、アシンメトリーのコートを身に纏った一人の若い女性が、首筋に傷を残して倒れていた。

『ロベリア・カルリーニ、遂に逮捕。』

その見出しで始まった記事は、新聞の一面を完全に占領していた。

「……………昨夜未明、レイモン氏の邸宅で火事が発生。巴里市警は放火の犯人としてロベリア・カルリーニを逮捕。」

ゆつくりと記事を読み上げたのち、大神は奥の席に座るグラン・マに尋ねた。

「司令、この記事は……………？」

「今朝の朝刊だよ。巴里華撃団の戦力向上には、うってつけだろう？」

この日、大神以下三人の隊員は作戦司令室に顔を揃えていた。グランマの提案で、新隊員について話し合うためだ。

今現在の巴里華撃団の戦績は三戦全勝。

ティガの助力もあって、白星をあげ続けている。

しかし裏を返せば、巴里華撃団が単独で敵を撃滅出来た例は存在しない。

そのため、次の戦いにティガがなくて勝てるかと問われると、大神は自信がなかった。

怪人や蒸気獣は大した問題ではない。

しかし奴らの従える怪獣は強力で、ティガなしで勝てる可能性は、

少なくとも今の自分達にはなかった。

そこで新隊員を加えて戦力向上を計る訳だが、集まって早々グラン・マは大神にこの朝刊を渡したのだ。

「司令、この記事と新隊員に何の関係が………？」

「何言ってんだい、ムツシュ。そこに名前が書いてあるじゃないか。」

意図が分からず尋ねる大神に、グラン・マはさも当然の如く言う。
すると、大神はグラン・マの考えを理解すると同時に驚愕の表情を見せた。

「まさか………、このロベリア・カルリーニを隊員にするんですか！？」

正義を貫く巴里華撃団に犯罪者を入れるなど、聞いた事がない。
しかし、グラン・マはあっさり頷いた。

「そうさ。ロベリアはかなり腕の立つ霊力の持ち主らしいからね。
加わってくれば戦力は著しく上がるよ。」

「でも、悪者が簡単にボク達に協力してくれるのかな？」

コクリコが的確な意見を述べた。

相手は巴里の平和を脅かす悪党である。

そんな人間に平和のために協力を求めた所で、断られるのがオチだ。
しかしグラン・マは、主張を曲げなかった。

「簡単な事さ。何らかの条件をつけて交渉するんだよ。相手は懲役
1000になる悪党だからね。飛び付いてくと思うよ？」

「1000年！？長生きな人ですね〜！」

あからさまに驚くエリカ。

ロベリアは巴里で最も最悪と言われた大悪党だ。

窃盗、傷害、強盗……。

その数え切れない程の罪状を並べると、懲役は途方もないものだった。

すると、ここでグリシーヌが反論した。

「私は反対だ。このような極悪人を仲間にするなど、巴里華撃団の名折れではないか。」

「俺もグリシーヌの意見に賛成です。改心させるならともかく、取引では信用できません。」

相手は悪党だ。当然正義感もなければ、協調性もない。

いつ裏切られるかも知れぬ人物を仲間に加えるなど、正気の沙汰とは思えなかった。

が、しかし。ここでエリカが意外な事を口にした。

「だったら大神さん、今からロベリアさんを正義に目覚めさせればいいんじゃないですか？」

「え？いや、でもエリカくん……………」

「大丈夫です！私がロベリアさんを正しい道へ導いて見せます！」

大神の言葉を見捨て、一人意気込むエリカ。

どうやら今の会話を聞いて、ロベリアに人としての道を説き伏せる

使命感に駆られてしまったらしい。

しかし大神は、素直には喜べなかった。

改心させるというエリカの決意は素晴らしいのだが、ドジなエリカの事、また何か失敗をやらかす可能性は限りなく100%に近い。そんな事になれば、どんな被害を被るか想像も出来なかった。

「決まりだね。ロベリアは今、サンテ刑務所に服役中だよ。」

それを知ってか知らずか、グラン・マはエリカの申し出に便乗して決定を下してしまった。

こうなっては仕方がない。

大神はエリカが大きな失敗をしないように、祈る事しか出来なかった。

サンテ刑務所は、巴里郊外に位置する刑務所の一つだ。中では多くの囚人が集まり、出所の時を待っている。

ロベリアは、その一番奥に位置する特別牢獄に収監されていた。

「ここにロベリアが……。」

先が暗闇に包まれた螺旋階段を、ライトの明かりを頼りに下りていく大神達。

そこは、完全に外界と遮断された、奈落の底にも見えた。

「……………」

最下層にて、大神は奥に気配を感じてライトを向けた。

「あれが……………ロベリア？」

薄汚れた囚人服を着せられ、足は鎖で壁に固定されている。恐らくは目的の人物と見ていいだろう。

「……………あ、怪我をしますよ？」

ふと、エリカがロベリアの首筋を指差した。

そこには、何か鋭いもので突き刺されたような刺し傷がある。多分逮捕のどさくさでついたのだろう。

ろくな手当てもされなかったらしく、血が滲んで僅かに腫れていた。

「悪人だけど、可哀相だね……………」

「確かに……………」

同情を見せるコクリコに、グリシーヌが同意する。

その時、ロベリアの目が四人を睨みつけた。

刹那、何処からともなく炎が現れ、一直線に襲い掛かってきた。

「なっ……………！」

「危ない!!」

咄嗟に前に出たエリカが、霊力のシールドで炎を止める。
やがて炎は、数秒四人に牙を剥きつづけて消え去った。

「……………君が、ロベリア・カルリーニだな？」

炎が収まった事を確認して、大神はロベリアに声をかけた。

「……………」

「単刀直入に言う。ロベリア、俺達の仲間になってほしい。」

沈黙を保つロベリアに、大神は単刀直入に申し出た。
すると、ロベリアは沈黙から一転して苦しみ出した。

「うつ……………！うつうつ……………！！」

「大変！ロベリアさん、大丈夫ですか!？」

慌てて駆け寄るエリカ。

しかしその瞬間、苦しみに耐えるはずのロベリアの顔が笑ったのを、
大神は見逃さなかった。

「駄目だ！行くな、エリカくん!!」

ロベリアの狙いに気付いた大神が叫ぶ。
が、それより早くロベリアが動いた。

「動くな！動いたらこの女を殺すよ？」 いつの間にか手錠を外した

ロベリアの腕がエリカの首を捕まえ、フォークが突き付けられる。
やはり大神の読み通り、ロベリアは演技でエリカをおびき寄せたのだ。

「待てロベリア！俺達の仲間になれ！」

「仲間だと？」

「そうだ！そうすれば君は自由になれる！！」

「……………悪いがノンだ。アタシはアタシ自身のためにしか動かない。」

大神の予想通り、ロベリアは聞く耳を持たない。
すると、ここでエリカが動いた。

「大神さん、ここは私に任せて下さい！」

「エ、エリカくん！？」

こんな人質にされて命まで危うい状況だと言うのに、一体何をすると言うのか。

しかしこの後、大神達三人はエリカが文字通り奇跡を起こす瞬間を、目の当たりにする事になる。

「ロベリアさん、貴女は本当は悪い人じゃないはずです！」

「馬鹿言つな！アタシは巴里の悪魔だ。その気になりゃ、お前を殺す事も出来るんだぞ！」

「大丈夫、貴女の罪は私が許します。」

「別にお前に許して貰わなくていい！」

「神は申されました。右の頬を叩かれたら左の頬を差し出せと。」

「いい加減にしろ！それ以上喋ったら心臓プチ抜くぞ！」

「だから私も、左の心臓を刺されたら右の心臓を差し出します。」

「お前アタシをナメてるな！？心臓は左にしかないだろうが！！！」

「そうすれば、きっと貴女も真人間になれるはずです。」

「心臓と真人間に何の関係がある！」

「あ、それは変わりますけど……………」

「こら、勝手に変えるな！」

「ロベリアさんの何処が真人間かと言いますとね……………」

「変わってねえじゃねえか！！！」

「す、凄い…………」。ロベリアがエリカくんのペースに巻き込まれている。

先程までの緊迫した状況から一転、奈落の底はエリカによって漫才

劇場になってしまった。

ロベリアは予測不能のエリカのボケに突っ込むあまり、完全に周りが見えなくなっている。

「よし！コクリコ、グリシーヌ、今の内にロベリアを取り押さえろ！」

「任せろ！」

「分かった！」

大神の指示で、三人は一斉にロベリアに飛び掛かった。

「し、しまった………！！！」

エリカを人質に脱獄を試みた巴里の悪魔は、何とも情けない形でお縄についた。

「……………よく分かった。ロベリア、君に会う事は二度とないだろう。」

「貴様にはその格好がお似合いだ。」

再び手錠と鎖で拘束されたロベリアに、大神とグリシーヌが鋭く言い放つ。

所詮悪党と正義は裏表。

この現状が何よりの証拠だ。

ロベリアを加える事は不可能であると分かった以上、ここには用はない。

「あ、ちょっと待って下さい。」

三人が牢獄を後にしようと背を向けた時、エリカが再びロベリアの方に駆け寄った。

そして、ロベリアの首筋に手を翳し、怪我の治療を始めたのだ。

「お前……………！」

驚きの表情でエリカを見るロベリア。

その顔が、ふと大神の目に止まった。

「あれ……………、さっきと違うような……………」

最初に睨みつけて来た時のロベリアの表情は、刃物のように鋭く冷たい印象を受けた。

しかし今エリカを見るロベリアには、その印象がない。

悪人特有の暗い感じが、彼女からは感じなかったのだ。

「はい、これで大丈夫です。」

「そんな奴、放っておけばいいのに。」

先程の騒ぎの心配からか、コクリコが悪態をつく。

ロベリアの怪我は、エリカの治癒能力のおかげで完治していた。

「エリカ、あまり不用意な事はするな。」

「はい。さ、行きましょっか。」

本当に分かったのか怪しい返事で戻って来るエリカ。
その様子を、ロベリアは無言で見つめていた。

「ご苦労さん、ムツシュ。」

牢獄から出て来た四人を、グラン・マが出迎えた。

「で、どうだった？あっちの反応は。」

あっちとは言う間でもなくロベリアの事だろう。
その問いに最初に答えたのはグリシー又だった。

「やはり悪党に過ぎん。話すだけ時間の無駄だ。」

「ボクもやだよ。あんな奴を仲間にするの。」

グリシーヌに便乗して意見するコクリコ。
すると、ここでエリカが反論した。

「そんな事ありません。ロベリアさんだって、本当は悪い人じゃないはずです。」

「エリカ、先程の事を忘れたのか？そなたこそ命が危うかったのだぞ！」

呆れた様子でグリシーヌが怒鳴る。
しかし、大神は考える様子を見せて言った。

「俺は……、出来ると思います。」

「隊長！貴公まで何を言うのだ。」

先程までロベリアの参入に反対していた大神の意外な一言に、グリシーヌが驚きを見せる。

「エリカくに怪我を治療された時のロベリアの表情は、犯罪者特有の冷たさや暗さを感じなかった。あれがもし彼女の本当の姿なら……。」

「やっぱり！大神さんも分かってくれたんですね！」

一転してロベリア参入に賛成した大神に、エリカが感激する。
それと対照的に、コクリコやグリシーヌは不快感を露にした。

「イチロー、あんな悪い奴を仲間にするの？」

「正気か!？」

「まだ結論を出すのは早い。もう少しロベリアを観察してみるべきかと。」

ロベリアを隊員に迎えるかは隊長である大神に絶対的権限がある。まだ彼女の参入を認めた訳ではないが、今の時点でその選択肢を切り捨てるのは、些か拙速感があつた。

先程暗がりの中で放った炎の威力はかなりのもので恐怖すら感じたが、仲間になればこれ程心強いものはない。

巴里華撃団の今後を考えるなら、ロベリアは是非加わってほしい人材だった。

「なるほどね。ま、相手が相手だし一筋縄じゃ行かないよ。アタシもムツシュと同意見だよ。」

そう言った後、グラン・マは思い付いたように続けた。

「それならムツシュ。アンタ、ここにしばらく世話になったらどうだい？」

「いいっ!？俺が刑務所ですか!？」

突然の宣言に驚く大神。

つい先月、グリシーヌ邸のメイドをさせられたばかりだというのに、冗談ではない。

すると、グラン・マはさも当然の如く言った。

「ロベリアを観察するんだろ? だったら四六時中同じ建物がいいじゃないか。」

「そ、そんな……。」

大神は今になって自分の言葉を後悔したが、あとの祭である。かくして巴里華撃団隊長大神一郎は、めでたくサンテ刑務所に収監される事となった。

巴里には沢山の芸術がある。

それこそ世界にその名を知らしめた巨匠の作品がいくつも眠る巴里の美術館は、芸術の宝庫だ。
その一角に、不穏な影が現れた。

「……………随分夜が静かになったわ。」

高い声色から、女性と推察できる。

胸元から大きく露出した服を身に纏う妖しい魅力を携えた女性。
その後ろに、赤い二つの目が光った。

「ロベリアとかいう小悪党が捕まったからね。流石はあたしのペットだわ。」

そう言つて、女性はいくつ目も褒める。

「フフフ……。芸術の都と呼ばれた巴里の芸術、全部ズタズタにしたら、人間共はどんな顔するかしらね？」

そう言つて、女性は目の前にある絵画に爪を立て、真つ二つに引き裂いた。

「……………にしても、人間の芸術センスは酷いわね。壊し甲斐がないわ。」

無残に引き裂かれた絵画の前に、女性が呟いた。
人間と口になっている辺りから、やはり怪人の一人と推測できる。

「……………そうだ。もっと有名な奴を引き裂くのよ。巴里の誰もが知るアイツを、このナードルがね。」

ナードルと名乗った女性が、残忍な笑みを浮かべた。
すると、それに合わせて赤い二つ目も輝きを増した。

「フフフ……………、哀れな裏切り者。あたしが芸術にしてあげるわ。」

「……………刑務所？」

レノ神父の口にした一言に、ダイゴは思わずマヌケな声を出してしまった。

今朝から教会にエリカの姿がない事が気になってレノ神父に尋ねた所、神父はこう返したのだ。

「はい。今朝から二人の友人と連れ立ってサンテ刑務所の方へ。何故が張り切っていたので、失敗しなければ良いのですが……………」

その言葉に、ダイゴは思わず苦笑いを浮かべた。
エリカのドジはどういう訳か、張り切っている時に限ってよく発生する。

そのジンクスが働けば、エリカは刑務所で少なくとも一度は何かしらの失敗をするだろう。

小さいミス位ならいいのだが、下手をすれば囚人を脱走させてしまったり、不用意に近付いて人質にされたりするかもしれない。

「……………ですからダイゴさん……………」

レノ神父もダイゴと同じ事を考えていたらしく、申し訳なさそうに言った。

「でもいいの？僕まで抜けて……………」

「それなら大丈夫です。今日から新しくボランティアの方が見えま
すから。」

そう言った時、タイミング良くその人物が姿を見せた。

「お待たせしました、レノ神父。」

そう言つて教会の入口に立っていたのは、ダイゴと同じくらいの歳の少年だった。

白い肌と金髪が特徴的な美少年で、そこら辺のパリジェンヌなら悩殺されそうな笑みを浮かべている。

「ああ、ピエールさん。よく来て下さいました。」

レノ神父が笑顔で迎えると、ピエールと呼ばれた少年はこちらに歩み寄つて来た。

「ダイゴさん。こちらが今日からボランティアに加わってくれる事になったピエールさんです。」

「よ、よろしく……。」

人とは違つ神秘的な魅力を持つピエールに驚きつつ手を差し出すダイゴ。

すると、ピエールは笑いながらダイゴの手を握った。

「ボンジュール、君がダイゴか。ピエール・タバルニエだよ、よろしく。」

エリカとはまた違つた笑顔。

それに会えた嬉しさからか、ダイゴもまた笑顔になった。

「ダイゴさん、エリカさんを頼みます。」

「うん、分かった。ピエール、またね。」

そう言って、ダイゴは急ぎ足でサンテ刑務所へと向かって行った。ピエールという新しい友人が出来た事に喜びながら。

「……………」

目的地のサンテ刑務所に着くや、ダイゴは固まった。無理もない。

けたたましいサイレンの中を、沢山の警官達が走り回っているのだから。

「エリカさん……………」

まさかもう何かやらかしたのではなからうか。

そんな不安を抱きながら、ダイゴは刑務所全体が混乱しているのを見事に刑務所内に入り込んだ。

「ふえ〜ん！助けて下さあ〜い！！」

刑務所内に入るや否や、エリカの声が耳に入った。

「エリカさん！？」

慌てて牢獄の奥に走るダイゴ。

しかし次の瞬間、ダイゴは別の意味で驚く事になる。

「エリカさん！大丈夫………って、ええっ！？」

てつきり脱走した囚人に人質にされたと思っていたダイゴは、目の前の状況は全く違って驚いた。

「助けてえ〜！！」

泣きながらこつちに走って来るエリカ。

しかしそれを追い掛けているのは、何と警棒を持った警官だった。それもそのはず。

何故ならエリカの手には、十字架を摸したマシンガンが握られていたからだ。

「待ちなさい！凶器準備罪だぞ！？」

「そんな〜！私何もやってないのにい〜！！」

マシンガンを持って刑務所に入れば怪しまれるのは当たり前だ。ダイゴはとりあえずエリカが無事だった事に胸を撫で下ろして、事態の收拾を行った。

「待つて。彼女は脱走犯とかじゃないよ。」

「ダイゴさん！」

助けに来てくれた事が嬉しかったのか、エリカは両目に涙を溜めてダイゴの背中に隠れた。

「本当か？じゃあそのマシンガンは……………」

「護身用だよ。囚人に襲われるかもしれないでしょ？」

「そうです！私、グラン・マの使いで来ただけです！」

「グラン・マからの！？これは失礼いたしました！」

ダイゴと全然話が噛み合っていないが、とりあえずグラン・マの名前が上がった事で誤解が解けたらしく、警官は頭を下げて走って行った。

「ありがとうございます、ダイゴさん。助けに来てくれたんですね。」

「うん。まさかこういう形になるとは思わなかったけど。」

まさかエリカがマシンガンを携帯しているとは思わず、意外そうに

マシガンを見るダイゴ。
すると、エリカが辺りを見渡して尋ねた。

「あ、そうだ！ダイゴさん、ロベリアさん見ませんでした？」

「ロベリア？誰それ？」

初めて耳にする名前にダイゴは首を傾げる。すると、エリカはロベリアについて簡単に説明した。

「ロベリアさんは、昨日逮捕された大泥棒さんなんです。」

「ど、泥棒………？」

「はい！でも本当はいい人なんです！そのロベリアさんが逃げ出しちゃって……。」

あまりよく分からない説明だが、とりあえずこの刑務所に収監された人物と分かる。

何のためかは知らないが、とりあえずそのロベリアという人物に用があるのだろう。

「それにしても、何でまた刑務所なんか……。」

囚人に教えを説きに來た訳でもないのに、何故こんな場所に來たのか。

すると、エリカは驚いた表情で答えた。

「ダイゴさん、知らないんですか？大神さんが昨日からここで厄介になってるんですよ。」

「…………、ハア!？」

ダイゴはまたしてもマヌケな声を上げてしまった。

先日のメイドから一転して囚人になるとは、一体彼に何があったというのか。

ダイゴは改めて、大神という人物が分からなくなった。

「それじゃ、私ロベリアさんを探して来ますね!」

「あ、ちよつとエリカさん!」

マシンガンもしまわずに走り出すエリカを、ダイゴは慌てて追い掛けた。

その頃、大神の姿はロベリアが収監されていた特別牢獄にあった。

昨日と同様に暗い闇を覆われた奈落の底。

しかし、そこにロベリアの姿はない。

彼女を拘束していた鎖も断ち切られていた。

炎を使ったのか、断面が溶解している。

他に牢獄内で身を隠せる場所はない。

しかし、ロベリアはここにいるはずだった。

『ロベリアは探さない所にいる』

混乱に乗じて脱獄を試みた囚人の情報だ。

探さない場所、それに当て嵌まるのは、ロベリアが元々いたこの奈落の底である。

脱獄を成功させるには、とにかくスピードが命である。

グズグズしては、たちまち退路を塞がれてしまうからだ。

そのため脱獄を開始したら、すぐさま建物から屋外に逃亡を計るのが常套手段である。

普通は誰でもそう考えるだろうし、警官達もそう考えて、ロベリアを追跡するべく次々と外に出ている。

そうなれば刑務所内は必然的に手薄になる。

それまでここで待っているつもりだろう。

囚人の情報から、大神はそう推理した。

「ロベリア、出てこい！そこにいるのは分かっているぞ！」

奈落の底に、大神の声が響く。

すると、その背後から返事が返って来た。

「……………中々鋭いじゃないか。」

振り向くと、囚人服から普段着に着替えたロベリアが鋭い目つきで笑っていた。

アシンメトリーのコートが闇に溶け込むように見える様は、巴里の悪魔という異名を連想させる。

「脱獄なんてよせ！懲役が増えるだけだ！」

「ハッ、1000年だろうが2000年だろうが、アタシには関係ないさ。……………どいて貰おうか？」

大神の説得を鼻で笑うロベリア。

やはり無理なのか……………。

大神が一瞬諦めかけた時、上から声がした。

「勇ましい事だね。ますます気に入ったよ。」

「支配人！」

それは、何とグラン・マだった。

話を聞いたグラン・マも、ロベリアに直談判すべく刑務所に急行したのだ。

「単刀直入に言うよ。ロベリア、巴里華撃団にお入り。」

「巴里華撃団？」

「巴里の平和を守る秘密部隊さ。警察や軍隊の介入もない。アンタの自由も保障できる。」

流石に大神より数段口の上手いグラン・マ。

しかし、それでもロベリアは首を縦には振らなかった。

「それがどうした？巴里の平和なんて興味ない。自由だってアンタに貰わなくても……………！」

「簡単に手に入る、かい？今のアンタじゃ、説得力ないよ。」

言葉の尻を食って、グラン・マが言い返す。

確かに今のロベリアは何もない。

自力で脱獄すれば、一時の自由は手に入るだろう。

しかし、それでも完全な自由ではない。

ロベリア自身もそれを理解しているらしく、舌打ちを返した。

「だったら、もっと別なものをよこしな。」

今までノンの一点張りだったロベリアが、初めて答えを変えた。

大神は改めてグラン・マの話術に驚くと共に、ロベリアの求める別の条件を打ち出した。

「巴里華撃団に入れば、君の懲役を減らしてやる。どうだ？」

ロベリアの自由を拘束しているのは無数の軽犯罪から生まれた1000年もの懲役。

ならばその鎖を断ち切れば、ロベリアも納得してくれるのではなからうか。

大神はそう考えたのだ。

「……………なるほど。悪くないね。どのくらい減らしてくれるんだい？」

ロベリアも大神の予想とかなり近い反応を返す。

すると、今度はグラン・マが口を開いた。

「手柄一つにつき、10年でどうだい？内容によっては、ボーナスもつけるよ？」

一回の活躍につき10年。

つまり、最大でも百回手柄を上げれば、刑期が満了する計算になる。しかし、ロベリアは何か引っかけた様子で言った。

「うますぎる話だね。……………何か裏があるだろう。」

「そう、巴里華撃団は命懸けの仕事さ。でも、あくまで自分のために働けばいい。」

「自分のためねえ……………」

巴里の平和を守るためでなく、自身の懲役を減らすため。グラン・マの提示した条件は、自分のスタンスと十分噛み合っている。

「……………」

ロベリアは目を閉じ、一瞬考えるそぶりを見せた。そして……………。

「……………さっきまで刑務所にいたとは思えないダンスだな。」

ステージに立つ新入りのダンスを見て、大神が呟いた。

あれからロベリアは、グラン・マの提案を受けて巴里華撃団参入を承諾したのだ。

そして今夜、シャノワールの新しいダンサーとしてステージに立ったのである。

ロベリアは何処で覚えたのか、華麗なステップでステージを舞い、観客達を瞬く間に虜にしてしまった。

すると、大神の後ろからよく知る声が聞こえて来た。

「やあ大神君。席は空いてるかな？」

「エビヤン警部！」

それは何と、巴里市警の筆頭であるエビヤン警部だった。何やら何時にも増して機嫌がいい。

「ロベリアも逮捕出来たし、巴里も平和になったよ。今日はそれを祝おうと思ってね。」

「は、はあ……………」

そのロベリアが今まで踊っていた事など知る訳もないエビヤン警部に、大神は引き攣った笑いを返す。

しかし次の瞬間、大神や後ろにいたエリカ達は、信じられない光景を目の当たりにする事になる。

「いらつしゃい、一名様ですか？」

「ロ、ロロ、ロベリア！？いつ脱獄したんだ！！」

笑顔だったエビヤン警部が突然に凍り付く。

確かに今日捕まえたばかりの悪党がシャノワールにいるとは、誰も思わないだろう。

すると、そこにグラン・マがやって来た。

「おや、警部。紹介するよ、今日入ったダンサーだ。」

「サフィールと申します。よろしく願いますね。」

グリシーヌとはまた違った意味で、ロベリアの名前を公にする訳にはいかない。

そこでロベリアは、サフィールという偽名でステージに立つ事になったのだ。

「サフィールさん……。これは失礼しました。……なるほど、ロベリアと性格はまるで別人ですな。」

「ウフフ、ありがとうございます。」

「それにしても美しい。」

「あら、警部さんも素敵よ？」

幸いあっさり信じたエビヤン警部。

しかし、後ろに控える大神達は啞然としていた。

無理もない。

ロベリアの態度が別人のように変わってしまったからだ。

ちよっとでも不用意な事をすればたちまち炎に焼かれるような鋭い

視線が、今は全く感じられない。

演技なのかもしれないが、目の前にいるロベリアは最早別人だった。

「……………！」

その時、ロベリアが鋭い目つきで客席の入口を睨んだ。

「ん？どうかされましたか？」

「……………いえ、何でもありませんわ。」

何でもないといいつつも、入口を一点に見るロベリア。

大神は素早くその空気を読んで、エビヤン警部の注意を逸らす事にした。

「そういえば警部、巴里で変な事件は起こっていませんか？」

すると、サーモンムニエルを味わっていたエビヤン警部の表情が俄かに固くなった。

「そういえばここ最近、夜中に美術館の名画を切り裂く事件が相次ぎまして……………」

一流の名高い名画ばかりが無残に切り裂かれる事件。

被害額は既に3000万フランを越え、巴里市警は頭を抱えている。かくいう昨日も、名画が十数枚切り裂かれてしまった。

「私はてつきりロベリアの仕業と思っていたんですが……………」

「それはないさ。ねえ、ムツシュ。」

「はい、俺も違うと思いますよ?。」

グラン・マも大神も即答した。

ロベリアは盗みこそすれ、金目のものをわざわざ壊すような真似はしない。

何より本人の前で確証もなしに言えるはずもない。

「確かに、そうですね。あの守銭奴なら、売っぱらうでしょうな。」

「そうですね。ロベリアなら切り裂くなんて事しませんわ。」端から聞けば実に恐ろしい会話である。

ロベリアが入口を睨んだ視線を気にしつつ、大神はその様子に苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ここがシャノワールか。賑やかな場所だね。」

「そう?喜んでくれて嬉しいよ。」

瞳を輝かせるピエールに、ダイゴは笑顔を返した。

この日、ダイゴはボランティアを代わりにしてもらったお礼に、ピ

エールをシャノワールに連れて来たのだ。

「……………」

「どうしたの？」

ふと黙って奥のテーブルを見つめる。ピエールに声をかける。
すると、ピエールは変わらぬ笑顔を返した。

「何でもないよ。それより、店の中を色々教えてよ。」

「うん、いいよ。」

ピエールの笑顔は、他の人達のそれと違うものがあつた。

まるで昔同じものを見たような、懐かしさを感じさせる笑顔。

それに、ダイゴは引き込まれていた。

最もそれがエリカに勝る事はないのだが、もしエリカが大神に取られたとしても孤独ではないという安心感が、ダイゴの心に芽生えつつあつた。

その時、懐のスパークレンスが僅かに光った事に、ダイゴは気付かなかった。

その日の夜、巴里華撃団の姿はルーブル美術館にあった。

エビヤン警部の話した事件に怪人が絡んでいると見たグラン・マが、次に狙われるだろう美術館を警護するように指令を出したのである。当初ルーブルかオランジュリーのどちらの美術館を警護するかで意見が別れてしまったのだが、餅は餅屋という事から大神はロベリアの意見を尊重し、ルーブル美術館を警護する事に決定したのである。

「……………まだ現れないな。」

警護を始めて小一時間。

巴里で最も有名だけに100人近い警備員がいる中、刻々と時間が過ぎていく。

「やっぱりルーブルに来るつもりないんじゃない？」

「その時はロベリア、分かっているだろうな？」

オランジュリーを警護すべきと意見していたグリシーヌとコクリコが口を挟む。

すると、ロベリアは遠くを見たまま言葉を返した。

「来るさ。こんな空気の冷たい夜はね。」

その時、ロベリアの予想が現実が変わった。

「グアア!？」

「うつ……………!」

「ギヤアアア!!」

入口を警護していた警備員達が、突然苦しみながら倒れたのだ。

「お、大神さん！警備員さん達が………！」

「いや待て、エリカくん。」

隠れていた茂みから警備員を助けに行こうとするエリカを、大神が止めた。

どういう方法を使ったか知らないが、相手は警備員の数をものともしていない。

下手に姿を現せば、こちらまでやられてしまう危険があつた。

すると、倒れた警備員の近くに人影が現れた。

ナーデルである。

「フッフ………、ルーブル美術館の警備もこの程度ね。まあ人間だから仕方ないけど。」

「……………来やがったな。」

獲物を見つけたように、ロベリアが目つきを鋭くした。

どうやら美術館を襲撃している怪人に間違いないらしい。

「待て!!」

大神の一喝と共に、隊員達は一斉にナーデルの前に現れた。

「ん？まだ生き残りがいたのかしら？」

「貴様が名画を狙う怪人だな！これ以上好きにはさせないぞ！」

意外そうな反応を見せるナーデルに、大神が吠える。
しかし、怪人相手には大した威嚇にもならなかった。

「フフフ、このナーデルに刃向かうつもり？」

「何！？」

不敵な笑いを見せるナーデルに警戒する花組。
すると、ナーデルが満足げに笑った。

「ちょうど良いわ、遊び相手をあげる。出てらっしゃい、蠍怪獣アンタレス！」

高々と上げた右手の指をスナップしたその時、大神達とナーデルを割るように地面が裂け、中から巨大な怪獣が現れた。
茶色の皮膚と先が尖った長い尻尾。
そして顔には赤い二つの目が光る。
ナーデルの使役する蠍怪獣アンタレスだ。

「わあ！出たあー！！」

「大神さん、どうしましょう！？」

初めて生身で相対する怪獣に、思わずたじろぐ隊員達。
そんな中、ロベリアだけは表情が違った。

「コイツ…………、何でアタシを攻撃しない？」

身体の大きさを活かしてこちらを追い詰めるアンタレスだが、どう
いう訳かロベリアを無視している。
まるで敵意を示さないのだ。

「ウフフ、仲良く食べられてちょうだい。」

「いかん！ロベリア、奴を追ってくれ！！」

美術館に向かって走り出したナーデルに気づき、大神が叫んだ。
幸いアンタレスはロベリアを攻撃しないので、自分達が怪獣を引き
付けている間にロベリアなら追跡ができる。

「……………チツ！分かったよ。」

やれやれといった表情で答えると、ロベリアはナーデルを追って走
り出した。

「……………何だこりゃ。警備員がまるで役立たずじゃねえか。」

美術館の外を走りながら周囲を見て、ロベリアは悪態をついた。
無理もない。

巴里で一番厳重な警備をしていた警備員達が、揃ってナーデルにや
られていたからである。

「見つけたぞ、ナーデルとやら！」

壁を蹴って跳躍し、ナーデルの前に立ちはだかるロベリア。
すると、ナーデルは何かに気付いたように笑った。

「あら……………、誰かと思えばロベリアじゃない。捕まったんじゃな

かったの？」

「成り行きでね。で、どという訳だい？」

「何の話かしら？」

「とぼけんじゃないよ。」

白をきるナーデルを一蹴し、ロベリアが倒れている警備員を指差した。

「コイツらの首や背中への傷、アタシがレイモンの屋敷を襲った時と同じものだ。多分さっきの怪獣だろうが……………」

おそらくアンタレスとかいう怪獣によるものだろう。

怪獣の殺気は、正にレイモンの屋敷で感じたそれだった。

「そうよ。貴女があんまり巴里で騒ぎを起こすから、警戒が厳重になっちゃってね。」

これでロベリアの推理は確定した。

あの夜、レイモンの屋敷でロベリアを襲ったのは、ナーデルだったのだ。

「しかしまさか、ここで会うとは思わなかったわ。おかげであの子も攻撃してくれないし。」

その言葉に、ロベリアはある程度の察しをつけた。

蠍の中には、体内に持つ毒素を感知して仲間を見分ける種類がいる。アンタレスも同様なら、以前毒を受けている自分を仲間と勘違いし

たのдарう。

それなら、自分だけ攻撃されないのも納得がいく。

「ちょうど良いわ、ロベリア。話があるの。」

ナーデルが、再び不敵に笑った。

「……………これは!!」

スパークレンスの輝きに導かれたダイゴは、目の前の状況に驚きの声を上げた。

ルーブル美術館に現れた巨大な怪獣。

その足元には、どういう訳かエリカや大神の姿がある。

「まさか、また怪人が現れたのか……………」

ダイゴは懐のスパークレンスを取り出した。

古代の彫刻は、ダイゴに戦う事を促すように光を放っている。

ダイゴはキツと怪獣を見据えると、スパークレンスを大きく時計回りに回転させ、夜空に掲げた。

「ティガー………!!」

「チャーツ!!」

夜空を舞うように現れたティガが、アンタレスに空中から蹴りつけた。

「ガアアアッ!!」

いきなりの不意打ちに、アンタレスは真後ろへ吹っ飛ぶ。そして、ティガは大神達を守るように地面に降り立った。

「チャツ!」

アンタレスを前に身構えるティガ。
アンタレスも標的を大神達からティガに変えたらしく、こちらには目もくれない。

「よし、ティガが戦っている間にロベリアと合流するぞ！」

「了解！」

アンタレスをティガに任せ、大神達は手分けしてロベリアとナーデルを探した。

何せ辺りは真っ暗である。

二人が何処をどう走ったのか皆目見当がつかない。

そこで大神は四つに分かれてロベリアを探す事にした。

これならナーデルが更に援軍を呼んでいなければ間違いなく二対一になるので、効率が良い。

そして、最初にロベリアを見つけたのは大神だった。

「ロベリア、大丈夫か！………つて、あれ？」

ロベリアと言えど生身で怪人を相手には出来ない。

先程は見失わないために追跡させたが、ナーデルの確保よりもロベリアの安否が心配だった。

が、大神の不安は一瞬で消えた。

「よお隊長。何息切らしてんだ？」

「ロベリア……、何呑気な事言ってるんだ？」

怪獣まで差し向けて来た怪人を前に何の余裕をかましているのか。呆氣に取られる大神に、今度はナードルが言った。

「心配ないわよ。あたしはロベリアと、大人の話をしていたんだから。」

「大人の話？」

「ああ。手を組まないかと誘われてね。」

「何だって！？ロベリア、まさかそれを受けたのか！？」

信じられない面持ちで尋ねる大神。

すると、ロベリアはいつものように曖昧に返した。

「条件次第さ。言ったら？巴里の平和なんてどうでもいいってね。」

「ロベリア………！」

「どうするんだい？何か条件をつけるなら考えても………。」

そうロベリアが笑った時だった。

突如大神が刀を抜き、白銀に輝く刃をロベリアの眼前に突き付けたのだ。

「そんな事、俺が許すものか！！」

「なっ………！！」

「答えるロベリア！返答いかんによつては、俺が君を切り捨てる！」

「……………！！！」

その瞬間、辺りの空気が震えた。

もし怪人と手を組むと言えば、大神は本気で自分を斬る。

大神の視線から、ロベリアは確信した。

「大丈夫よロベリア。そんな奴あたしが先に殺してあげるから。」

ナーデルはそう言ったが、そんなもので安心できる程の殺気ではない。

言うなれば、ここで死ぬか否か。

それが、ロベリアを決断させた。

「……………たく、冗談の通じない奴だねアンタは。言つたろ？コイツよりエリカがマシだって。」

「な、何ですって！？」

今度はナーデルが驚く番だった。

巴里の大悪党が、自分よりあの男につくとは信じられなかったからだ。

「当たり前だろ？元はと言えばアンタのちょっかいで捕まっただ。そんな奴と対等に交渉してやるようなアタシじゃないよ。」

「だったら交渉決裂ね。きつと後悔させてあげるわよ！」

そう吐き捨て、ナーデルは夜の闇に消えた。

「あゝあ、もう少しで捕まえられたのに。空気読んだら分かるだろ？」

「ロベリア……………」

呆れた表情で言っただけのけるロベリアだが、ふと大神に笑みを見せた。

「でもね、さっきのアンタ格好よかったよ。……………惚れそうな位にね。」

「え……………」

普段は絶対に見せない表情に、思わず見とれる大神。
すると、ロベリアは途端に元の呆れ顔に戻った。

「嘘に決まってるだろ！何照れてんだよ、馬鹿だからか？」

そうは言うものの、赤いままの顔で言われては説得力がない。
残りの三人が駆け付けたのは、その時だった。

「二人とも、無事でしたか！？」

「ああ、それよりナーデルが美術館にポーンを呼び出すらしい。大至急シャノワールに戻るぞ！」

「了解！」

その頃、ティガと戦っていたアンタレスにも異変が生じた。

「ガアアアッ！」

何と、突然地面に穴を掘って逃走を始めたのだ。

「チャッ！」

ティガは逃がさんとはかりにアンタレスの背中に馬乗りになって殴り掛かった。

「ハッ！ハッ！チャッ！」

しかし何度目かのパンチを浴びせようとした時、ティガの背中に何かが突き刺さった。

「ジュワッ！？」

それは、ロベリアさえも倒した尻尾の先にある猛毒の針だった。途端に全身を痺れと激痛が襲い、ティガは地面をのたうつ。その間に、アンタレスは地中深くに逃げ去ってしまった。

「チャッ……………」

無念そうにその様子を見つめ、ティガは姿を消してしまった。

ルーブル美術館には、既に裏口からかなりの数のポーンが侵入していた。

ちようど特別展示の日だったために、たくさんの芸術文化財が並んでいる。

「……………ティガも始末した事だし、早速始めましょうか。」

ナーデルの爪が一つの絵画を切り裂こうとした時、別の声がそれを制止した。

「やれるもんなら、やってみな!!」

「なんですつてえ……………!!?」

声のした入口に睨むナーデル。
すると、別の声と共に五つの光武Fが現れた。

「でも出来ればやらないで下さいね！」

「巴里華げき……………」お前は黙ってる！！」

見事に決めに失敗しながら。

「ロベリアさん、ここの台詞は『巴里華撃団、参上』って教えたくないですか。」

「やかましい！お前のせいでしくじったんだろ！！」

注意するエリカに爪を立てて威嚇するロベリア。

すると、ナーデルが冷たい笑みを浮かべて笑った。

「ロベリアじゃない。もしかして手を組みに来てくれたの？」

「お前馬鹿か？美術品の価値も分からねえ馬鹿と組む訳ねえだろバ―カ！」

呆れた口調で頭を叩いて見せるロベリア。

その行為が気に障ったのか、ナーデルは表情を一変させた。

「キーツ！よくも言ったわね！ポーンども、やっておしまい！！」

言つや、ナーデルは転移魔術でその場を離れた。

同時に美術館内にいたポーン達が一斉にこちらに向かってくる。たちまち館内は、激しい剣戟の音に包まれた。

ループル美術館内での戦闘は、様々な意味で戦いにくかった。ポーンの数が多い事もそうだが、何よりそこから中にある展示品を気にして戦わなければならないため、攻撃に躊躇いが生じるのだ。大神は的確に指示を出し、美術品を傷つけないように勤めた。そして、中央に位置する高級美術品を含む全ての美術品を保護する事に成功した。

「よし、あとはナーデルだけだな。」

美術品を保護したら、あとは主犯であるナーデルを倒すだけだ。その姿を探して辺りを見渡すと、ロベリアが一点を指差して叫んだ。

「隊長、ナーデルならあそこだ！」

それは、美術館の奥だった。

ナーデルは特に逃げようとせず、ポーンが全滅したこの状況において尚、余裕をかましていた。

「残りはアンタだけだ。どうする？助けでも呼ぶかい？」

「あら、それはこっちの台詞よ？それでも戦えるつもり？」

ロベリアの凄みを嘲笑で返し、ナーデルは真後ろの絵画に爪を突き

立てた。

その絵に、グリーシー又は見覚えがあった。

「あれは、『モザ・リナ』！フランスを代表する名画だぞ！」

「な、何だつて！？」

フランスの代表的な文化遺産。

そんなものに傷をつけられてはたまらない。

「さあ、この絵に傷をつけられなくなったら、道を開けなさい。」

「くそっ……………！」

二択を迫られ悩む大神。

確かに『モザ・リナ』を傷つけられる訳にはいかない。

しかし、それではナーデルにまたも逃げられてしまう。

すると、ここでロベリアが口を挟んだ。

「簡単な引き算さ。こうすればいいんだよ！」

言うや、ロベリアはとんでもない行動に出た。

掌から炎を放ち、絵をまるごと焼いてしまったのである。

「きゃっ！？」

「『モザ・リナ』が、灰に！！」

止める間もなく、フランスを代表する名画は跡形もなく消し炭になつてしまった。

「ロベリア、何て事を！」

「そうよ！せっかくあたしが素敵に作り変えようとしたのに！」

「あとでグラン・マに怒ってもらうからね。」

ナーデルを含め口々に非難を浴びせる一堂。
すると、ロベリアはキツパリと言い放った。

「何言つてんだ！怪人の撃破が最重要任務なんだろう？絵の一つや二つ、切り捨てちまえよ！」

それは、かつてのロベリアからは考えられない言葉だった。

自分のためなら何でも簡単に切り捨てる彼女が、フランスの宝を灰にしてまで正義を貫こうとは。

「……………君が怪人に見えるよ。」

「褒め言葉にしといてやるよ。」

大神の言葉にニヤリと笑い、ロベリアはナーデルに向き直った。

「ほらほらナーデルちゃん、次は何を人質にするんだい？全部燃やしてやるよ？」

すると、その言葉が逆鱗に触れたらしく、ナーデルは地団駄を踏んだ。

「キーツ！馬鹿にしないでよ！アンタ達、絶対許さないんだから！」

「！」

「へえ？許さないならどうするんだよ？」

「こつするのよ！！」

そう言い返し、ナーデルは魔法陣を出現させた。
たちまち辺りの妖気が高まる。

「まずい！みんな、光武に戻るんだ！」

大神の指示で素早く光武Fに乗り込む隊員達。
それと同時に、ナーデルが叫んだ。

「出て来なさい！蒸気獣『ノクテウルヌ』！！」

すると、真後ろの魔法陣から深紅の蒸気獣が現れた。
鋏のような両腕と長い尻尾は、猛毒の蠍を連想させる。
しかし、ナーデルが呼んだのはそれだけではなかった。

「こ、これは！」

突如震動が美術館全体を襲ったかと思うと、床を突き破ってアンタレスが現れた。

「この美術館ごと芸術に変えてあげるわ！覚悟なさい、巴里華撃団
！！」

ナーデルの叫びと共に、アンタレスが襲い掛かって来た。

「ガアアアッ！」

「まずい！みんな、双方に注意しながら戦った！」

「了解！」

大神の指示を受け、五つの光武Fは別々の方向に動いた。目標をばらけさせる事で、相手の狙いを分散させる作戦だ。結果それは上手くいき、アンタレスは大神の狙い通り辺りをキョロキョロしている。

「よし、今の内にナーデルを仕留めるぞ！」

二刀を握り、大神が叫ぶ。

アンタレスより先に指揮官のナーデルを倒せば、アンタレスも僅かに戦いやすくなるはず。

大神はアンタレスの注意を逸らし、その上でナーデルを倒す事にしたのである。

「喰らえっ！」

振りかぶった二刀をノクテウル又目掛けて振り下ろす大神。

しかし、それでやられてくれる程相手も甘くはなかった。

「フフフ……、かかったわね？」

「何っ！」

ナーデルが不敵に笑った時、大神は周囲の状況にハツとした。自分を含め、全ての光武Fがナーデルの眼前に集まっていたのだ。

「赤は血の色、死は闇の色、妖艶なれ！ ル・フラル・デュ・マル！！」

刹那、ノクテウルヌの尻尾から超高压電流が発射された。

「くっ、しまった！」

電流を受け、大神はハツとした。

光武Fは構造上、霊力を霊子水晶に反応させて動かす。その動力部分は、希少な金属で覆われている。

つまり…………。

「大変です大神さん！光武が動きません！」

最初に叫んだのはエリ力だった。

見ると、他の光武Fも動きが完全に停止している。

大神の予想が、現実が変わった瞬間だった。

光武Fの弱点は霊子水晶にダメージを受ける事だ。

そうなれば、霊力が光武Fに伝わらないため、攻撃どころか身動きすら取れないのである。

「このナードルを甘く見たわね。先にあたしを狙って来る事くらい計算済みよ。」

沈黙した光武Fを前に、ナードルが勝ち誇ったように笑う。対する大神は、悔しげに顔を歪めた。

「くそっ…………。」

状況は完全に絶望的だ。

このままでは光武Fの機能が回復する前にやられてしまう。
しかし、ここでナーデルは意外な事を口にした。

「さて、アンタ達はしばらくそのまま置いて貰うわよ?」

「何?どういう事だ!?!」

せつかくのチャンスだというのにトドメを刺そうとしないナーデルに、大神が問う。

すると、ナーデルは笑って答えた。

「あたしの狙いはもう一つあるのよ。アンタ達はその後。」

そして、ナーデルは美術館全体に響く大声を上げた。

「さあ出て来なさい!ウルトラマンティガ!」

「くっ……………!」

柱の影に隠れていたダイゴは、ナーデルの言葉に身震いした。

アンタレスに逃げられてすぐ、変身を解除したダイゴは美術館を離れようとしたのだが、背中から全身に痛みが走って思うように動けず、美術館内に身を潜めていたのである。

「そこにいるのは分かってるのよ？大人しく姿を見せなさい！」

おそらくこちらの居場所はばれているだろう。
ナードルの声は明らかにこちらを向いていた。

「（どうする……………？この身体で勝てるか……………？）」

先程のダメージは色濃く残っている。

この状況で、怪獣と蒸気獣の二体を相手に勝てる自信はない。
しかし、スパークレンスはダイゴの意志に反して、光を放っていた。
まるで、ダイゴに戦えと言わんばかりに。

「ティガ……………、それが君の意志なの……………？」

勝てる見込みはない。

だが、目の前に巴里を脅かす存在がある限り自分は戦わなければならない。

それが、光を継いだダイゴの宿命だった。

「ティガ……………、僕に勇気を授けてくれ……………！」

ダイゴは傷付いた身体で立ち上がると、その光に従い、スパークレンスを天に掲げた。

「ティガー……ッ!!」

そして、光は再び戦場へ舞い戻った。

「チャッ!」

「ティガ!!」

「……………現れたわね。」

姿を見せた光の巨人に、花組は驚き、ナードルは笑った。
獲物を見つけた蠍のように、悍ましい顔だ。

「フッフ、やはり現れたわねティガ。最高の芸術に変えてあげるわ。」

言うや、アンタレスが襲い掛かって来た。

「ガアアアッ!」

「チャッ!」

真正面から体当たりして来た首を捕まえ、一本背負いの要領で投げ飛ばす。

しかし、仰向けに倒れたアンタレスに攻撃を仕掛けようとした時、ティガは背中に激痛を感じた。

「ジュワッ!？」

激痛の余り立っていらなくなり、片膝をつくティガ。そこに、起き上がったアンタレスが襲って来た。

「ガアアアッ!」

「チャッ……………!」

首を締め上げる両腕を外そうと、ティガがアンタレスの両腕を掴む。しかし、毒にやられて弱った身体に十分な力が入らない。

「そうよアンタレス……………。そのままティガを離さないでね……………」

身動きの取れないティガの様子を楽しむように笑い、ナーデルがティガに迫る。

「さあ、その首を撥ねてオブジェにしてあげるわ!」

「ティガ!」

ティガの身を案じてエリカが叫ぶ。しかし、ナーデルの攻撃は意外な人物によって阻止された。

「何正義の味方がやられてんだ?」

「なっ！ロベリア！？」

何と、ロベリアの光武Fがノクテュルヌの前に割って入り、右手の三本の鉤爪で攻撃を防いだのである。

「どういう事！？あたしの電撃が効かなかったって言うの！？」

動きを封じたはずのロベリアからの反撃に、呆然となるナーデル。すると、ロベリアはニヤリと笑った。

「馬鹿が。このアタシを見て分らないのか？」

その言葉に、ナーデルは顔を凍りつかせた。

「なっ……………！！」

何と、ロベリアの光武Fは腰から下が地面に溶け込んでいたのだ。あの時、ロベリアは全身を床に沈める事でナーデルの攻撃をやり過ぎたのである。

「ほら、いつまで情けない格好してんだ？早いとこケリつけちまえ！！」

ノクテュルヌを押し返しながらロベリアが叫ぶ。

すると、その言葉に奮起されたティガは全身に力を集中した。

「ンウウウ……………、ハッ！！」

額のクリスタルを発光して、ティガはパワータイプにチェンジする。そして、その凄まじい握力でアンタレスの両腕を握りしめた。

「ンウウウ……………!!」

「ガアアッ!?!」

突然のティガの反撃に驚いたアンタレスは腕を外そうとするが、パワータイプの握力からは逃げられない。

「ハッ!」

ティガが気合いの一声を発する。

すると、アンタレスの両腕が音をたてて粉々に握り潰された。

「ガアアアッ!!」

「チャッ!」

両腕を潰されて苦しむアンタレスに、ティガはここぞとばかりに反撃に出た。

逃げようとする怪獣の尻尾を捕まえ、ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばす。

「チャーツ!!」

美術品を展示していた台を薙ぎ倒しながら、倒れるアンタレス。ティガは両手を大きく外側から回してエネルギーを圧縮する。

「ハアアア……………!!」

そして、アンタレス目掛けて渾身のデラシウム光流を放った。

「ダァーッ!!」

超高熱の光球は一直線にアンタレスを捕らえ、一気に包み込む。

「ガアアアア……………!!」

アンタレスは断末魔の叫び声と共に大爆発した。

「そ、そんな……………!あたしのアンタレスが……………!」

自分の可愛いペットが目の前で倒され、呆然とするナーデル。
そこに、ロベリアが襲い掛かった。

「よそ見してる暇あんのか!？」

血に飢えた爪でノクテウルヌに切り掛かる。

気付いたナーデルは慌てて避けようとするが間に合わず、爪はノクテウルヌの腹を深々と引き裂いた。

「キーツ!卑怯じゃない!少しは手加減しなさいよ!」

「ハン、ここで死ぬ奴が何言ってるんだ?いい加減諦めな!」

そう吐き捨て、ロベリアは凄絶な笑みでナーデルを睨んだ。
右手の鉤爪が、灼熱の炎に包まれる。

「……………!!」

その悪魔にも似た恐ろしい視線に魅入られ、ナーデルの身体が固ま

る。

そこにらロベリアは殺意に満ちた鉤爪を振り下ろした。

「炎を見る度思い出せ、火の恐怖を！　ファイアンマ・ウンギア！！」

鉤爪はノクテウルヌの脳天を直撃した。

たちまちに赤い蠍の全身を煙と火花が包む。

「こんなの……、こんなの、認めないわ！あたしの芸術を分らない、無能な……、人間共に……！！」

無念の声と共に、ナードルは地獄の業火に蒔かれて灰になった。

「チャッ。」

その様子を確認し、ティガは静かに消え去った。

「……………今回はロベリアのお手柄だったな。」

ループル美術館を後にして、大神が口を開いた。

今回の任務におけるロベリアの功績は素晴らしいものがあつた。

ループル美術館が襲撃される事をピタリと言い当て、ナードル撃破に貢献し、ティガのピンチまで救ったのだ。

これを大活躍と言わずして何と言うのか。

悪党だとか言う事は関係なく、ロベリアは立派に巴里華撃団としての存在をしらしめたのである。
最も、本人にそのつもりは全くないが。

「そうだ！『モザ・リナ』燃やしちゃったけど、どうしよう！」

ふと思い出したように、コクリコが叫んだ。

ナードルを追い詰めるためにやむを得なかったとはいえ、フランスの宝を灰に変えてしまった責任は重い。
すると、シャノワールから通信が入って来た。

「それなら、ご心配には及びません。」

「あの絵画は全部、美術館が用意した偽物だそうです。」

「ロベリアさんの事ですから、最初から知ってたんですね？」

「当然さ。眉毛のない『モザ・リナ』が、本物な訳ないだろ？」

得意そうに腕を組むロベリア。

確かに偽物と見抜いていたなら、先程の行動も頷ける。

しかし、ここでグリシーヌがある事に気付いた。

「……………待てロベリア。元々『モザ・リナ』に眉毛はないぞ。」

元々眉毛はない。

と言う事は、眉毛の有無では本物と偽物の判断が出来ない事になる。
つまり……………、

「あゝら、そうだったっけ？まあ良いじゃねえか。」

「ふざけるな！本物だったらどう責任を取るつもりだったんだ！」

無責任なロベリアの言動にすかさず噛み付くグリシーヌ。
すると、エリカがそれを宥めながら言った。

「はいはい落ち着いて。いつものアレがまだですよ？」

「……………いつものアレ？」

「はい。私達は戦いに勝った後、必ずポーズをキメる事に……………」

刹那、ロベリアの表情は一変した。

「なっ！？じ、「冗談じゃねえ！！そんな子供みたいな真似出来るかよ……」

「こらロベリア、逃げるんじゃない！」

嫌がるロベリアを押さえ付け、大神が言った。

「行くぞ、勝利のポーズ……………」

「キメるかあ——!!」

闇よりの使者（後書き）

《次回予告》

いつまでも覚めない夢……………。

私は貴方と、愛に揺らめきたい。

そう、いつまでも……………

次回、サクラ大戦3。

《揺らめく想いは》

愛の御旗のもとに……………

それでも貴方を、忘れられない……………

揺らめく想いは（前書き）

フランの相場がイマイチ分からないという……。
勉強不足か……。。

揺らめく想いは

巴里の街は、全てが華やかという訳ではない。
この花屋の近くにも、そういう場所があった。
墓地。

このフランスで生涯を終えた魂達が、静かに眠る場所。
その一番奥に、彼女はいた。

「フィリップ……………、貴方の好きな花を持って来ました。」

漆黒の喪服に身を包み、静かに微笑みながら、彼女は花束を墓の前に置く。

その墓標には、「フィリップ・マールブランシュ」と彫つてある。
おそらくフィリップという人物の墓参りだろう。
喪服の少女は、静かに微笑んでいた。

「今日も二人で、楽しく過ごしましょうね……………」

「はあ……………、身体がだるい……………」

教会の掃除をしながら、ダイゴが呟いた。
何せ前回は蠍怪獣アンタレスに毒針を刺されるといふ深手を負ったのだ。

背中痛みは無くなったが、今だに身体を動かすとだるさを感じてしまう。

今日も教会の前を箒で掃くだけなのに、すぐにこうして疲れが出てしまった。

「ダイゴ、大丈夫かい？少し休んだ方が……………」

「いや、大丈夫だよ……………」

心配そうに言うピエールに空元気な返事を返し、ダイゴはため息をついた。

疲れているのは事実だが、怪獣にやられたとは口が裂けても言えない。

訝しげにこちらを見る親友の痛い視線を浴びながら掃除を再開するダイゴに声かけられたのは、その時だった。

「やあ、ダイゴじゃないか。」

「……………ああ。」

それは、モギリ服姿の大神だった。
大方エリカ狙いだろう。

そう判断するや、ダイゴの顔は反射的に険しくなる。

一方、大神とは初対面のピエールは珍しげな表情で口を開いた。

「ダイゴ、この人は知り合いなの？」

「ああ、紹介するよ。大神一郎さん。僕と同じ日本人なんだ。」

「へえ、日本人か。ボンジュール、ムッシュ大神。僕はピエール・タバルニエ。よろしくね。」

渋々ながらも紹介するダイゴと対照的に、笑顔で右手を差し出すピエール。

すると、大神もいつものようににこやかな笑顔でピエールの手を握り返した。

「俺は大神一郎。シャノワールでモギリをしているんだ。よろしく、ピエール。」

自己紹介も済んだ所で、大神は辺りをキョロキョロしながらダイゴに尋ねた。

「ところでダイゴ、エリカくんを見てないかい？」

「……………ここにはいないよ。」

やはりそうか。

ダイゴはあからさまに不快な表情で言った。

「そうか……………。ん？」

ダイゴに言われて立ち去ろうとした時、大神は何か気付いたように立ち止まった。

そして、何やら不思議な形をした機械を取り出した。

「……………」

「済まないダイゴ。ちょっといいかな？」

そう言つて、大神は不思議な機械をダイゴに向けた。

すると、何やら音がして機械の下にあるカウンターが動いた。

「……………何それ？」

訳の分からない機械を突き付けられ、不快感を更に募らせるダイゴ。
一方、大神は難しい顔でカウンターの針を見ていた。

「あ、いや、済まない。もういいよ。」

そう言つてダイゴから機械を退ける大神。
すると、ピエールが物珍しそうに尋ねた。

「ムツシュ大神、それは何かの道具？」

「ああ、そんな大したものじゃないよ。」

そう曖昧に返し、大神は機械をしまいかける。

しかしまた何かに気付いた様子で、しまいかけた機械を今度はピエールに向けた。

「……………」

「……………うん、やっぱり違うか。」

そう言つて機械をしまい、今度こそその場を後にする大神。

その様子に、ピエールは穏やかに笑った。

「何だか変わった人だね？」

「うん。僕もよく分からない人だよ……………」

大神が何故あんな不思議な機械を持って街をうろついていたか。それは、約一時間前に遡る。

「ふう、少し休憩にするか……………」

大神はそう呟いて、目を通していた書類を机の上に置いた。

それは、巴里華撃団最後の隊員の候補を載せた極秘リストだった。巴里華撃団の隊員数は、賢人機関の決定によりあと一人となった。つまり、今いるエリカ、グリシーヌ、コクリコ、ロベリアに一人を加えた五人が、巴里華撃団最終メンバーという事になる。

秘密部隊としてはちょうど良い人数だ。

そこで、候補に上がった人物のリストを一枚ずつ見ているのだが、めぼしい人物は未だに見つからなかった。

確かに一般人の中では靈力に秀でた人物が集まっているが、靈力ばかりが隊員を決めるのではない。

過酷な戦いに挑むゆるぎない覚悟と、巴里を守りたいという想いが揃って初めて隊員と呼べると、大神は考えている。
残念ながら、それに該当する人物はない。

「よう隊長さん。新隊員選考は順調かい？」

そこに、ジャン班長が顔を出した。

「あ、ジャン班長。残念ながら、これと言える人物はありません。」

「だろうな。そこでよ隊長さん、さつき地下で面白いモン作ったんだ。」

「面白いもの？」

「おうよ。こいつを見てみな。」

おうむ返しに聞く大神の前に、ジャンは地下で作った道具を見せた。見た目は蓄音機に近い構造だが、中心にカウスターがついていたり、端からアンテナが伸びていたり、何やら複雑な道具に見える。

「こいつはアンテナを向けた相手の靈力を計る靈測機だ。」

「靈測機？じゃあ、これを持って街を歩けば……………」

「そう。誰が高い靈力を持っているか一目瞭然だ。後はそいつが相応しいが隊長さんが判断すればいい。」

ジャンにとっても自信作らしく、満足げに頷いている。
そして、大神は意気揚々と隊員探しに繰り出した訳だが……。

「やっぱり簡単には見つからないか……。」「

花屋の前を通りかかり、大神はため息をついた。
意気揚々と巴里市内を歩き回って一時間。

霊力のある人物は数人見かけたが、いずれも光武Fを扱える程ではないし、隊員にするにはイマイチ足りない気がした。

今のところ、カウンターに計測されるだけの霊力を持つのは三人。
グリシーヌ邸で掃除をしていたタレブーと、教会にいたピエール。
そして、同じくダイゴである。

しかし、タレブーの霊力は掃除をしていた時にしかカウンターに計測されなかったし、ピエールとダイゴも光武Fを扱えるかはやや怪しい。

その時、視界の隅に見覚えのある人物が写った。

「あれは……、花火くんか？」

あの黒い喪服からして間違いない。

花束を手に、花火は墓地へ向かっているようだ。

「（お墓参りでもするのか……？）」「

個人的に人のプライベートを覗くのは趣味ではないが、どうも様子が違う花火が気になった大神は不本意ながらも花火の後を追いかけた。

墓地は花屋の隣に位置していた。

大抵の人は花屋で購入した花を墓に手向けるため、位置的には都合が良い。

見ると、花火はその墓の一つに寄り添っていた。

「……………」

花火の様子に大神は声をかけようとして、やめた。

墓参りに来ているはずの花火が、やけに幸せそうな表情でいる事に訝しさを感じたからだ。

「……………仕方ない。一度シャノワールに戻ろう。」

流石に後ろめたさを感じて立ち上がる大神。

すると、花火が大神の存在に気付いた。

「あ、大神さん……………」

こちらに歩いて来る花火。

その表情も、やはりいつもより幸せそうに見える。

「どうなされたんですか？こんな所で。」

「いや……、それより花火くんは、誰かのお墓参りかい？」

痛い所を聞かれ、大神は上手くはぐらかした。
流石に目の前で尾けて来ましたとは言えない。
幸い、花火は疑いもせずに言葉を返した。

「私ですか？私はただ、人に会いに来ていただけです。」

「え………？」

人と言つても、ここには自分と花火の二人しかいない。
自分な訳はないし、一体誰と会うというのか。

「それでは、失礼します。」

眉をひそめる大神をよそに、花火は一礼してその場を後にした。

「……………ここがお参りしていた墓か。」

花火が見えなくなると、大神は彼女がお参りした墓の前に立った。
先程の花火の様子は何処かおかしい。

墓参りなのに人に会いに来たと言うし、顔を赤くしている。
常識的に考えて、墓参りに来た人の顔らしくなかった。

「フィリップ・ディ・マールブランシュ……………」

おそらく花火の知り合いだろうか。

名前の下には、『フィリップは花火のために生きた』と彫ってある。

「ん？これは……………」

大神は手向けられた花束の影に何かを見つけた。
拾って見ると、それは一枚の写真だった。
おそらく花束を置いた時に落としたのだろう。

「もしかして、この人がフィリップか……………？」

写真には、花火と一人の金髪の青年が微笑ましげに写っていた。
写真の花火は喪服を着ていない事を除いて今と変わらない。
つまりこの写真は最近のもので、この青年がフィリップなら、彼は
かなり若くして命を落とした事になる。

「……………とりあえず、花火くんに戻そう。」

フィリップは花火にとって、少なからず大切な人物のはず。
ならばこの写真は、花火が持っているべきだった。
大神は、花火を追いかけて墓地を後にした。

「……………遅いなあ……………」

そうばやきつつ辺り見渡すダイゴ。
エリカが教会に活ける花を買いに行ったきり戻って来ないので、心
配になって探しに来たのだ。

案の定花屋はとつくに後にしたらしく、ダイゴはだるい身体で歩き回る事になった。

「それじゃ、また遊ぼうねー！」

その捜し求めた声が耳に届いたのは、ちょうど公園の辺りを歩いていた時だった。

「あ、エリカさん……………」

疲れと喜びの入り混じった、陰りのある笑顔でダイゴはエリカを見た。

すると、エリカもこちらに気がついた。

「あ、ダイゴさん！どうしたんですか？缶蹴りならもう終わっちゃいましたよ？」

「いや、別に缶蹴りがしたい訳じゃないから……………」

見ると小さな子供達が向こうへ走り去って行く様子が見える。

おそらく今まで、あの子供達と缶蹴りをして遊んでいたのだろう。やれやれとため息をつくダイゴ。

その時、エリカの右膝から血が出ている事に気がついた。

「エリカさん、怪我してるよー！」

「ああ、それなら平気です。さっき大神さんが治してくれましたから。」

「……………え？」

エリカの口から出た『大神』という言葉に、手当てを始めようとしたダイゴは固まった。

その顔は、遠目から見ても分かる程に引き攣っている。

しかし、肝心のエリカはダイゴの表情に全く気づかず、更なる追い撃ちをかけた。

「大神さんって優しいんですよ！痛いのを抑えるおまじないしてくれて。エリカますます大神さんが好きになっちゃいました！」

ダイゴは答えなかった。

いや、答えられなかった。

大好きなエリカから目の前で他の男を好きと言われたのだ。無理もない。

「それじゃ、私は先に教会に戻りますね。」

やはりダイゴの様子に気づく事なく、エリカはさも嬉しそうにスキップして公園を後にした。

「……………」

残されたダイゴはしばらくの間、身体のだるさも忘れて立ち尽くしていた。

「えっと……………、見失ったかな……………」

辺りを見渡して、大神が呟いた。

花火を追いかけて来たはいいものの怪我をしたエリカに捕まってしまい、適当におまじないでごまかしたものの、公園を過ぎた橋の辺りで見失ってしまったのだ。

「あ、あそこか……………」

見ると、花火は橋の真ん中で眼下を流れる川を眺めていた。しかし、やけに悲しげな表情が気になる。

「（さつき墓地で会った時といい、様子がおかしいな……………」

そう思いつつも写真を渡そうと大神が歩き出した時だった。

何と花火が、突然橋から身を乗り出したのである。

「は、花火くん！早まるな！！」

慌てて止めようと走り出す大神。

すると、その叫び声に反応した花火がこちらに気付いた。

「え……………、お、大神さん！？」

必死で走ってくる大神にびっくりしたのか、花火は橋の淵から離れる。

しかし、今度は大神が危なかった。
勢いを付けすぎて、止まれなくなってしまったのだ。

「わ！わ！しまった………！！」

サムライの熱血が裏目に出て、大神はある意味華麗に川へとダイブしてしまった。
その時、

「嫌ああああ………！！」

大神の耳に、誰かの叫び声が聞こえた。

「……………あれは！」

突然聞こえた叫び声を聞き付けて公園を飛び出したダイゴは、橋の上で倒れている花火を発見した。

「花火さん！しっかりして、花火さん！」

急いで抱き起こし、身体を優しく揺する。

その真下の川でもがいている大神を無視する辺りは、ダイゴらしい所だろうか。

「う……………、……………フィリップ……………」

謔言で誰かの名前を呟く花火。

すると、そこに川からは上がった大神が姿を現した。

「花火くん！じゃあさっきの悲鳴は……………」

「僕も聞いた。多分花火さんだよ……………」

一体何があったというのか。

二人が揃って首を傾げていると、花火がようやく意識を取り戻した。

「あ……………、大神さん……………、ダイゴさん……………」

「花火くん、気がついたんだね。」

優しく笑いかける大神。

すると、花火は虚ろなままの表情で尋ねた。

「私……………、まだ生きてるんですか……………？」

「え……………」

その言葉に、ダイゴの顔から安堵の表情が消えた。花火の様子が、初めて会った時と違うのだ。まるで生きる事を無力に思い、生きる事すら拒むような様子に見える。

現に今の一言も、本当は死ぬはずだったのに生き残ってしまったように聞こえる。

「え？別に怪我とかはないけど……………」

その事に気付いていないのか、戸惑った様子で答える大神。

「そうですか……………。まだ、生きてるんですね……………」

「花火くん……………、どうしたんだい？さっきから様子が変わだよ？」

生気のない表情で立ち上がる花火に、大神が心配そうに声をかける。しかし、花火は表情を変えずに首を振った。

「ご心配には及びませんわ。それでは……………」

そう言って歩き出そうとする花火を、大神が止めた。

「あ、ちょっと待ってくれ。この写真、花火くんのだろう？」

「え……………」

墓地で拾った写真を花火に差し出す。

幸い水には曝されなかったらしく、濡れたりふやけたりはしていない

い。

しかし、その写真を見るや、花火は表情を一変させた。

「それは……………！か、返して下さい！！何処でそれを！？」

余程大切な写真だったのか、花火は大神の手から写真を引ったくつた。

「あ、いや……………墓地で拾ったんだけど……………」

やはり戸惑いながらも律儀に答える大神。
すると、花火はハッと我に還った。

「あ……………すみません。取り乱してしまつて……………。し、失礼します……………」

気まづくなったその場の空気に耐えられなかったのか、花火は早足で橋から立ち去った。

「な、何だっただ……………」

イマイチ状況が飲み込めない大神が呟く。
すると、ダイゴが言葉を返した。

「少なくとも、以前とは様子が違うよね。」

「ああ。花火くん……………、一体どうしてしまったんだ？」

いくら考えても、答えが出て来る様子はなかった。

「で、どうだった？新隊員は見つかったの？」

「いや、これと確定できる程の人物はなかったな。」

コクリコの言葉に、大神は些か残念そうに返事を返した。

あれからシャノワールに戻った大神は、コクリコに呼ばれて新隊員についての会合に参加する事になった。

今現在霊力が確認されたのは、タレブー、ピエール、ダイゴの三人しかし、いずれも光武Fを動かせる程の霊力を維持出来るかに疑問が残る。

すると、ここでエリカが申し出た。

「それじゃあ大神さん。花火さんなんてどうですか？」

「花火くん？どうだろう……、きちんと霊力を測れなかったから……。」

確かにあの時、霊測機のカウンターは測定不能にまでなっていたが、それが本当に花火の霊力によるものなのかは怪しい。

「花火は戦いには向かん。それより、新隊員であろう？」

「どうでもいいじゃねえか、そんなもん。アタシの給料二倍にしたら二人分働いてやるよ。」

ぶっきらぼうに言っつて、ロベリアがテーブルの上の菓子をつまむ。一方、グリシー又は大神に念を押すように言った。

「新隊員には霊力と共に、巴里を守るという理想が必須だ。そこは分かっておろうな？」

「もちろんだ。そこはグリシー又と同意見だよ。」

「だったらやっぱり花火さんですよ！みんなも知ってますし、優しいですし……………」

「エリカくん……………、そこまで花火くんに固執する事ないと思うぞ？」

あくまでも花火を推薦したがるエリカを抑える大神。すると、唯一花火を知らない人物が口を開いた。

「花火？誰だそいつは？」

「あ、そっか。ロベリアさん、メイドしてませんでしたね。」

「エリカ、今は新隊員についての話だぞ？」

脱線を続けるエリカをグリシー又が窘める。

「おいおい、せめてその花火って奴について先に教えるよ。」

「えつとね、グリシーヌの友達の日本人なんだ。」

「ふん、日本人ね……。」

しつこく尋ねるロベリアに根負けして、コクリコが簡単に花火について説明する。

「……じゃあ、話を戻すよ。」

いい加減隣のグリシーヌの視線が痛くなつて来た大神が、冷や汗をかきながら言った。

あくまで本題は花火ではなく新隊員である。

「支配人によると、新隊員はあと一人だけなんだ。」

「だったら花火さんでいいじゃないですか。」

「うん。ボクも花火と一緒にいいな。」

「なら、もうそいつでいいじゃねえか。さっさと隊員にしちまおうぜ?」

新隊員があと一人と聞くや、三人は揃って花火を推薦したが、グリシーヌだけは頑なに反対を示した。

「花火は戦いなど向かん。ごり押しをするな。」

「はい……。」

残念そうにコクリコが俯く。

すると、ロベリアがふと大神に尋ねた。

「そついや隊長。霊力はどうやって調べるんだ？」

「ああ、この霊測機だよ。アンテナを向けた一人人の霊力が、このカウンターに表示されるんだ。」

そう言つて、大神は霊測機を取り出した。
幸い直っているらしく、カウンターは0に戻っている。

「面白そうだな。隊長、アタシの霊力を計つてみてくれよ。」

「ああ、いいよ。」

言われるままにアンテナを向ける大神。
すると、驚きの結果が現れた。

「す、凄い！針が振り切れている！測定不能だ！！」

「当然さ。アタシは危ない橋を何度も渡つて来たからな。」

大神が驚く様子に満足したのか、ロベリアは得意げに腕を組む。
すると、エリカが尋ねた。

「ねえ大神さん。その機械で花火さんも測つたんですか？」

「うん。でもきちんと測る事はできなくて……。」

「隊長、会合の主旨を忘れたか？」

釘を刺すようにグリシーヌが睨んだ。

まるで花火の話をやめろと言わんばかりだ。

「じゃあイチロー、他に霊力のある人はいなかったの？」

「そうだな……。強いて挙げるならダイゴくらいか……。」

「ダイゴ？またよく分からない奴が出て来たな。」

「ダイゴも日本人だよ。エリカの友達なんだ。」

「じゃあ花火って奴が駄目ならそいつはどうだ？」

余程会合を早く終わらせたいらしく、ロベリアがダイゴを新隊員に提案する。

すると、今度はエリカが猛反対した。

「駄目です！ダイゴさんを戦わせるなんて、神様が許しません！！」

「…………じゃあ、結局は地道に探すしかないな。」

花火やダイゴが却下された以上、候補は0に戻った。

やはり再び出直す必要がありそうだ。

「よし、結論は出たな。今後はみなで街を見回るぞ？」

「みんな、よろしく頼むぞ？」

「もちろん！ボクに任せてよ！」

「ま、アタシも気をつけてやるよ。」

「エリカもがんばります!」

力強い返事を返す隊員達。

大神はその様子に心強さを感じた。

「隊長……………」

そうして開店準備に取り掛かろうとした時、グリシーヌがふと声をかけて来た。

「少しいいか?花火の事で話がある。」

「ああ。俺も聞きたい事があった。」

「では場所を移そう。ついて参れ。」

大神がグリシーヌに連れてこられたのは、楽屋だった。
確かに開店前なら、楽屋に来る者はそういない。

「……………よし、まずは貴公の話を聞こうか。」

「ああ。フィリップという名前について、知らないかい?」

「フィリップ?貴公、何故その名を!?」

刹那、グリシーヌは表情を一変させ、大神の胸倉を掴んだ。

「吐け!その名前を何処で聞いた!!!」

「は、墓参りをしていた花火くんに会ったんだ。その墓に名前が彫ってあった……………」

「では貴公が知るのには名前だけか？」

「ああ、他には何も……………」

そう答えると、グリシーヌはようやく手を離した。

「ならば話しておこう。フィリップは……………、花火のフィアンセだ。」

「な、何だって！！」

予想もしなかった答えに、大神は仰天した。

知り合いか友達だろうと思っていたが、まさかそれ以上の関係だったとは……………。

「花火の婚約が決まった頃、私もよく二人に会っていた。花火とフィリップの仲の良さは、私から見ても微笑ましいものでな。」

つまりは相思相愛。

花火とフィリップは、既に一生を約束した仲だったのだ。

「二人は未永く幸せにあると思っていた……………。あの日までは……………」

おそらくはフィリップの命日の事だろう。

何らかの事情でフィリップは命を落としてしまった。

それが一生を誓ったフィアンセであるなら、花火のあの様子にも納得がいく。

「それで、花火くんはフィリップさんの墓に寄り添っていたのか。」

「そうだ。あれ以来、花火はショックから喪服を脱ごうとはしなくてな……………」

花火の様子を思い出したか、グリシー又は悲しげな表情で俯いた。

「グリシーヌも、話があるって言っていたけど……………」

「いや、貴公と同じ話だった。失礼する……………」

そう言って、グリシーヌは足早に楽屋を後にした。

「そうか……………。あれはフィアンセの墓だったのか……………」

愛した人に先立たれ、残された苦しみがどれだけ大きいのか。それは、大神自身もよく知っていた。

巴里は華の都。

芸術を始めとする様々な文化が軒並み名を連ねている。

その一角が、オペラであった。

役者が舞台を舞い歌う様は、さながら生きた芸術である。

しかし、それを真上から冷ややかな視線で見る者がいた。

「ああ、なんと悲しく滑稽なるかな。享楽に溺れる愚かな人間共よ。

」

芝居がかった口調で、声がした。

「教えてやろう、幾千の灯を点しても、消えぬ闇がある事を。見せてやろう、幾千の朝を迎えようと、醒めぬ悪夢がある事を……………」

」

目の前で演じられる悲劇の舞台に嘲笑を浴びせ、跡形もなく消えた。

「闇に生まれながら、幾重の闇を打ち消したる我が裏切り者よ。見せてやろう……………」その見せ掛けの光では救えぬ、底なき闇を！」

夜の闇に包まれた巴里を疾駆する影。

その足が止まったのは、一つの豪邸の前だった。

「感じる……………」ここに。引き裂かれし心が……………」闇を求める乙女の心が……………」

「フィリップ……………」覚えていますか？あの日の事を……………」

漆黒の身体を闇に溶け込ませ、二つの目がギリリと火花を捉えた。まるで、獲物を見つけた猛禽類のように。

「見せてみよ、その永久なる願いを。」

影の目が光った。

そこは目の前と同じ部屋。

今見える少女が笑顔を見せている。

唯一違う事があるとすれば、身に纏う服が黒ではない事だろうか。

「フィリップ、来てくれたの。お茶を煎れるから、座って待ってて。」

「

少女が嬉しそうに誰かの名前を呼ぶ。

すると、一人の青年が姿を見せた。

「花火、お茶なんかいいよ。さあ、こっちへおいで……………」

「は、はい……………フィリップ……………」

顔を赤く染め、フィリップと呼ばれた青年に寄り添う少女。
すると、フィリップは少女を抱きしめて囁きかけた。

「可愛い花火……………。素敵な笑顔を、僕を見せておくれ。」

「はい……………、フィリップ……………」

「ついに、ついに見つけたぞ！この乙女こそ、我が捜し求めた君！
」

影は歓喜に震えた。

「黄泉の国へ旅立った恋人を愛するが故に望まれる死。そのか弱き心に、そのあどけなき胸に、何と深い闇が渦巻いている事か…………。」

「

影は喝采を上げた。

捜し求めていた闇が、ついに見つかったのだ。

芝居の役者を発掘した監督にも似た様子で、影は喜びにうち震えた。

「見るがいい、愚かな人間共。見るがいい、哀れな裏切り者。そのかりそめの光を、我が君の闇に沈めてくれるわ！」

冷たい夜空に、漆黒の羽が羽ばたいた。

「…………。」

その夜、ダイゴは中々寝付けずにいた。

原因は分かっている。
エリカの事だ。

「エリカ、ますます大神さんの事が好きになっちゃいました！」

昼に公園で聞いた一言が、しつこく耳に残る。

自分の見ていない所で、エリカは確実に大神に靡きつつあった。

「本当に、あの人がいいのかな……………」

ほんの数ヶ月前に現れた自分と同じ日本人。

そんな奴に、自分は負けるのか。

そう考えると、無性に悔しくて仕方がなかった。

「……………」

ダイゴは黙ったまま、懷からスパークレンスを取り出した。
月の光を反射し、優しい光を放っている。

「ねえ、ティガ……………」

ダイゴは、彫刻に眠る巨人に問い掛けた。

「君にも消せない闇はあるの？例えば……………」

僕の心のように。

そう言いかけ、ダイゴは止めた。

返ってくるのは沈黙だけ。

また心の傷を深いものにするだけだ。

しかしダイゴは気付かなかった。

夜空に輝く星の一つが、ダイゴを慰めるように輝きを増した事を。
ウルトラの星……。
その星の名前を、ダイゴはまだ知らない。

「ああダイゴさん。いい所に来て下さいました、ハイ。」

ダイゴが教会に来るや、レノ神父が慌てた様子で走り寄って来た。

「どうしたのレノ神父？」

「じ、実は……エリカさんがいきなり花火さんという方にプレゼントをするとか言って、市場の方へ大張り切りで……。」

そう言って市場を指差すレノ神父。

その方角を見て、ダイゴも冷や汗を流した。

エリカは一日に一回必ず何か失敗をする。

特に張り切っている時は、不思議と失敗の可能性が倍増してしまうのだ。

つまり……、

「私はこれからミサがありますので、どうかエリカさんを……………」

「分かった、エリカさんの事は任せて！」

エリカがまだドジを踏んでいない事を祈りながら、ダイゴは一目散に市場へと駆け出した。

「……………ん？あれは……………」

不意に窓の外を過ぎった影に、大神は目を凝らした。
物凄く急いだ様子で走り抜けた黒い影。
もしかダイゴではなからうか。

「どうかされましたか？大神さん。」

「え？あ、いや、何でもないよ……………」

向かい側の席に座る花火にそう答え、大神は食べかけの豆腐の冷や奴を一口頬張った。

この日、大神は昨日と同じように墓参りをしていた花火と会い、一緒に少し早めの昼食を取っていた。

フィアンセを失った悲しみから立ち直れずにいる彼女を少しでも励ましてあげようと考えたからだ。

そこで、巴里に来てからよく行くレストランで食事を提案した。幸い花火もグリシーヌとよく来るらしく、殿方の頼みは断れないと了承してくれた。

「ありがとうございます。わざわざ日本食を選んでいただいて。」

「いや、たまたま今日のオススメ料理が日本食だったただけだよ。」

大神はそう言うが、半分は花火の言う通りだ。

フランスのレストランは決まったメニューがない。

基本的にシェフが朝から食材を買い揃え、その食材からメニューを考えるのだ。

中でも今日のオススメ料理は、シェフがその日に仕入れた食材をふんだんに使用している最高の一品。

味は当然の如く絶品だが、その分値段も高い。

特に今日の日本食は、フランスでは中々手に入らない食材のために値段も高い。

加えて大神も、巴里華撃団の隊長とはいえ普段はシアターのモギリである。

当然の事ながら、給料はそんなに高くない。

実際に今日の食事で、大神の財布はかなり寒い事になっていた。

「（良かった。花火くん、少し元気になってくれたみたいだな。）」

墓地で会った時と比べて、僅かだが花火に笑顔が増えた。

そのための代償は大きかったが、彼女が元気になってくれるなら大した事ではない。

しかし、その安心も長くは続かなかった。

「お食事、美味しかったです。ありがとうございました。」

昼食を食べ終え、外に出た花火が大神に礼を述べた。
どうやら大分元気を取り戻してくれたようだ。

「それじゃあ、グリシー又邸まで送って行くよ。」

「はい。お願いいたします。」

そう言って歩き出そうとした時だった。

突然辺りに黒い羽根が舞い降りて来たのである。

「な、何だ!？」

驚きつつも花火を守ろうと警戒する大神。

すると、二人の前に黒い不気味な影が現れた。

「貴様………、怪人か!？」

その姿を見るや、大神が吠えた。

漆黒のマントとシルクハット。

そして黒く尖った嘴。

まさに闇に溶け込む姿に対し、獲物を捉える二つの目はギラリと光っている。

「我が名はマスク・ド・コルボー。お初にお目にかかります。黒き衣のマドモアゼルよ。」

「黒き衣のマドモアゼル？花火くんの事か！？」

芝居がかった口調で迫るコルボーなる怪人から花火を庇うように立つ大神。

すると、コルボーは打って変わって大神に殺気を漲らせた。

「愚かなる男よ！貴様になど用はない。」

その時、花火が信じられない事を口にした。

「…………フィリップ…………？フィリップなのね…………？」

「なっ！花火くん！？」

振り返った大神は驚きに目を見張った。

それもそのはず。

何故なら花火は、目の前に立つ怪人に怖がる様子もなく、むしろ微笑みながら近付いて行くからだ。

どういう事かと訝しむ大神だったが、次にコルボーが放った一言で全てを理解した。

「待たせてしまったね、花火。さあ、僕の側へおいで。」

「はい…………、フィリップ…………。」

コルボーの異なった口調と、コルボーをフィリップと呼ぶ花火。コルボーは幻術が何かで、花火が自分をフィリップと錯覚させているのだ。

花火もフィリップへの思いからか、正常な感覚を失っている。

「行くな花火くん！うわっ！」

大神は花火を止めようとするがその瞬間、周りの黒い羽根が一斉に烏に変身して大神に襲い掛かって来た。

「さあ花火、僕らだけの世界へ行こう。誰にも邪魔されない世界へ……………」

「はい、フィリップ……………」

その間にも、花火はコルボーに抱かれて連れ去られてしまった。

「花火くん！くそっ……………！！」

何とか烏の群れを追い払い、大神は空を行くコルボーを追い掛けた。

その頃、ダイゴの姿は市場にあった。

「……………また随分とやっちゃって……………」

「クスン……………、ごめんなさい……………」

ため息をつくダイゴに、半ベソで謝るエリカ。

二人の手には、揃って包丁とジャガ芋が握られている。

実はエリカが何かしらのミスをして八百屋の屋台を一つ壊してしまい、罰としてジャガ芋の皮剥きを手伝わされていたのだ。

そこにちょうどダイゴが到着し、仲良く二人で皮剥きをする事になったのである。

「それにしても、本当にこのカゴ全部剥くように言われたの？」

そう言つて、ダイゴはまたカゴから一つジャガ芋を手にとった。

既に100個近い数のジャガ芋を剥いているが、山積みになれたジャガ芋は一向に減る気配がない。

そもそも売り物のジャガ芋をこんなに剥いていいのかも怪しい。しかし、エリカはキッパリと言った。

「本当です！ダイゴさん、エリカの事信じてくれないんですか？」

「いや、疑ってる訳じゃないよ。変な事頼むと思って……………」

常識的に考えて、このカゴ全部のジャガ芋を剥くのはおかしい。

もしかしてエリカの事、また何か聞き違いをしているのではなからうか……………」

また一つジャガ芋を剥き終えてダイゴがそう思った時、聞き覚えのある声が耳に届いた。

「おやおや、いつかの猿君。今度は市場のお手伝いかな？」

それは、以前ダイゴを猿呼ばわりしてけなした巴里の貴族、ダニエルだった。

前にグリシーヌに一喝されて懲りてないのか、ふてぶてしい態度は以前のままだ。

「……………！！」

「おやおや、どうしました？ミーの華やかさに、声も出ないかな？」

何かに気付いた様子で目を見張るダイゴに、ここぞとばかりに胸を張るダニエル。

しかし、ダイゴが見ていたのはそんなものではなかった。

「（あれは…………、花火さん！！）」

何と雨雲が立ち込める空に、黒い影に抱かれた花火が見えるではないか。

それと同時に、懐のスパークレンスが光を放った。

「（間違いない！怪人が現れたんだ！！）」

「まあ、君にも人を見る目があったとして、ミーも何か買ってあげよう。」

「え！本当ですか！？エリカ大感激です！」

気を良くしたダニエルに、エリカは剥いたジャガ芋を全部押し付けた。

「さあどうぞ！剥いてあるので、すぐに料理出来ますよ！」

「なっ！？ち、ちょっと待て！ミーは一つで……………！」

「遠慮しないで！お店の人も喜んでくれますよ！」

「冗談じゃない！ほら、その猿君！君も何か言っ……………！」

ダニエルがそう言って振り向いた時、ダイゴの姿は忽然と消え、代わりに店の主人が立っていた。

「おう嬢ちゃん。ジャガ芋は剥き終わったか？」

「はい！この方が全部買いたいと……………」

「待て！ミーは……………！！！」

「本当かい？ありがとよ。ジャガ芋120個で1200フランな。」

「そ……………、そんな……………！」

かくして、ここに赤い修道服に涙を呑む者がまた一人増えた。

オペラ・ガルニエ。

数ある巴里の舞台の中でも、「オペラ座」という二つ名を持つ程の
人気を集める舞台だ。

コルボーは、追い掛けて来る大神ともう一人の人物を冷やかに見
下ろしつつ、黒き衣のマドモアゼルと共にこのオペラ座にやって来
た。

「待て！花火くんをどうするつもりだ！」

「フハハハハ！男の嫉妬程醜いものはないな。そうだろう、花火。」

妨害をかい潜って追跡して来た大神に、コルボーが侮蔑を吐き捨て
る。

「大神さん、私達の邪魔をなさらないで下さい。」

「は、花火くん！」

完全にコルボーをフィリップと信じ込んでいる花火までも、大神を
睨む。

「フハハハハ！美しきマドモアゼルよ。貴女の願い、叶えましょう。
このマスク・ド・コルボーが！」

言つや、コルボーは花火を連れてオペラ座の中に消えた。

「待て！」

その後を追い掛けようとする大神。

しかし、オペラ座の入口で何かが大神を弾いた。

「くそつ、結界か！」

おそらくコルボーの仕業だろう。

これではオペラ座の中に侵入出来ない。

「大神さん！」

市場から走って来たダイゴが到着したのは、その時だった。

「ダイゴ！何故ここに！？」

思いもしない人物の登場に驚きを隠せない大神。
すると、ダイゴは肩で息を切らしながら言った。

「市場で花火さんが怪人に連れて行かれる所を見たんだ。奴は？」

「この建物の中だ。しかし、結界が張って……………」

そう言いかけた大神だったが、それより先にダイゴがオペラ座に向かって駆け出した。

「ま、待てダイゴ！そこから中には……………！」

慌ててダイゴを止めようとする大神。

しかし、ここで更に驚くべき出来事が起こった。

何と、ダイゴは大神が弾かれた結界を事もなげに素通りしてしまったのだ。

結界の存在に気付いていないのか、ダイゴはそのままオペラ座の中に入っていく。

「くっ……………、ここはシャノワールに戻らなくては……………！」

このままでは花火はおろか、中に入ったダイゴも危険だ。

大神は急いで、シャノワールに取って返した。

外界から遮断され、漆黒の闇に閉ざされたオペラ座の舞台。
その舞台の中央に、スポットライトが当てられた。

「ああ……………、フィリップ……………」

亡き恋人の笑顔にまどろみ、その場に立ちすくむ花火。
ダイゴがその舞台に駆け付けたのは、その時だった。

「見つけたぞ！花火さんをどうするつもりだ！？」

「やはり来たか、かりそめの光に縋る裏切り者よ……………」

ダイゴの姿に、コルボーの目が光った。

「我はマスク・ド・コルボー！愚かな人間共に裁きを与え、哀れな裏切り者を闇に沈める者なり！」

「何！？」

その時、闇に閉ざされた周囲が急激に歪みはじめた。

「舞台は作られ、役者は揃った、さあ、死のオペラの開幕だ！！」

「……………くっ！こ、これは……………！？」

目の前に広がる光景に、ダイゴは絶句した。
闇に覆われていたはずの舞台。

それが、豪雨に曝される船の甲板に変わっていたからだ。

「……………」

虚ろな表情で座り込む花火。

おそらく目の前の状況すら、見えていないに違いない。

「ククク……………」、哀しき黒衣のマドモアゼル。この悲劇の舞台に幕を降ろせるのは、奴の、そして貴女の死を以ってのみ！」

そんな花火にぬけぬけと言うコルボー。

しかし、そこに別の声が割り込んで来た。

「そうはせん!!」

「あ、あれは……………」

後ろには、五つの光武Fが立っていた。

グリシーヌに続き、全員が声を合わせる。

「巴里華撃団、参上!!」

「怪人!花火くんを幻から解放しろ!!」

二刀を突き付け、大神が叫んだ。

すると、コルボーはヒラリと五人の前に立つ。

「幻?この雨を、幻と思っているのかね?」

「何!?!」

大神を尻目に、コルボーはヒラリと甲板に降り立ち、語りはじめた。

「これは、美しくも悲哀に満ちた物語。オペラ座は、裏切り者と共に冷たい海へ沈んでいくのだ。」

コルボーが再び移動した。今度は煙突の上だ。

「そう……、かつてこの海に沈んだ、一隻の船のように……！」

その言葉に、人一倍反応する者がいた。
巴里華撃団の中で唯一花火の過去を知るグリシーヌだ。

「まさか……、あの日の花火の記憶を再現しようというのか!？」

「あの日?グリシーヌ、どういう事だ?」

大神に尋ねられ、グリシーヌは躊躇いながらも話しはじめた。

「あれはちょうど一年前。花火とフィリップの船上披露宴の時だ……。」

あの日、雲が立ち込めていたが、二人の幸せな笑顔で披露宴は盛り上がった。

だが、フィリップが花火に指輪を嵌めたその時、船を衝撃が襲った。隣国の水爆の誤認発射事故と言われている。

船は揺られ、笑い声は悲鳴に変わった。

そして折悪く嵐が来て、船が傾いたのだ。

「花火、この柱に掴まれ！！」

フィリップは咄嗟に、花火を近くの支柱に掴まらせた。だがその瞬間、激しい衝撃が再び船を襲ったのだ。

「フィリップ！」

船は大きく傾いた。

柱に掴まった花火は平気だったが、フィリップは雨で滑った甲板にしがみついた状態になってしまった。

「フィリップ！もう少し手を伸ばして！！」

「人を呼んでくる！フィリップ、花火！それまで待つんだ！！」

今思えば、それが失敗だったかも知れん。

花火は必死に手を伸ばしたが、僅かに届かん。私は、一刻も早く助けを呼びに船に戻った。

「フィリップ！もう少しだけ頑張って！！すぐにグリシーヌが助けを呼んでくれるから！！」

花火はフィリップを泣きながら励ましたそうだ。すると、フィリップにこう言われたらしい。

「花火……………、泣かないで。花火は、笑顔が一番綺麗なんだから……………」

「フィリップ！」

「だから、微笑んでいておくれ。花火……、愛してるよ……。」

「フィリップ……！？フィリップ！！

嫌ああああ……！！」

私が人を連れて甲板に戻ったのは、ちょうど花火の悲鳴が聞こえた時だった。

「花火！フィリップは、フィリップは無事か！？」

まさかとは思ったが、私は一縷の望みを賭けて尋ねた。
だが、花火の答えは予想を裏切ってくれなかった。

「フィリップ……。」

力のない返事。

何よりそこにフィリップがいない事が全てを物語っていた。

「まさか……、フィリップが……！？……花火、済まない！
私もう少し早ければ……！！」

謝って済むような事ではない。

しかし、花火の口から出た言葉に、私はハッとした。

「いいのよ、グリシーヌ……。」

「花火……？何故笑っているんだ……？」

雨に濡れた花火の顔は、涙を流しながら笑っていた。
理由が分からず尋ねる私に、花火はこう答えた。

「フィリップが言ったの。ずっと微笑んでくれと……………」

花火はそう言つて、フィリップの名前を呼んだ。
笑顔のまま、泣きながら。

「……………そうよね……………、フィリップ……………」

「そんな……………、結婚式の日に恋人を亡くしたなんて……………！」

予想だにしない花火の悲しい過去に、エリカも表情を暗くする。

「その通り。これは彼女が一年前に愛する者を失った記憶。」

それとは対照的に、コルボーは高らかに笑った。
まるでこの悲劇に酔いしれるかのように。

「今ここに蘇らせよう！幸せに満ちた結婚式の夜を！そこに訪れた
悲嘆劇の夜を！悲哀のマドモアゼルは幻に微笑みながら、冷たい海
の底で永久に眠るのだ！！」

それと同時に、激しい衝撃が船を襲った。

一年前に悲劇の始まりを告げた、あの時のように。

「大神さん！花火さんを助けないと！」

「そうだな。よし、急いで花火くんの所へ行くぞ！」

エリカの提案を受け、大神が指示を出す。

しかし、ここで異を唱える者がいた。

グリシーヌである。

「いや、私はあの怪人を斬る！花火の心を弄ぶ外道を、許してはおけん！」

「あんな所まで行ったら危ないよ！イチローが海に落ちちゃうじゃない。」

「おいおいどうすんだ？バラバラじゃねえか。」

ロベリアの指摘通り、エリカ以外は大神の指示を聞こうとしない。確かにコルボアの卑劣な手口は許し難いし、直接波に曝される甲板は危険だろう。

しかし、大神は何よりも花火の救出を優先した。

「頼む、今は俺の指示を聞いてくれ。誰かが指揮を取らなければ、本当にバラバラになる。」

部隊が分裂してしまえば、チームワークどころではなくなる。

ただでさえ一刻を争う状況なのだ。

こちらからピンチを招く余裕はなかった。

「確かに。では隊長、指揮を任せるぞ。」

「イチロー、無茶しないでね。」

「アンタもやるねえ。決まったんなら早いとこ動こうぜ?」

「よし、甲板に移動して、花火くんを救出するぞ!」

大神の指示を受け、五つの光武Fは一斉に動きはじめようとした。だがその時、コルボーの怪しい笑い声が聞こえて来た。

「フハハハハ! そんな事をしても無駄だ。さあ、来るがいい。宇宙を蹂躪する、魔の大怪獣よ!!」

コルボーが腰に下げたレイピアを抜き、雲に覆われた空に向けた。その時、真上から微かに鳴き声が聞こえて来たかと思うと、巨大な黒い影が物凄い勢いで船の側に現れた。

「あ、あれは……!!」

その姿に、大神は戦慄した。
何故なら……。

「ポキヤーツ!!」

怪獣の咆哮が海を揺らし、船を揺るがした。
間違いない。

いや、間違いようがない。
五角形の身体と、ペンギンのような顔。
そして腹部にあるもう一つの口。

「ベ……………、ベムスター……………!!」

まさに3年前の悪夢を彷彿とさせる、宇宙大怪獣ベムスターがそこにいた。

「……………そういう事が……………」

船の煙突からベムスターを見下ろし、ダイゴが呟いた。
すると、その後ろからコルボーが口を開く。

「あの愚かなる男から逃げている時に少し記憶を覗かせてもらった。
かの男が最も強かったと戦く大怪獣。貴様に奴が倒せるか!？」

それは、ダイゴがティガである事を見越しての、コルボーからの挑発だった。

花火の生きる事に絶望して生まれた闇の中で、巴里の平和を守る巴里華撃団とウルトラマンティガをまとめて始末する。
それがコルボーのシナリオだったのだ。

「やってやるさ。光の力、見せてやる……………!!」

ダイゴは決意と共に、スパークレンスを暗黒の空に掲げ、叫んだ。

「ティガー……ッ!!」

「チャーツ!!」

大空を舞い、ティガがベムスターの前に降り立った。

「ウルトラマンティガ!!」

突然の巨人の登場に驚く大神。
すると、隣にいるエリカが叫んだ。

「大神さん!今の内に花火さんを!」

「よし、分かった。みんな、行くぞ!!」

「了解!!」

ティガは、ベムスターを船に近付けないよう船を背中に庇い、ベムスターと対峙した。

怪獣の大きさと生まれる波の高さは半端ではない。

そんな波が船を襲えば、たちまち甲板にあるもの全てが流されてしまう。

絶対にベムスターを船に近付かせる訳にはいかなかった。

「チャッ！」

ティガはベムスターの注意をこちらに向けさせるべく、ハンドスラッシュを放った。

青白い小さな光弾が、ベムスターの顔を掠める。

「ビィー！！」

すると、狙い通りベムスターは標的をティガに変えて襲い掛かって来た。

「チャッ。」

ティガは避ける事もなく、突進して来るベムスターの片腕を捕まえ、横に投げ飛ばした。

「ビキュッ！？」

一回転して海にたたき付けられるベムスター。

そこに、ティガが馬乗りになって追い撃ちをかけた。

「ハッ！ハッ！チャッ！」

激しいパンチのラッシュを浴びせるティガ。形勢がティガに傾いたかと思われたが、そう簡単に勝たせてくれるような相手ではなかった。

「ビィッ！！」

何とベムスターは、腹部の口に海水を吸い込ませ、一気に吐き出したのである。

「ジュワッ！？」

思いも寄らぬ反撃に吹き飛ばされるティガ。すると、ベムスターは両翼を羽ばたかせて空に舞い上がった。

「ポキヤーッ！」

そして頭からミサイルの如く、ティガ目掛けて飛び込んで来たのである。

「ジュワッ！？」

大きく後ろに吹き飛ばされるティガ。

ベムスターは更に追い撃ちをかけるべく、再び空へ舞い上がる。しかし、ティガもやられてばかりではなかった。

「ンウウウ…………、ハッ！」

額のクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジする。

そこに、ベムスターがまた頭から突っ込んで来た。

「ポキヤーッ!!」

しかし、パワータイプにチェンジしたティガには、ベムスターは格好の的だった。

「チャッ!」

何とティガは、マルチタイプの時は吹き飛ばされた程のベムスターの一撃を、いとも容易く受け止めたのである。それだけではない。

ティガはそのまま脳天から、ベムスターを地面にたたき付けたのだ。ウルトラヘッドクラッシュャー………敵を持ち上げて脳天から地面に沈める、パワータイプの豪快な力技だ。

「チャーッ!!」

「ビキユッ!?!」

凄まじい轟音と共に、ベムスターの頭が海中に消える。

「ハアアア……………!!」

ティガは弱ったベムスターにトドメを刺すべく、胸の前に圧縮したエネルギーボールを生み出す。

「あっ!デラシウム光流だ。」

気付いたコクリコが叫んだ。

ゲオザークやアンタレスを倒して来たティガの必殺技。

しかしその場の誰もがティガの勝利を確信する中、大神がハツとした様子で叫んだ。

「駄目だティガ！デラシウム光流は使っなっ！！」

だがそれはもう遅かった。

「ダアッ！！」

赤く光るエネルギーボールが、一直線にベムスターに撃ち込まれる。だが次の瞬間、信じられない事が起こった。

「ビーンッ！」

ベムスターが待ってましたと言わんばかりに腹の口を広げた。すると、腹の口がデラシウム光流をまるごと吸い込んだのである。

「う、嘘……………！」

「馬鹿な！デラシウム光流を吸収したと言っのか！？」

驚愕の表情を浮かべる巴里華撃団。

しかし、ベムスターは更なる反撃に転じた。

「ポキヤーンッ！！」

何と、先程吸収したデラシウム光流のエネルギーを、角から打ち出して来たのである。

「ジュワッ!？」

不意打ちに近いカウンターに吹き飛ばされるティガ。すると、胸のカラータイマーが点滅をはじめた。

大技のデラシウム光流の直後にカウンター攻撃を受けたために、エネルギーが大幅に減少してしまったのだ。

「ビーツ!!」

これを好機と見たか、ベムスターは再び空に舞い上がり、ティガに襲い掛かって来た。

「ティガがあれ程までに苦戦するとは……。何者なのだ、あの怪獣は？」

これまで負け無しかったティガの苦戦する様子に、グリシーヌがポーンを切り捨てながら呟いた。

すると、唯一その怪獣を知る大神が答えた。

「それがベムスターだ。奴は様々な光線のエネルギーを吸収し、自分のものにできるんだ。」

3年前に明治神宮でウルトラマンジャックを撃破した唯一の大怪獣。それがまさかこんな状況で現れるとは。

「大神さん、あそこ！」

エリカが甲板の奥を指差した。

そこには、豪雨に曝されず濡れになった花火の姿があった。

「花火くん!!」

大神は周囲にポーンがない事を確認すると、光武Fから飛び出した。

「…………フィリップ…………。」

「花火くん、目を覚ませ！奴はフィリップさんなんかじゃない！君は騙されているんだ！」

虚ろな表情のまま恋人の名前を呟く花火に、大神は肩を揺すって語りかけた。

しかし、そこにコルボーが襲い掛かった。

「あくまでも邪魔だてする気が、愚かなる男！」

「うわっ!？」

横から突き出されたレイピアを避けたその時、船を激しい震動が襲い、甲板が大きく傾いた。

「大神さん！」

「イチロー！」

バランスを崩して甲板に張り付く形になった大神。
エリカ達は助けに行こうとするが、傾いた甲板の上では思うように動けない。
すると、ここで花火が叫んだ。

「フィリップ！死なないで、フィリップ！！」

おそらくフィリップが波に吞まれた時の事を思い出したのだろう。
花火は泣いていた。

「大丈夫だ、花火くん！俺は絶対に死なない！！」

「え……………？ハッ……………お、大神さん！！」

大神の叫びが心に届いたのか、花火はハッとした表情で大神を見た。
コルボアの幻術が解け、正気に戻ったのだ。

「花火くん……………、気がついたんだね。」

大神が安堵の表情で花火を見た。
一方の花火は、突然変化した周りの状況に戸惑ったが、少なくとも危険な状態である事は分かる。
自分は一体どうしたというのだろうか。

レストランでコルボーに幻術をかけられた時から記憶が飛んでいる。先程まで目の前にいたフィリップはなく、目の前には大神が一年前のフィリップと全く同じ状況に立たされていた。

「花火くん、俺は絶対に死なない……。だから、君も死ぬ事なんて考えるな！」

大神は甲板にしがみついたまま、花火に語りかけた。

「もしフィリップさんが生きてここにいれば、俺と同じ事を言っただろう！」

「フィリップが……。。」

その時、花火は気付いた。

「いつまでも微笑んで。」

フィリップが遺した言葉の意味。

それは天国でフィリップに微笑みかける事ではなく、これから出会うであろう沢山の人にフィリップの愛した微笑みを見せてほしい……。。

つまり、生きてほしいと。

「大神さん！」

花火は近くの柱に掴まり、大神に手を伸ばした。大神を助け、この状況から生きて脱出するために。

「花火くん……。！」

差し出された手を掴もうと手を伸ばす大神。
しかし、それを許さない者がいた。

「おのれ………！戯れ事はそこまでだ！！ベムスター！あの愚かな
る男を先に始末しろ！」

「ポキヤーツ！」

コルボーの命令を受け、ベムスターは今まで戦っていたティガに背
を向け、船に向かって来た。

「チャツ！」

船に近付かせまいと、ティガは後ろから掴み掛かった。
しかし、エネルギーを消耗して弱った身体ではベムスターの進撃を
食い止められない。

「ポキヤーツ！」

ベムスターはティガを翼で軽く払いのけ、更に船に近付く。
すると、ティガは再び額のクリスタルを発光させた。

「ンウウウ………、ハツ！！！」

ティガの身体が紫に変わる。

パワータイプからスカイタイプにチェンジしたのだ。

そして、ティガは赤く点滅するカラータイマーに右手を当て、ハン
ドスラッシュの要領で青白いエネルギーをベムスターの頭上に放っ
た。

ティガフリーザー…………凍てつく冷気を敵の頭上で爆発させ、凍らせてしまうスカイタイプの光線技だ。

「ビイツ!？」

船の眼前に迫っていたベムスターは、完全に凍り付いた。

「ハアアア……………!」

ティガはトドメを刺すべく、両手を左右に水平に伸ばし、頭上でエネルギーを集中させた。

「ジュツ!」

ベムスターの背中に、必殺のランバルト光弾が発射された。

青白い光の矢がベムスターの背中に深々と突き刺さる。

そして、そこから四方に亀裂が入り、ベムスターは粉々に碎け散った。

「無駄だ!マドモアゼルが死を選ばぬ限り、この悲劇に幕は降りん!」

コルボアの叫びと共に、かつてフィリップを飲み込んだ高波が迫って来た。

しかし、幻から目を覚ました花火は、コルボアの思い通りにはならなかった。

「大神さん…………、私も…………私も……………生きたい!」

花火が今までにない大声で、そう叫んだ時だった。

突然花火を目に見える程の霊力が包み、一気に爆発したのだ。

「な、何！？グアアア………！！！」

その霊力の波動はコルボーを吹き飛ばし、オペラ座の壁にたたき付けた。

すると、その拍子に幻が消え、周りは沈み行く船はオペラ座のステージに変化した。

花火の霊力の波動と生きる事への希望が、コルボーの幻を打ち消したのだ。

「（花火くんに、これ程までの霊力があつたなんて………。）」

やはりあの時の霊測機の反応は故障などではない。

花火は、コルボーの幻を打ち消せる程の霊力を秘めていたのだ。

「おのれ………、我が最高の舞台を汚しおって………！！！」

「黙れ！乙女の心を弄ぶ不届き者めが！」

憤怒の表情を見せるコルボーに、毅然と言い放つグリシーヌ。

大神はそれに続くように花火を庇った。

「貴様に花火くんは渡さない！花火くんは、俺達を守る！！！」

「お、大神さん………！！！」

目の前で大胆な発言をする大神に、思わず頬を赤く染める花火。すると、その隣によく知る人物が姿を見せた。

「大神さん！花火さんの事は僕に任せて！」

「ダイゴ！無事だったのか！」

それは、大神より先にオペラ座に潜入していたダイゴだった。特にコルボーに襲われた様子もなく、大神達は胸を撫で下ろす。

「よし、ダイゴは花火くんを連れて、そこにあるダストショットで避難してくれ！」

「分かった。気をつけてね！」

「大神さん、ご武運を………！！！」

そう言い残してオペラ座を脱出する二人。

それを見届けた後、大神は二刀を構えて叫んだ。

「みんな気をつけろ！蒸気獣が現れるぞ！」

「愚かなる者共よ！我が漆黒の闇に沈むがいい！行け、ポーン共よ！」

コルボーの指令で、ポーン達が一斉に襲い掛かって来た。

「じ、こじは……？」

「シャノワール……だよね？」

ダストシュートを抜けて出た場所に、ダイゴと花火は仰天した。
そこは、自分達もよく知っているテアトル・シャノワールだったからだ。

「大丈夫かい？ここなら、もう安全だよ……。」

「グラン・マ！じゃあここはシャノワール！？」

「もしかして、あなたが……。」

目の前に広がる机には見た事もない設備が施されているし、真ん中には巴里の地図が映し出され、ちょうどオペラ座の地点が赤く光っていた。

「そう。このシャノワールが、あたし達巴里華撃団の本部なのさ。
気付かなかったろう？」

その言葉に、二人は啞然とするしかなかった。

「観客が舞台に上がる……………！？そのような事、断じて許さんぞ！」

観客席に降り立ち、コルボーが舞台の上を睨んだ。

そこには、配下のポーン達を全滅させた大神達の姿がある。

「花火の心を弄ぶ不屈き者め！その罪、万死に値する！」

斧を突き付け、猛然と言い放つグリシーヌ。

すると、コルボーが言い返す前にロベリアが言い返して来た。

「友情ゴツコはもういいからさ、さっさと片付けようぜ？」

「何だと！？もう一度言ってみろ！！」

すかさず食いつくグリシーヌ。

しかし、これが敵に付け入る隙を与えてしまった。

「仲間割れか？……………面白い。この我が演出してやろう。無知にして無能な観客共の、愚かなる最期を！」

刹那、周りの空間が一瞬大きく歪んだ。

「ん……………？こ、これは！！」

後ろを振り返った大神は顔を凍りつかせた。

何故なら、後ろにいたはずの仲間達がいつの間にか、ポーンにすりかわっていたからである。

「そ、そんな！いつの間に！？みんな、何処にいるの！？」

辺りを見渡しても、仲間の姿は見えない。

エリカが慌てる中、グリシー又は斧を手に笑った。

「ふっ、小賢しい！この程度の数、すぐに切り伏せてくれる！！」

しかし、今度ばかりはそうもいかなかった。

「チツ、雑魚のくせに何て強さだ！？」

切り掛かってきたポーンの一撃を爪で防ぎ、ロベリアが悪態をついた。

強いのは当たり前だ。

何故な、今ロベリアを攻撃したのは、外ならぬグリシー又なのだから。

コルボーは大神達に幻術をかけ、仲間をあたかもポーンに見せ掛けたのだ。

「フハハハハ！最高の茶番だ。仲間同士、醜く殺し合うがいい！」

たちまち仲間同士で戦いはじめた巴里華撃団に、コルボーが高笑いを上げた。

本来なら姿がポーンとはいえ、動きのクセなどから仲間を判断する事は可能だ。

しかし先程のロベリアとグリシー又のように、巴里華撃団にはチームワークが低いという致命的な弱点があり、仲間の動きなど思い付きもしないのが現状だった。

しかし、その企みを阻止する者がいた。

「グガアアツ！な、何事だ！？」

突然肩を掠めた何かにコルボーが怯んだ。
見ると、目の前の床に矢が突き立っている。

「わっ！？……………そうか、幻だったんだ！」

その拍子に幻術が解け、コクリコが叫んだ。
周りにいたはずのポーン達は、仲間に戻っている。
一体誰が助けてくれたのか。

疑問に思う大神達だったが、グリシーヌには心当たりがあった。

「この暗闇の中で正確に狙うあの腕前……………、まさか！！」

見ると、テラスの上に光武Fが佇んでいた。
そしてもう一人……………、

「北大路花火、参ります！！」

戦闘服に着替え、弓を構えた花火の姿がそこにあった。
あれから作戦司令室で大神達のピンチを知った花火は、グラン・マ
に頼んで予備に置いてあった光武Fに乗り込み、出撃したのである。

「おお、我が黒衣のマドモアゼルよ……………。我のもとに戻るのだ……………」

花火が戻って来た事に安堵してか、コルボーは再びフィリップに姿を変えて花火の前に現れた。

「さあ、花火。こっちにおいで……………」

「……………」

花火は無言で目の前の恋人を見た。

それが本物でない事は十分承知している。

どんなに愛しいあの声に囁かれても、応える訳にはいかなかった。

「長い間、一人で淋しかったろう？僕の側においで……………」

「フィリップ……………」

花火は弓を下ろすと、静かに目を閉じた。

胸に手を当て、心を落ち着かせる。

「フィリップ……………、私に貴方を忘れる事は出来ない……………」

「そうだろう？さあ花火……………」

笑いかけるフィリップ。

すると、花火はしっかりとその顔を見据えて言った。

「でも、いつまでも貴方の笑顔に縋る訳には行きません。フィリップも、それを望んではいないでしょうから。」

「花火？何を言うんだ。僕は君を迎えに来たんだよ！」

「ごめんなさい…………、私はまだ、貴方の許へは行けません。」

それは、過去との完全な決別だった。

花火は自ら、コルボーの幻を打ち破ったのだ。

「…………それと、フィリップに会わせてくれて、ありがとうございました…………。」

コルボーに一礼を返す花火。

その瞬間、彼女の胸の中の闇が急速に消えていくのを、コルボーは感じ取った。

「マドモアゼル…………、貴女までも我を拒み、光を見出だすというのか…………！？」

コルボーは態度を一変させ、花火にレイピアを突き付けた。

「幕だ！貴様達の死を以って、幕を降ろしてくれる！！」

「怪人が嫉妬か？見苦しいぞ、マスク・ド・コルボー！！」

ここぞとばかりに言い返す大神。

すると、その言葉がコルボーの逆鱗に触れた。

「黙れ！蒸気獣『セレナード』、夢幻の闇よりいで、我が漆黒の翼となれい！！」

言うや、コルボーはマントを空に放り投げた。

すると、マントはたちまちに鳥の形をした蒸気獣へと姿を変える。

「巴里華撃団！貴様らの朱き血で、このオペラ座を染めてくれるわ
！！」

その叫びと共に、今度はコルボーの真後ろに黒い光が集まった。
すると、黒い光はたちまちに一匹の怪獣へとその姿を変えた。

「我がしもべ、変形怪獣ガゾート！我と共にあの愚かなる者共を引
き裂くがいい！」

「グワーツ！！」

コルボーの声に応えるように、ガゾートが咆哮を上げる。
大神はガゾートとセレナードを見据え、指示を出した。

「目標、敵蒸気獣及び怪獣の撃破！行くぞ！！」

「了解！！」

「オーナー、敵は新たに敵怪獣を放って来ました！」

「生体反応がありません！怪人が生み出した人工生命体みたいですう！」

「……………多分負の感情や心の闇を実体化させたんだろうね。となると、ベムスターもあの怪獣の生み出した幻と見るべきか……………」

メルとシーの報告を元に、グラン・マはモニターに映し出されたガゾートなる怪獣を分析した。

相手は幻でオペラ座を包む程の力を持っている。

特に大神の記憶からベムスターのデータを盗み出してコピーする手際の良さは、敵ながらあっぱれだ。

おそらくコルボーにとって、闇を形に変える事など造作もないのだろう。

瞬時にあの怪獣を召喚して見せたのが、何よりの証拠だ。

「まあ、いくら闇を集めようがムツシュと彼の前には無力だよ。」

「彼？誰の事ですか？」

首を傾げるシー。

すると、メルが気付いたように笑った。

「オーナー、その彼が到着したようです。」

見ると、モニターにはガゾートの前に立ちほだかる光の姿があった。

「あー、ウルトラマンティガだー!!」

「（頼んだよ……………ダイゴ……………）。」

再び現れたティガは、ガゾートの姿を見つけるや掴み掛かった。

「チャッ！」

「ガアアアッ！」

激しくぶつかり合うティガとガゾート。

その隣で大神達もまた、コルボアの操るセレナードと戦っていた。

「おのれウルトラマンティガ！貴様も我の舞台を邪魔だてするか！」

怒りを隠そうともせず、セレナードは翼を羽ばたかせて突風を巻き起こす。

「命の瞬きを見せておくれ！ああ、夜ね闇よ！レ・デスフィネス！」

身を切り裂く突風が襲い掛かった。

大神達は反撃を試みるも、強い向かい風に押し返されて近付けない。一方でティガもまた、ガゾート相手に苦戦を強いられていた。

「ハッ！」

気合いと共に正拳突きを繰り出す。

しかし、その一撃はガゾートの身体を突き抜け、そのままティガの腕を捕らえてしまったのだ。

「ジュワッ!?」

ティガは慌てて引き抜こうとするが、ガゾートの身体は復元されてしまい、中々引き抜けない。

その間にガゾートは、満足に動けないティガに攻撃をはじめた。

「ガアアアッ!!」

口から黒い光弾を次々と連射する。

至近距離からの激しい攻撃に、ティガのカラータイマーは程なく点滅をはじめた。

「フハハハハ! ガゾートは闇より生まれし我がしもべ。貴様ごときに倒せはしない!」

勝ち誇ったようにコルボーが笑う。

しかし、それが裏目に出てしまった。

「（闇から……………? それなら……………!）」

ティガは何か気付いたように動きを止める。

そして、胸のカラータイマーを発光させた。

まばゆい閃光で敵を牽制する、タイマーフラッシュである。

「ガアアッ!？」

突然の光に驚き、ガゾートはティガの腕を離して後ろに下がった。

「ハッ!」

ティガは発光するカラータイマーの前に両腕を交差させた。すると、カラータイマーに四方八方から光が集まってくる。タイマーフラッシュスペシャル……光に弱い相手に限定して、凄まじい光量の光を浴びせるタイマーフラッシュの強化盤だ。

「チャッ!!!」

両腕が降ろされ、目が眩む程の光がガゾートに浴びせられた。闇が形を変えたものなら、まとめて光で掻き消す事が出来る。ティガはそう考えたのである。

「ガアアアア……!!」

光に全身を貫かれ、ガゾートは断末魔の叫び声と共に跡形もなく消滅した。

「ば、馬鹿な……!! 我の操る闇が、そのまがい物の光に負けたというのか……!？」

自らが闇から生み出した怪獣が容易く敗れ去り、コルボーは呆然となる。

その隙を、花火は見逃さなかった。

「今です! 北大路花火、一の舞……、金枝玉葉!!」

ボウガンから放たれた矢は、寸分の狂いなくセレナードの翼を射抜く。

「なっ……………！！」

飛行能力を失い、落下するセレナード。

その下で、大神が二刀を抜いて待ち構えていた。

「狼虎滅却……………、刀光剣影！！」

青白い稲妻が大神の二刀からほとばしり、セレナードの胸を×の字に切り裂いた。

「かりそめの光に負けるとは……………、我が闇も、かりそめに過ぎなかったというのか……………！！」

予想もしなかった舞台の結末に驚きつつ、コルボーはセレナード諸とも爆発四散した。

「……………申し訳ありません。私のために、皆さんを危険に晒してしまつて……………」

戦いを終え、花火が大神達に頭を下げた。

元々の始まりは、自分がフィリップの過去を引きずっていたから。そう思い、自責の念に駆られたのだろう。

「そんな事はないよ、花火くん。君のおかげで、俺達は勝てたんだ。」

「胸を張れ、花火。そなたの今の姿に、きっとフィリップも喜んで
いるだろう。」

その事を察し、大神もグリシーヌも花火に笑顔で答える。
すると、ようやく花火も笑顔を返した。

「は、はい……………」

「よし、隊長。いつもの締めをやらねばな。」

花火の笑顔に頷き、グリシーヌが大神に言った。

「そうだな！おいで、花火くん。」

「え、ええっ……………？」

手招きする大神に、躊躇いながらも近付く花火。
そして……………、

「勝利の……………ポーズ……………」

「決めっー!!」

「チャッ。」

その様子を見届け、ティガは静かに消え去った。

その日の夕方、大神は花火と共にフィリップの眠る墓地に足を運んだ。

「フィリップはいつも優しくて……、私も彼に甘えてばかりでした……。」

正に相思相愛。

フィリップは、花火にとって運命すら感じさせる人だったろう。大神の隣で、花火はポツリポツリと呟くように言った。

「でも、甘えてばかりではいけないんですね……。」

「ああ。フィリップさんが安心出来るように、強く悲しみを乗り越えるんだ。」

大神が花火の肩に手を置いた。

「君はフィリップさんに心から愛を受けた。今度は君の番なんだ。」

「私の………?」

「そう。君が誰かを愛する番だよ。君は、それが出来る人なんだから……。」

優しく笑う大神。

その笑顔に、花火はフィリップとはまた違う温かさを見た。

「大神さん……………」

花火は、大神の胸に顔を埋めた。

その胸の温もりは、フィリップに抱きしめられた時の思い出を彷彿とさせた。

「今だけ…………泣かせて下さい。…………これで最期にしますから……………」

「ああ、いいよ……………」

大神は、優しく花火の黒髪を撫でた。

花火の頬を伝う涙が、揺らめく夕陽に照らされて光った。

揺らめく想いを断ち切ろうとする彼女の様子を、見守りながら……………。

「ほら、ピエール急いで！」

客で賑わうシャノワールの客席に、ダイゴがやって来た。

その後ろには、親友のピエールの姿もある。

二人はエリカから花火も舞台に立つと聞いて、シャノワールにやって来たのだ。

「今宵はプログラムを変更して、新しいメンバーを紹介します！」

「あ、始まるよ！」

「ハハハ、ダイゴ。そう慌てないで。ここからでもよく見えるよ。」

司会のメルの声に、客席の視線が一斉にステージに向く。すると、今度はシーが続いた。

「東洋の黒真珠！その名もタタミゼ・ジュンヌ！」

その言葉と共にスポットライトが照らされ、タタミゼ・ジュンヌと花火が姿を現した。

タタミゼ・ジュンヌ……フランス語で大和撫子という意味だ。

日本流の着物を纏い、奥ゆかしさを表現した踊りで客を魅了する花火に、ダイゴやピエールはもちろん、観客達全員が釘付けとなった。

「へえ……、綺麗だね。」

「花火さん……。」

初めて会った時は、細い小枝のようにか弱かった花火。

しかし、今の彼女は違う。

悲しい過去を断ち切り、明日を見る強さを得た。

その姿が、どれだけ美しいか……。

「…………私は、もうしばらくみんなと頑張って行こうと思います。
悲しい事や辛い事も、逃げずに受け止めて見ます。」

拍手に包まれる中、花火は心の中でフィリップに語りかけた。
今までのように甘えるのではなく、しっかり自分の決意を以って。

「だから…………、見守っていて下さい…………。フィリップ…………。」

フィリップの愛した微笑みで、沢山の人々に笑顔や喜びを与える花
火。

そんな彼女に、フィリップが何処かで笑いかけた気がした。

「……………光の巨人。まさか我等に反旗を翻すとは……………」

闇の中に、野太い声が響いた。

「ウルトラマンティガ…………。我等に刃向かった罪、万死と心得い
！」

揺らめく想いは（後書き）

《次回予告》

メル、聞いた？オーナーがお休みくれるんだって！

それなら、シャンゼリゼにお買い物に行きましようか。

あ、大神さん！その人お友達ですかあ？

次回、サクラ大戦3！

《燃ゆるシャンゼリゼ》

愛の御旗のもとに……………

巴里はいいなあ〜！

……………パン硬いけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3428y/>

超古代の星

2011年11月20日02時15分発行